

日光の効用——日光は非常に大切なるもので、脳にも大なる所の關係があるものだ。即ち人の氣力は太陽によつて大いに興奮せらるゝもので、人若し暗い室にのみ閉ぢ籠つてゐたならば、決して善い思想は浮ばぬものだ。然るに活潑有爲の青年が暗々たる小屋に區々ど勉強ばかりしてゐても、其の割合に進むものは無いのみならず、大器晩成といふ人物にはなれぬ。故に廣々とした山野に散歩して日光に觸るゝといふことは、心身の衛生に於いて最も大切なることである。古人も小人閑居爲不善と言はれたのは、これ誠に千歳不朽の金言と評せねばならぬ。

同時に二様以上を考ふること——同時に二様以上の事を轉々考へてはならぬ。何となれば、脳は甲の事を決断せんとしてゐる中に、又乙のことが來る、これを亦決定せぬ間に丙を考へねばならぬ、その忙はしいことはいふまでも無い。従つて其の疲るゝことは一通りでないのだ。若し一つ事柄ならば、其の道理が聯絡してゐるために、左程困難を感せぬけれど、事柄が違へば、違ふほど刺戟が多く、遂に何れの事も深く印象せず、疲れ衰ふるのだ。故に成るだけ専心一意が腦のた

めに甚だ善いのである。管に腦のために善いのみならず、物を記憶する上に於いて、大いに宜しい、即ち一舉兩得である。然るに爰に人あり、物理書を講じながら、故郷の家事を心配し始めた、ところが其の書物の方は、器械的に讀んだために、解せられぬから、又讀み返した、すると今度は、朋友と喧嘩をしたことが、思想に浮ぶ、これでは不可ぬと、又本を睨めば、續いて酒、菓子、お茶など、種々難多なる所の妄念が起つて、遂に頭痛がし、ブツク枕と華胥の國に行くのである。

心配は腦の毒——楽しむことは、腦のために非常に藥となるものである。之に反して、心配は腦を傷むるところの斧である。凡て何程考へたごと、見込の無いことに、思考を費せば、腦に訴ふることばかりが、非常に多いために、非常に腦の疲勞を來すのである。殊に學問しようといふ青年は、心を虚くし、假令陋巷に在つて、一簞の食を求め易からざるも、能く其の前途を所置して、猥に馬鹿心配せぬやうにするが肝要である。

腦を打つこと——腦頭蓋は傷み易いから、打撲せぬやうにせねばならぬ。殊に幼い小兒を戒め、んために頭を打つなどは、衛生思想に眩い野蠻の教育である。硬

い枕を用ふるは頭蓋を壓迫し、従つて腦に大害を與ふるものである。空氣を含む
ことの多い柔かな枕を用ひねばならぬ。

脊髄の反射作用——腦を疲さぬ様にするには脊髄の反射作用を利用する工夫
せねばならぬ。脊髄の反射作用とは、一つの刺戟のため、精神に由らずに起る反
動である。例へば卒かに閃めく光が目の前に來れば、直ちに目を閉ぢ、或は何か
が鼻粘膜に觸るゝと噴嚏をする如きをいふ、これ腦の命令を待たずに所置する
のである。即ち意識を用ひぬ所の所置である。これを利用すればする程腦を
休むることが出来るものだ。されど此の反動は今故意に出来るものではなく
て、熟練から來るものである。若し人が歩行しようとするとき、先づ左足を一歩
出し、今度は何れの足を出すかと腦に訴へ、腦は右足を出せよと命令する、然らば
次は何れの足を出さうか、次は如何次は如何と一々其の命令を待つとせば腦は
其の煩雜に堪へぬことは言ふまでもないであらう。然るに熟練すれば更に意
識を費さずに走ることも出来るのである。又道理を考へながら其の道理を書
き綴り、其の字畫には更に意を用ひぬなども皆熟練の結果である。であるから

物は最初困難であつたことも遂に反射作用で出来るやうになつて了ふ。凡て
習慣とか癖とかいふものは取りも直さず反射作用の結果である。故に人は善
い習慣をつけねばならぬといふことも、また以て衛生上の主眼なるところであ
る。

心肺論

深呼吸の利益——我等は晝夜間斷無く空氣中の酸素を吸ひ、其の酸素は肺靜脈
を通つて心臟に入り、血管を傳へ身體中の組織に配つて後炭酸を受け取り、再び
心臟に來つて肺臟に入り、遂に之を呼き出すものなることは誰でも知つてをら
れるでせう。而して其の酸素は人體に甚だ必要なるもので、炭酸は非常に害あ
る物なることは、これ亦既に御承知であらうと思ふ。然らば言はん、其の必要な
る酸素は可成多く吸ひ、炭酸は可成的多く呼き出さねばなりません。乃で此
の目的を達せんと思はゞ、時々深呼吸をして肺臟内の炭酸を殆んど悉く驅逐せ
ねばならぬ。元來我等が通常の呼吸では炭酸を少し宛しか排出せしめること
の出來ぬことは、恰も河の流れは其の上層の水が次第に少しづつ、新陳代謝する

ので、底まで新陳代謝せしむるには多くの時間を要するやうな道理だ。故に肺臓を常に清潔にしておかうと思ふならば時々深呼吸をなすが宜く、肺臓を不潔にして結核菌でも自生せしめようと思はゞ、深呼吸をせずにも炭酸瓦斯の多い室内に閉ぢ籠つてゐるが可い。諺に水清ければ魚住ますと。更に余は言ふ、肺清ければ結核菌生ぜずと。深呼吸の方法は戸を開いて大空に向ひ、身體を反るやうにして、スーと出来るだけ空氣を多く吸ひ、然る後身體を屈めて、プーと出来るだけ炭酸を多く吐くこと、實ては七八回もなすのである。之を業務や學問に倦んだ心の起る毎に繰り返せば、再び心身が興奮して勇氣の出て来るものだ。誰も惜しまぬ清風は宇宙に充滿してゐる。吸へ〜新鮮の空氣を。序に此の深呼吸によつて精神を冷靜にする策を述べよう。

精神を冷靜にする策——少しの腹立にも劍を抜いて立ち僅かの得意にも揚々として威張り、忽ち喜び、忽ち悲しむやうでは何事を爲す上に於ても成功し難い。されば、青年諸君が將來立派な人物にならうと思はゞ、俄に怒らず、俄に喜ばず、即ち精神を冷靜ならしむる養成をせねばならぬ。といふことだけは誰でも言ふ

に精神冷靜
にする策

が、借何うしたたら其の冷靜が養成出来るかと云ふ一事に至つては述べる者が少いやうだ。乃で其の冷靜を養成する方法は極めて單簡であつて、之を一言に盡せば、何時も口を閉ぢて鼻より徐かな深呼吸をしてゐるのである。即ち書物を見てゐても、數理を考へてゐても、人と話をしてゐても、散歩をしてゐても、乃至は嬉しいことがあつても、悲しいことがあつても又はイザ近火といふ早急な場合にも、或は強盜が白刃を閃かして來ても、矢張この徐かな深呼吸をしてゐると膽力自然に備り、大山崩れて來ても、從容事を所置するの策が浮び出で、周章狼狽爲すことを誤るやうな失敗を來さぬ。小生の柔道先生が形の稽古を教へらるるときに、心を丹田即ち臍の邊に据ゑよと言はれるが、此の丹田に据ゑるといふも、矢張徐かな深呼吸に歸するのである。所で今又前章を繰り返すやうだが、徐かな深呼吸は普通人の爲す呼吸よりも其の吸氣時に於て空氣が徐ろに肺臓に充滿し、充滿の結果は肺臓を載せてる横隔膜が大いに垂れて腹部を押し従つて腹部は大いに膨脹する、それより呼吸時には又徐ろに空氣を多く吐くから普通人の呼吸よりも腹部が多く運動する譯となる。乃で此の腹部には「第二の腦」と

一七〇
もいふ可き神経系統の大塊が有つて支那の古人が言つた膽力なるものも此處に存するのだ。故に此の部に訴へて如何なることも所置するといふは腦の刺戟を輕からしめ、膽力を養成する上に於て大なる効果があるのであらう。次に之を衛生上から論じて、鼻呼吸は空氣の塵埃を鼻毛で濾すのみでなく、空氣が迂餘曲折し、温まつて入るから之を口より呼吸するものに比ぶれば、寒中などは肺臟の刺戟が少い道理。又深呼吸は前述の如く、炭酸瓦斯を排除することが常の呼吸よりも多くて、爲に肺臟を清潔にし、兼ねて血液の循環を佳良ならしむるの利益あるは言ふまでも無い。今一つ人相上からいつても、口を開けて茫然呼吸してゐるのは如何にも愚相を呈はすが、之に反し、口の周圍にある環口筋を堅く閉ぢて、鼻より徐かに深呼吸をなし、恰も息を殺してゐるかの如くに見ゆるは、何と無く堂々たる大人の相が備るものである。任地諸子よ、小生は更に繰り返して言ふ、腹が立つたら徐深鼻呼吸、悲しかつたら徐深鼻呼吸、優等に卒業しても徐深鼻呼吸、落第しても徐深鼻呼吸、何事も徐深鼻呼吸で日を送つて下さいと書き終つて、小生も徐深鼻呼吸をした。

五官論

眼の衛生を實踐したる人の實驗談——今は故人になられたが、易學で名高い文學博士根本通明氏は八十三歳で壯者も及ばぬ丈夫な人だといふことで、余は嘗て態々訪ねて其の衛生談を聞いたれば、氏は色々澤山答へられたが、併し、これを悉く紹介するの必要も無いから、今茲に眼に關する事のみを申すと、氏曰く、私の視力の衰へぬ原因は四つあらうと思ふ。(其一)は若い時から鎗術や擊劍などの運動を勵行し、今でも毎日五六十本の刀劍を絹にて磨くを課業のやうにしてゐる。故に刀劍は何時も水の濡るやうになつてると同時に我が身體が丈夫である。抑々眼は物を見る可きための器官なれば、六號活字であらうと、それよりも細かい物であらうと見える以上は見ると直ちに近視眼になるのは如何といふに生が英字を少しばかり讀んだからとて直ちに近視眼になるのは如何といふに身體の運動が足らぬから、従つて體力が弱く、従つて身體の一部なる眼も亦弱くために少しく細かい物を見ると、直に近視眼になるのだ。所が運動して筋骨を堅めてある人は眼も亦抵抗力が強く、縦ひ細かい物を見ても無暗に使用せぬ

眼の衛生を實踐したる人の實驗談

限りは決して近視眼になる筈のものでない。又四十歳や五十歳位で老視眼になるといふも矢張若い時から身體に抵抗力を附けなかつて爲である。運動程身體を丈夫にする衛生法は無いし、又身體が丈夫であれば眼でも耳でも従つて丈夫なるは天理の然らしむる所であらう。(其二)は滋養食物である。余は毎日鶏卵を九個乃至其れ以上も食べる、勿論其の外にも色々の滋養物は取るが、其中で卵の半熟は精力を養ふ親玉だと實驗上信する、精力が充滿してをれば、眼でも耳でも衰弱せぬは、これ亦自然の道理である。(其三)は眼を清潔にする。世の人は朝起きてから顔や髪を洗ひ、中には身體の冷水摩擦をする人もあれど、眼や耳を洗ふに至つては殆んど無い。然るに余は冷水浴を行ひ、終れば清潔なる水を比較的深い桶に充し、これに顔全體をザブリと入れて眼を開き居ること約三十秒時も経つてから、水中より顔を出し、乾いたる手拭を以て軽く眼を壓へて拭ひ、鼻の中も拭き取り、次に左足を舉げて右の耳を傾け、右足でトン／＼飛んで右の耳の水を流し出してから、矢張乾いたる手拭の尖を入れて耳中を拭ひ、更に又右足を舉げて左の耳を前の如くするを常としてゐる。之を行ひ始めてから

最早五十幾年になるが、一日として缺かしたことが無い。これ今日壯者と同じく眼が明るくて耳の遠くならぬ理由の主なるものであらう。(其四)は早寝早起である。我は夜の燈火を朝に點せの主義で、夜は遅くも十時、大抵はそれより以前に寝る、故に朝は四時頃に眼が覺める、四時に起きても直ちに讀書するので、は無く、前述の如く刀劍を拭いたり、冷水浴をしたりしてゐる中に、家族の者は掃除などを終へる、乃で家族一同と共に茶禮式を行ふ。茶禮式とは説明するまでも無く、茶を入れて飲むのだ、これが濟んで朝飯を終れば六時乃至六時半、これより悠々日没まで勉強するのだ。光陰矢の如しとは言ひながら、之を毎日實行して止まずんば随分勉強する時間もある、何ぞ暗いランプを點して眠い目を擦りながら讀書するの必要あらんやだ。睡い目を擦つて眠るべき時間を惜む人は所謂一文惜みの百文知らずで、眼は早く衰へ、近視或は老視などに罹り易くのみならず、老いて益々勉強する勇氣が無いやうになる。抑々今の學生が眼の弱いといふのは不秩序に勉強して日暮の薄暗い光線で書を讀んだり、或は徹夜的に勉強したりするからだ云々。と氏は別に生理衛生ら研究した人でも無いけ

れど、右の四ヶ條は實に眼の衛生となるのみならず、健康長命たらんと欲する者は大いに實行すべき事柄である。それは倍おき、氏が眼を清潔にされたといふ一事は結構なことであつて、佛國の醫士中にも此の説を主張し、眼を冷水にて毎日洗つてをれば、一生涯視力の衰へぬものだとも極論した人がある。兎に角不潔からして往々色々な眼病を惹起すもので夫の俗に云ふ「ものもらひ」も多く不潔が原因となる。

ものもらひ——「ものもらひ」は醫師の方では麥粒腫といふが、何故俗間に斯る變な名が附いたかといふに、乞食即ち物を貰つて歩く輩はいふまでも無く、不潔な生活をじてるもので、顔や手などに垢が澤山着き、それが又自然と眼瞼結膜にも移り、加之に目やにが溜り、細菌はドン／＼蕃殖し、メーボム氏腺から分泌する液體の出口を塞ぐ所からして遂に麥粒程の腫瘍が出来るのだ、乃で其の腫瘍は右の如く乞食に多いため、後には轉々して病名になつたのだらうとは、井上通泰博士の説である。或はさうかも知れぬ。されば、ものもらひに罹る者は乞食同様な不養生をなしたからだと自ら愧ぢねばならぬ。話は又元へ戻るが、近來我

ものもらひ

近視眼の
原因

國に近視眼の續々殖ゆることは實に驚く可きことである、而して、これが原因を考ふるに、根本氏の言はれたやうな理由もあらうし、又其の他にも原因がある。今茲に其の概略を書いておかう。

近視眼の原因——(一)先天的である。即ち親の遺傳から近視になる者もあるし、又親の遺傳が無くとも生來に稟けてる者もある。されど斯の如き先天的は甚だ罕だ。(二)學校教育も大原因をなす。獨逸の系統に依ると、村落の學校では一四%中學校では一六%、大學では六〇%である。されど我國では、これよりも遙に多い。故に大學卒業の學士で近視眼鏡を掛けぬ者は殆んど無いと言つても可い位だ。我れ嘗て某中學の囑托醫となつてゐたが、五年級の生徒には三〇%を算する位であつた。乃で何故に學校教員が斯くも學生を不具者にするかといふに、前述の如く、運動の不足する事や、光線の取り方が不完全なる事などであつて、畢竟するに體育が行き届かぬのだ。故に余は校長に對し、生徒をして運動を勵行せしむる事過度の勉強を爲さしめざる事、其の他教室の清潔、窓の改良などを屢々迫つたが、頑冥なる校長は更に耳にも入れず、唯無暗に勉強させて一

人でも多く高等學校へ入らしめ、我が校の出身者は斯くも學問が優等であるといふことを誇らんとして、生徒の身體が將來に於て如何に不幸を招くかの如きは一向念頭にも浮べぬ、實に慨はしい至りであつた。(三)年齢にも關係す。乃ち十四五歳から二十二三歳に至る春季發動期に最も多く發するものなれば、此の時期に於て最も注意をせねばならぬ。(四)男女の區別もあつて婦人は男子よりも比較的近視に陥り易く、又其の度も強度のものが多い。これは婦人の體質が男子よりも弱いからである。(五)手淫や房事過度も大いに近視眼を誘ふ。これは矢張身體を衰弱せしむる結果であらう。(六)職業も亦大いに關係がある。即ち版木職や畫工などの如く緻密なる物を終日見詰めてる者は普通人よりもこれに罹り易きは争はれぬ事實である。(七)細密なる物を見たり薄暗き所で仕事をしたりせぬ無一文の田夫野人に後天的の近視者を出すこともある。而して斯る輩の近視は大抵強度であつて炎症的變狀を伴つてゐる。醫家は、これを惡性近視と云ひ、之に對し、彼の學校教育より來り、他に障害無き近視を學校近視と名づけてゐる。されど田夫野人が何故に斯る惡性近視に罹るかは確と了ら

ぬ。(八)天稟の素質が大關係あるのだといふ説もある。其の説に依れば生來近視で無くて、後來これに罹る者の多くは必ず天稟の素質がある。これは(イ)鞏膜の抵抗力が弱いためであらう。(ロ)眼筋の異常であらう。(ハ)視神經が短小なる爲であらう云々。さりながら是等は未だ醫學社會一般の輿論とはなつてをらぬ。(九)動搖する物體を見ることも近視眼及び其の他の眼病を招く基となる。夫の歩行しつゝ、書物を讀んだり、車の上で新聞を見たりするは、さも勉強家らしくは見ゆるけれど、眼と字との距離が絶えず變るから、水晶體は其の穹窿の度を調節すること非常に忙しうして忽ちに疲れ、近視眼などを招くのであらう。又風に吹かれつゝ、動搖してゐる蠟燭火で書を読む如きも同じ道理である。(十)明暗の劇變も幾分か近視を招くであらう。即ち暗い處から急に明るい處に出たり、又反對に明るい處より暗い室に入るが如きである。先づ近視の原因は右の如く略十項目に含まれてゐるが、之を病理的に云ふと、これにも數説ある。(甲)は調節力の過用だとし、曰く水晶體が膨脹すると内壓進み、眼球及び壁が伸びる。乃で近視の始めは調節の痙攣あつて一時的の近視を起すに過ねども、終には眼軸が

伸びて永久的に變ずるのだ云々。(乙)は眼筋に歸して曰く、近き物を見詰めてる業務の者は内直筋を使ふことが多いから、眼球は内外兩直筋の壓迫を受け、内壓進む爲に鞏膜が後方に伸び、且つ眼球の内轉は間接に乳頭の外側に於ける鞏膜部を牽き其の伸長を助けるのだ。(丙)は上射筋の關係である。乃ち近い物を見る職の者は眼球は稍、下を視るから、勢ひ上射筋牽引の爲に壓迫を受けねばならぬ云々と。尙右の外にも數説有れど、本章に餘り必要無れば省き、次は其の矯正法に移らう。

近視眼鏡正法——一度近視に罹れば現今の醫士では如何なる名醫も到底之を挽回するの策が無い、唯適當なる眼鏡を掛けて其の弊を矯正し、適當なる攝生を實行して其の進行を豫防するより外には無い。然らば如何にして其の眼鏡を撰ぶ可きか又如何なる豫防衛生法あるか、曰く章を追うてこれを述ぶることにしよう。

眼鏡に關する色々——本章に於ては常に近視眼鏡のみならず、凡ての眼鏡に就いて其の概略を述べようと思ふ。

これは生理の書に就き「光學論」「眼鏡論」といふ箇所で見れば能く了るけれど其は餘り學理的になつてゐるから本章ではこれを通俗的に説かうといふのだ。夫れ眼鏡には球面レンズ、圓柱レンズ乃至は狹孔眼鏡などの種類は澤山あれど其の中で最も多く用ひられる眼鏡は球面レンズであつて、之に又凹凸の二種がある。又同じ凹面でも兩面共に凹面もあるし、一面が平な面もある。凸面レンズも亦凹面レンズと同じく兩面共に凸面なものもあるし、或は一面が平で一面が凸のものもある。又メニスカース形とて一面が凹で一面が凸のものもある。兎に角凹面レンズは近視眼に用ひ、凸面レンズは遠視眼者及び老視眼に應用するはいふまでも無い。次に圓柱レンズにも矢張凹凸の二種あるが、これは亂視に用ひ、プリスマは輻輳不全に用ふ。次に保護眼鏡は其の製法も色々あるが、通常は硝子で作り、其の色に無色と青色及び煙色とある。次に狹孔眼鏡は金の板に小さい孔又は狹い切目があつて、其の種類にも亦種々あるが、何れにしても薄雲が瞳孔の或る部分を覆てる場合に掛けるのである。それから眼鏡の度といふはレンズの屈折力の強弱をいふので、其の度を示すには舊式と新式とある。今や醫師

の方では新式を稱へてゐるけれど、素人や眼鏡屋などでは舊式を稱へてゐる。舊式の方は焼點距離一ツオール二十七密に當るの物を一位となし、之を一番又は一度と云ふ。二番或は二度は即ち焼點距離二ツオールで、其の屈折力は $\frac{1}{2}$ である。斯様に順次上つて八十番に至る。八十番は即ち八十ツオールで、屈折力は $\frac{1}{80}$ だ。而して舊式眼鏡の加減乗除は常に分數を以て計算せねばならぬ。例へば四番と六番との凸鏡を加へるには $\frac{1}{4} + \frac{1}{6} = \frac{10}{24} = \frac{1}{2\frac{2}{3}}$ の如くなる。そこでレンズの面の彎曲が強い程屈折力が強いのであるから、十度のレンズは三十度のレンズに比して其の屈折力は恰も三倍である道理なれば、數の多い程屈折力は却つて弱い道理、換言すれば三十度のレンズは一度に比して三十分の一の屈折力を有つてゐるのである。次に新式では一迷突の焼點距離を有つてゐるレンズの力を一單位とし、一デヲプロトリー Dioptrie (譯して曲光) 略して度或はDと記す。而して一Dに二倍三倍四倍等の屈折力を有する物を順次二D三D四D等とし、其の焼點距離を知らうとするには其の度數で一迷突即ち百仙迷を除るのだ。故に二Dなれば $\frac{100}{2} = 50$ 仙迷の燒點となる。斯の如く新式では舊式の如くレンズを呼ぶ

に其の燒點距離の大小を以てせずに屈折力に依るのであるから、數字の大なる程強いレンズであつて、計算上にも都合が宜い。即ち二Dと三Dとを加へるにも $2D + 3D = 5D$ で其の燒點距離は $\frac{100}{5} = 20$ 仙迷となる如く分數を用ふるが如き複雑が無い。畢竟するに新式の一Dは舊式の $\frac{1}{40}$ に略、相當す。故に新式を舊式に變じようとするには新式の度を以て40を除るのだ。例へば二Dは $\frac{2}{40} = \frac{1}{20}$ 仙迷で舊を新に改むるには舊式の度を以て40を除る。例へば舊十度は $\frac{40}{10} = 新式の4度$ である。又眼鏡には+或は-の記號を記してある。これは+は凸面の印で-は凹面の印である。これにて眼鏡の概略を話したれば、次は眼鏡に就いての注意を述べておかう。眼鏡の必要あるは近視遠視老視輻輳不全亂視等であるが、他は夫々後廻しとし、茲には近視眼鏡に就いて申すに、近視者の多くは眼鏡を自身で撰んだり若くは眼鏡屋に任せたりしてゐる。これは甚だ宜しく無いことだ。必ず醫師に就いて其の度に適へるのを指定して貰はねばならぬ。何となれば近視眼者は其の屈折状態に比して少し位強い凹面レンズを用ひても適當な眼鏡を用ふると同

じく物が明瞭に見えるから之を用ひてると、遂に近視の度が眼鏡と同じやうになる弊を招くからである。例へば人有つて新式の1D、即ち舊式の四十度なる近視とせんか、眼鏡が無くては何うも遠方を明瞭に見ることが出来ぬ、乃で眼鏡屋に行き、「近視鏡を下さい」と求める。「この位では如何ですか」と一五Dのを出した。之を掛けて見ると成程明瞭に見える。「これは丁度宜い」これより之を掛けることとなる。所が此の人は1Dが適當なのであるから、一五Dより少し一・二五Dを掛けても近視は益、進むのみならず、眼に痛みを發するやうになることがある。故に眼鏡は眼科専門家の指圖を受けて適當なる眼鏡を掛けることが近視眼を矯正する上に於て實に肝要なることである。右は既に近眼になつてからのことであるが、それよりも轉ばぬ先の杖否近視眼の豫防法に就いて聊か申さう。

近視眼豫
防法

近視眼豫防法——これは前述の原因を避けるやうにして居れば、それが即ち豫防法なれば、今又更に之を繰返せば、(一)光線を充分に取らねばならぬ。而して其の光線は可成左方より取るを可とす。(二)光線は明るくなければならぬけれど

餘り劇しい光、殊に日光を直射させるなどは、これ亦視力を害するものだ。されば書を讀む學生は窓が南北に在つて、東西の塞つてる室を撰び西方に向つて讀書或は寫字をするやうにせねばならぬ。序に言つておくが、窓は硝子窓よりも新らしい紙の日本障子の方が眼の爲に適當なるのみならず、換氣の爲にも宜い。(三)夜の燈光は電氣燈が最も視力を害せぬばかりで無く、空氣を不潔にせぬなどの効は十分あれど、如何せん我が國人一般の生活の度が低くて之を使用し難いのは實に慨かほしいことだ。故に可成夜業を廢して早朝に仕事する習慣を養ふ可しである。(四)體勢を正しくして居らねばならぬ。頭を垂れ脊を屈めるなどは眼と物とが甚しく接近するの弊を招き、且つ頭部逆上し、従つて眼には充血し易い。宜しく机腰掛が身體に適應する物を撰ぶ可しだ。此の點に於て日本机は餘り宜しからぬものである。日本机に對しては到底正坐して譯には行かぬ、即ち初めの中は正坐なり胡座なりして讀書も出来れ、後に至れば五體崩れて了ひ、遂には仰に臥ながら讀むやうになる。事茲に至つては實に蠻風であつて、近視の稽古するやうなものだ。(五)餘り細い文字を見たり、緻密なる仕事をし

たりすることは長く続けぬやうにせねばならぬ。文部省では教科書に五號活字を用ひてはならぬとの規定になつてゐるが、余の考へでは五號は差支無けれど六號からは勿論害にならうと思ふ。何れにしても時々眼を保養させては讀むが宜い。又書物の紙も白に少しの黄を帯びたやうな色になし、光澤ある物を避けねばならぬ。六) 休息の時間は一時間毎に十五分位にして欲しい、さうすると眼の調節機の疲勞を挽回出来るばかりで無く、身體一般の爲にも宜い。然るに前に述べた通り頑冥なる例の高等學校入學本位的の中學校長連は僅かに十分時間の休憩時も惜んで讀書してゐるやうな書生を賞讃し、皆々も彼の如くに勉強なさいといふやうに勸める、これ五年級にもなると三十%の近視眼者を出して最大近視國だと歐米人にも笑はるゝ所以である。(七) 時々遠方を視る稽古もせねばならぬ。即ち讀書に倦んだやうな場合には戸を開けて遠山近岳の景色でも眺めるが宜い、斯ることも近視を防ぐことの一方方法である。(八) 眼病豫防薬を點けてはならぬ。中には新聞の廣告などを利用して、「細い物を見たり或は夜業したりする人は平生に〇〇水を點けてると一生涯視力を傷はぬこと受合なり

云々」といふやうに素人を欺す奸商もあるが、斯る事は夢々感うてはならぬ。抑、薬は病氣にこそ必要なれ、何の眼病も無いのに唯無暗に豫防薬を用ふるは此上も無い愚なることだ。况んや賣薬の眼薬中には店頭に長く曝されて其の水の腐敗してゐる物もあるに於てをやだ。我嘗て某書工を訪つたれば机上に眼薬の瓶らしい物があるから「君は眼病ですか」と尋ねると、「さうでは有りませぬが、近頃餘り緻密な繪を書いてゐるものですから、近眼になりはせぬかどの心配上より某醫士に相談したれば此の薬を點けてをれば豫防出来る」と云ひました。聽いて余は醫士にも斯る奸商的人が有るものかど一時は驚いたが、兎に角其の醫士に面會して其の意見を質問したきものと思ひ、早速書工に紹介して貰つた。所が其の醫士は堂々と憶する氣色も無く論じて曰く、「緻密なる物を視詰めて居れば次第に調節筋を張り詰めて後には近視を招くかも知れぬ。故に余は茲にアトロヒネの點眼を利用したので、アトロヒネは御存知の通り調節筋の緊張を一時弛めるものですからなア」との事余は大いにアトロヒネの中毒を説明して其の危険を辨じて見たが、彼れ却々屈せぬ。で止むを得ず其處々にし

煙草と眼との關係

て歸つたことがある。讀者に此の人の名を洩しても可いやうなものなれど、爰に用無ければ書かぬ。兎に角世の人は豫防點眼藥なる物は斷じて無いばかりで無く一度近視眼になれば到底元の如く正視眼になる藥液も治療法も現今の醫術では無いものと信じて下さい。以上八ヶ條の外に運動滋養物秩序ある生活法などは勿論豫防法となるものである。

煙草と眼との關係——粗惡なる煙草を濫用すると大いに視力を害するものである。視力を傷ふ度に依ては煙草弱視といふ症に陥ることがある。該症は其の外観は健全なる眼と殆んど變りは無けれど、當人は緻密な文字は見えず又明るい光線よりも曇つた光線の方が寧ろ見えるといふ工合になり、遂には段々衰へて甚しきは更に見えぬやうになることがある。然らば如何にして此の煙草弱視を防ぐかといふに喫煙を止めて了へば最も宜いことなれど、若しこれが止められぬ場合には、ニコチンの含量少き上等なる日本煙草を節減して用ふるやうにせねばならぬ。ハイカラ先生は歐米の産を燻らしてゐるけれど、歐米の産は概してニコチンが多い。又同じ日本産でも巻煙草では不二敷島、刻煙草で

アニリン色素と眼との關係

老視眼に就いて

は福壽草や白梅などがニコチンの含量甚だ少いから、之を度を過ぎぬやうに吸ふが宜い。又巻煙草は携帶に便であるといふものゝ家にゐては刻煙草は長煙管で吸ふ方が宜い。煙管の短きは自然と煙が眼を刺戟し、ニコチン中毒の外に又一つの害をなす譯である。尙詳しきことは消化器篇の嗜好物章を參考せられよ。

アニリン色素と眼との關係——世には消毒もせぬ赤い絹片で眼を洗つてゐる人もあるが、彼の赤い色の中にはアニリン色素を含んでゐるのがある。斯ういふので洗ふと其の色素の爲に化膿性角膜炎といふ眼病に罹り、甚しきは數日の中に盲目になることがある。又紫鉛筆もアニリン色素と能く似たる有毒なもので斯る鉛筆を使用してゐると、何時の間にか其の色素が眼内に入らぬとも限られぬ。大いに注意すべきことである。

老視眼に就いて——何人も知るが如く、段々年老ゆるに従ひ、細い物を見るには眼鏡が無くては見えぬといふのを醫師の方では老視眼と名づく。何うして此の老視眼になるかといふに、取りも直さず眼の調筋力が年を逐うて減少するか

らである。老視眼の徴候は細い物が何うも見難い、乃で少し離して見ると鮮明に見ゆる、これを生理學の上から説明すれば近點と云ふ。所が老視眼は其の調節力が次第に衰ふるに従ひ、其の近點は次第に遠ざかり、初めは別に何の不自由を感せぬにしても、其の近點が眼から一尺以上も離れるやうになつては、逆も寫字なり、讀書なりを營むことは出来ぬ。斯うなれば如何に我慢をしても眼鏡を掛けずには仕事が出来ぬ。この老視眼になる年齢は通例四十五歳乃至五十歳である。されど遠視眼の人は老視眼になること早く、近視眼の人は老視眼になること遅いものだ。去りながら老齡に及べば近視が治ると思ふのは間違である。されば何人も老視の徴候があつたら、近視眼者と同じく専門の醫師に就き相當の眼鏡を掛けねばならぬ。然るに眼鏡を掛けると癖がついて眼が早く弱るなどいふ愚見を抱いてるものもある、惑うてはならぬ。尙眼の衛生に就いて言ふ可きこと數多あれど、病理の章に至つて又述べることにし、次は耳の衛生に移らう。

* * * * *

耳と遺傳

耳と遺傳——耳病は遺傳に依て起るのが頗る澤山ある。これに就いて數多の耳病専門醫が調べた結果に依ると大抵耳病の三分一は遺傳であると言つてゐる。去りながら遺傳があるからとて其の子孫は悉く耳病に罹る譯でも無いし又衛生の實踐に依ては遺傳が有つても生涯發らずに済むこともある。されば之より衛生の方法を聊か説いて見よう。

耳と水浴

耳と水浴——前章に述べたる通り、故根本氏は毎日冷水を耳に入れて掃除すると言はれたけれど、こは特別な衛生で、一般の人は之を真似てはならぬ。何となれば冷たい水が鼓膜に觸ると耳病を發するものであるからだ。彼の河水や井水よりも温かき海水に而も夏の最中に浴するのでさへも耳の爲には害あるものだと多くの専門醫が言ふ位であるから、冬日に水道の水を耳中に入るゝなごは大不賛成である。されば河水浴、海水浴を行つても兩耳の中へ物を填めて水の入らぬやうにして貰ひたい。又少しでも耳の病ある人、例へば鼓膜が破れてゐるとか、耳が鳴るとかいふやうな場合には凡ての水浴は行はぬ方が安全である。又貧血性の人やヒステリー性の人、耳専門の醫師からは水浴は宜

しく無いといふが耳に關係無く言へば尙更海水浴でも爲ねばならぬ必要がある。されば斯る人は重きに依つて處断する目的の臨機應變の策を講ずるより外に致し方も無い。

耳中に異物の入つた場合——耳中には外界より異物の入り込むことが時々ある。殊に小兒は豆類や小石などを故らに耳の中へ入れたるものである。然る場合に本人若くは家族の者が簪や角の耳かきなどで之を出さうとする。異物は益々奥の方へ入り込んで除れ難くなるのみならず、外聽道に疵が出来たり甚しきは鼓膜を破つて中耳へ押し入れ、續いて眩暈嘔吐頭痛重きは癩癩を起すやうなことがある。故に一寸で取れ難いものは専門醫に依頼するが宜い。序に言つておくが耳の痒い時誰でも耳搔で耳を搔くが之も可成奥の方へ入れてはならぬ。奥の方を搔かうとすると鼓膜を破ることがある。縦じ鼓膜を破らぬにしても外聽道に傷をつけ、後には色々の腫物を生ずることもある。又時には耳搔が折れて一方ならざる重い病を引き起したる例もある。されば大いに注意せねばならぬ。

劇しい音と耳——軍人が戦争に出で、百雷の一時に落つるが如き大砲の音を聞かねばならぬ場合は例外中の例外としても尙其の他にも劇しい音響を聞かねばならぬ職業がある。例へば石屋鍛冶屋乃至は鐵道の運轉手の如きものだ。斯る人が今日も明日も劇しい音響を絶えず聞いてると後には聽神經が麻痺して耳病を起すことのあるものなれば耳の中へ綿を填めて劇しく感せぬやうにした。又斯る職業ならざるも雷鳴などの有る場合には矢張綿でも填めて強く響かぬやうにするが肝要である。

小兒の耳衛生——小兒が生れたら直に其の耳孔に注意せねばならぬ。初生兒の耳の中には往々多くの垢が積つてゐて、之が爲に鼓膜に炎症を發したり或は腫物が出来たりするやうなことがある。次に小兒の耳は言ふまでもなく大人の耳よりも外聽道が短かくて而も抵抗力が弱いから僅かの刺戟でも直ちに鼓膜などを襲うものであるから、冷い風や濕氣に侵されぬやう注意するが肝要だ。さりながら温かしておくといふ考から頭巾を耳までも被らせて其の上より紐で緊しく縛つておくは甚だ宜しく無い。何となれば其の壓迫の爲に耳翼が

平たくなつて畸形を残したり、濕疹が出来たりすることがあるからだ。次に初生兒を愛する目的ではあるが初生兒の耳の側で笛太鼓乃至は喇叭などをヒュー／＼ドン／＼／＼と騒がしく響を立てるは甚だ宜しく無い、赤ん坊は劇しい響の爲に一時は泣を止めるやうなことがあつても、これは楽しい爲では無く、畢竟驚くからである。斯様に劇しい響は赤ん坊を驚かせて腦の發達を害するばかりでなく、聽神經の機能を甚しく傷めるものである。次に叮嚀の分泌に就いても注意が肝要だ。叮嚀とは外聽道即ち耳道に分泌する粘い液體であつて其の固まつたのを素人の方は耳垢といつてゐる。この叮嚀が過分に分泌したり或はそれが固くなると叮嚀堆積といふ一種の耳病になり、その重いものになると耳が遠くなるはいふまでもなく、危険な症狀を引き起すことがある。されば斯る場合には醫師に依頼して之を取り除いて貰ふか左も無くばスポイトといふ器械を求め、水氣離れたやうな微温湯をこの器械に含ませ外聽道を洗ふが宜い、怒ひに油を入れたり、賣藥を灌いだりして甚だ危険を招くことがある。それでも其の叮嚀の塊が容易に除れぬときは細い棒の尖に綿或は海綿を接ぎ其の綿

或は海綿に微温湯を少し含ませて耳中に入れ徐々廻しながら掃除をすること大抵は清潔になるものである。併し一度したら綿なり海綿なりは可成二度と使用せぬが宜い、若し二度以上使用したときには熱湯で消毒するが肝要である。次に父兄や學校の教師は小兒の耳翼に手を觸れぬやうにせねばならぬ、中には小兒を立たせたり或は頭の向きを換へさせたりする際に耳翼を牽く人があつる、又小兒を愛する積りで我が兩方の手掌を小兒の兩方の耳に當て、壓迫しながら身體を持ち上る者がある。此等は實に不埒千萬なる行で、耳を傷めることはいふまでもなく、頸椎の關節までに傷害を及ぼすものである。又亂暴な教師や野蠻な親になると、平手で小兒の耳翼を打つ者がある、嗚呼何たる殘酷な處行であらう。世には斯る手荒い處行を受けて鼓膜などを傷められたる不幸な小兒が澤山有るであらうと余は思ふ。小兒を有つ親は大いに注意せねばならぬ、次に小兒の教育上大いに戒しめねばならぬことがある。それは何かといふに小兒の耳の遠いのを父兄や學校の教師が氣が附か無いでゐる一事だ。耳科の發達せぬ我國に於ては餘程耳が遠ければいざ知らず、少し位遠くても、父兄も教

師も眼の近い小兒程に注意せぬ、眼の近い小兒だと學校の教師も其の小兒の席を一番前の方に出すなどの注意はするが、少し位耳が遠くても一向平氣で後の方に置く所が其の小兒は教師の言ふことが明瞭に聞えぬから従つて興味も無く又注意力も少い、故に何と無くキョロ／＼して而も怠惰の様に見ゆる、乃で教師は叱りつけて注意を促すやうになる、所が兒童の方では自ら耳の遠い爲といふことを知らう筈も無く、益々學科が厭になり、益々成績も悪くなつて行く。事茲に至れば、父兄も「汝は怠るから成績が悪いのだ」と意見をするに至る。嗚呼憐れむ可きは無智識なる父兄を有つて少し耳の遠い兒童である。世の父兄よ、小學校の教師達よ、成績の宜からぬ兒童があつたら耳の如何を専門の醫師に診察せしむることを夢々怠つてはならぬ。遅鈍なりと認められてゐた小兒が一たび耳の療治をして耳が完全になつた爲め、普通の兒童よりも却つて伶俐になつた例が澤山あると耳科専門の醫師は證據立てゝゐる。耳の衛生も亦大切なるものと謂はねばならぬ。尙小兒の耳に就いて言ふ可きことは數多あれど、そは次章なる小兒大人共通の章に含まれてゐるから此の章はこれで先づ切り

耳と外氣の温度

上げておく。

耳と外氣の温度——耳翼外聽道及び鼓膜は常に外氣中に曝されてゐる所であるから、外氣の温度の影響を受け易い。若し氣温が餘り高いと耳の内部に充血を起し、續いて頭痛、眩暈を惹き起すやうなことになる。尙これよりも恐る可きは我が身體の熱度の高くなることだ。即ち麻疹や猩紅熱の爲めに聽神經を侵され、耳の遠くなつた例は幾らもある。又寒氣凛々たる荒い風に吹かれつゝ長い旅行をする時も著しく耳を傷めることがある。露領西比利亞に住む人の中には耳翼の部分乃至は全部を失つてゐる者が少く無いやうだ。されば夏の炎天や冬の寒天に旅行するやうな場合には夫々耳を保護するやうに注意せねばならぬ。

耳の衛生

耳の衛生雜錄——項を分けて説く程でも無い耳の衛生が色々あるから一括して本章に説くとしよう。さて長い時間物の音を聞いてゐるやうな場合があつたら時々休まねばならぬ。恰も長く腦を使つてゐた揚句に休息すると同じ道理である。故に午前も午後も乃至は夜まで一續けに講義を聽いてゐる學生が

耳の遠くなつた例もある。余の知つてる某氏の娘は午前から午後にかけて高等女學校に通ひ、歸宅後早々琴を習ひ、夜は三味線を稽古してゐること一年も續いてると即て耳が遠くなつて或る醫師に治療を受けたけれども其の醫師は之に氣が附かぬと見えて稽古を止めなさいと言はぬ。それ故何程治療しても全快せぬ、でその兩親は大いに心配し、余に相談せられたから、余は答へて曰く「朝から寝るまで殆んど休み無しに耳を使はれた結果でせう。されば責めて琴三味線の稽古だけでも當分止められた方が宜からう云々」兩親は大いに之を賛成し、余の説に従ひたれば左程の治療もせず、漸々に恢復したことがある。塵埃の多い所で業を執る者は普通人よりも外聴道を清潔にせねばならぬ。何となれば、外聴道に塵埃が溜ると後には鼓膜に炎症を發して遂には重い耳病に罹ることがあるからだ。

不快なる音響を何時も聞いてると耳其の物にも間接な害があるし、又腦には直接に悪い。殊に神経病患者の如きは頭痛や眩暈を發し、病を重らすものである。或る神経患者が鍛冶屋の隣りに住んでゐて、常にトツチンカンの音を聞いている

鼻汁と鼻の清潔

ために病益々甚しくなり、逆も治らぬところから轉地療養したれども矢張トツチンカンの音が耳に聞ゆる様で頭痛は何うしても止まぬ。乃で某醫師は一策を案じ出し、音樂に巧みなる人をして色々微妙なる曲を奏せしめて患者の耳を樂しませたれば、頭痛は次第に治り、神経病も段々に全快したといふ實例がある。察するに、この醫師は泰西の書物にある所の音樂療法を施したのであらう。尙言ふ可きことは數多あれど、又病氣の章で補ふことにし、次は鼻の衛生に移ることにしよう。

鼻汁と鼻の清潔——鼻汁は老廢物を流し出す爲めに分泌せらるゝものであるからこれを吸つてゐるのは甚だ宜しく無い。されば徐かに之を拂んでハンカチーフの尖で鼻孔を拭つておくが宜い。さりながら餘り強く拂んで耳の鼓膜にピンと響かすのも甚だ悪い。中には不性で鼻汁を拂まずに何時も吸つて居り即て鼻糞を堆積し、爪で蛻貝の拔身然としたものを穿り出してゐるなどは不潔極つたことで、斯る人は例の鼻茸だの其の他色々の鼻病を發するものだ。元來

鼻孔は管に物の香を嗅ぐ作用あるばかりで無く、大切な空気呼吸する場所であつて眼や口の如くに戸が無く、即ち開放してあるから外界の不潔物が入り易いと言ふまでも無い。されば衛生を重んずる人は一日に二回は鼻孔の中を清潔に洗ふが宜い。即ち濕手拭の尖を入れて徐に廻しながら拭き取るやうにす可しだ。然れど水を少し許り吸ひ入れて之を口より吐き出すといふやうなことは宜しく無い。何となれば、之が爲めに中耳炎を惹き起すことがあるからだ。

鼻毛に就いて

鼻毛に就いて――鼻毛は何の爲めに生えてるものかといふに、外界の塵埃が入り込んだ場合に之を濾過して其の塵埃を可成氣道に遣らぬやうにする大切なものだ。然るに之を剃り落して氣持が宜いと言つてゐる人がある、これは生理衛生を解せぬ野蠻の民なれば之を真似てはならぬ。

悪臭を嗅ぐ勿れ

悪臭を嗅ぐ勿れ――安母尼亞瓦斯であるとか或は物の腐敗臭であるとかの如く嗅いで不快を感じる香は可成避けるやうにせねばならぬ。抑、香は其の物の分子が鼻粘膜に觸るゝ所より感するのであるから長く嗅いでると其の有害物

鼻孔と氣温

が鼻孔中に移つて鼻を直接に傷めるのみならず氣道へも不潔なる物が入り込むし、其の他頭痛眩暈などを誘ひ、遂に腦をも害ふものである。されば悪臭ならざるも餘り劇しき香は矢張劇しく神経系を刺戟し甚だ宜しく無い。

鼻と他病の關係

鼻孔と氣温――鼻も耳と同じく氣温に注意せねばならぬ。氣温が非常に高いと鼻中が乾燥したために義膜性鼻炎などを發するし、又凜烈なる寒風を絶えず吸つてると誰も知る如く急性鼻加太兒病に罹り、後には慢性になつて容易に治らぬことがある。されば餘り乾燥するやうな時には濕手拭で鼻中を濕すやうにするとか寒い風に吹かれつゝ長い旅行を續ける際には呼吸器でも掛けて歩くとかの如くにするが宜い。寒風は管に鼻加太兒を起すのみならず、夫の酒醴鼻とて鼻の上が赤くなる病に罹ることがある。

鼻と他病の關係――鼻腔に故障があると唯鼻腔だけで済めば可いが色々な器官に影響を及ぼすものだ。腦が悪いとて長く腦の療治をしてゐたれど更に効が無く、偶、鼻の療治をしたれば腦の病も自然消滅したる例も往々ある。又鼻病のために耳を害せられることも屢あることだ。夫の鼻加太兒なども放棄つて

賣藥に就いて

おくど後には中耳にまで蔓延し、化膿性の中耳炎を誘ひ甚しきは脳膜炎を續發し、黄泉の客となることさへもある。されば鼻に故障が有つたら直ちに鼻専門の醫師に就いて治療を受けることが肝要である。

賣藥に就いて——我國人は耳や鼻の衛生智識が甚だ乏しきために歐米諸國の如く耳や鼻の賣藥は甚だ少くて漸く此頃二三の〇〇油〇〇液位なものだ、之より漸々世人が耳や鼻に注意をするやうになると、次第に奸商共は此の油を灌げば數十年の聾啞も直ちに聴ゆるやうになるとか、或は此の液を鼻孔に塗れば鼻茸も鼻炎も忽ち消滅するものであるなど新聞廣告を利用するに至るであらう。讀者よ耳や鼻は却つて専門醫師に非ずんば失敗に歸することの多いものなれば、これに惑はされてはならぬ。轉ばぬ先の杖として一言辨じておきます。尙鼻に關する注意は之も病理の章に申しませう。

過熱過冷の飲食物と舌

過熱過冷の飲食物と舌——舌は眼や耳よりも一層大切なもので、若しこれが無かつたら、飲食物を味ふことが出来ぬばかりで無く、言語咀嚼にも甚だ困難で遂

には一命を失うであらう。舌癌に罹つて舌の半部を切斷されたる人を余は嘗て見たことがあるが、其の人は立派な齒あるにも拘はらず、流動性の物を少し宛嚥み下す位に過ぎないで、治療後五年目に榮養不良に陥り五十三歳を一期として歸らぬ旅路に赴いた。嗚呼半部を失うてさへ斯うであるから全く無かつたら其の状態は推し測るゝであらう。斯の如く大切な舌であるから大いに衛生上の注意を加へねばならぬ。それには第一過熱過冷の飲食物を取らぬやうにするが肝要である。元來我が國人は熱い飲食物を好む習慣があつて、中には汁でも飯でも舌の焦げるやうなのをフー／＼と吹きながら即ち舌を幾分火傷しつゝ取つてゐる者がある。斯ういふ亂暴なことが續くと舌其の物の傷むは言ふまでも無く、口内一般に傷害を受けるものである。又餘り冷た過ぎる飲食物も舌の味覺を麻痺せしめ、物を味ふ作用を失はしめるものなれば、微温の飲食物を取るこれが甚だ肝要である。歐米各國では衛生思想が發達してゐるから、飲食物を容るゝ器具は熱氣消毒をして手も觸れられぬ程にするけれど、口に入るゝ物は煮たり焼いたりしてから時間を經て大分冷めたる後で無れば用ひぬことにし

てゐるが實に善良な習慣である。

酒煙草と舌——酒や煙草は眼や耳乃至は鼻などにも幾分の害をなすけれど舌には最も有害だ。殊に酒を呑みつゝ煙草を煙らすに於いては其の害言ふ可からずである。不性な文士になると朝寢を貪り日中は友を訪ねたり或は友が來るといふ始末でチャランポランと日を送つてゐるが日が暮れると燈火可親なご稱へて殆んど徹夜的に煙草を吸ひながら文筆と戦ふ者がある。斯る輩の常として必ず味覺を損うてゐる。彼の恐る可き舌癌も酒や煙草を貪つて始終舌を刺戟しつゝある者に多いといふことだ。嗚呼慎むべきは酒と煙草の過用である。

劇しき刺戟物と舌——非常に鹹き物や或は唐辛胡椒の類を常に食してると、これ亦味覺を損ひ他の飲食物の眞味を解することが出來ぬやうになる。これ亦慎む可しだ。

「舌こきに就いて——朝起きて齒を磨いてから竹又は角を薄く刃物の様にしたもので舌をギュー〜と扱く者を往々見るがこれは無用なことで否、舌の乳頭

を傷めるものなれば爲ぬ方が宜い。若し舌を清潔にせんとの目的ならば清水を以て幾度も含嗽すればそれで可い。何ぞ必ずしも舌扱を用ふるの必要あらんや。

舌苔に就いて——舌苔即ち舌上に白い苔の様な物の生ゆるは熱の有る時や消化不良症乃至は口内炎などに來るものだが又飲酒喫煙の過る時にも之を見るものなれば、飲酒喫煙を爲さぬ人で、舌苔を呈することが有つたら一應醫師の診察を請ふが安全である。

皮膚の衛生は「皮膚論」に詳しく説いたれば茲には言はぬ。

生殖論

交接と年齢——交接は快美の感を起すもので、而も子孫を繁殖し、社會を成立する上に於て實に爲さねばならぬ大切な義務であるけれど、生理衛生に背きて之を爲せば其の健康を害すること一通りで無い。第一、一定の年齢に達せずして之を行へば、其の身體腦力の發育力を生殖力に別ち、ために十分の發育を遂ぐる

こと能はず、遂に薄弱なる身體となる上に智力も亦進まず、忍耐不撓の精神を滅じ、一生平々凡々の人とならねばならぬ。然らば一定の年齢は如何といふに、身體發育の完全したる時が宜いので、これには男子は二十五歳乃至三十歳、女子は二十歳乃至二十五歳が適當である。然るに十三四歳にして妻となり、十八九歳にして夫となる者往々ある、是等は己れの身體はいふまでも無く、子孫をして羸弱ならしめ、之を大袈裟に云へば社會を害するものと謂つても可からう、然らば成長して結婚する程宜きかといふに決してさうでは無くて、過ぎたるは猶及ばざるが如し、だ、男にして四十歳過ぎて妻を迎へたり、女にして三十歳を超えてから嫁するなど、これ等は己れの衛生上は兎も角も矢張弱き子孫を設くることになる、されば余の理想を言へば、男子は三十歳にして立派に生活の道立ち始めて妻を迎ふるが宜し、女は二十五歳にして、これも相當の教育を受け、母たるの資格を有してから嫁するが其分である、若し夫れ三十歳にして自活の道も立たず、二十五歳にして一家の内政を掌るべき資格の無き者は、所謂生地無しで、茲に論ずるの必要は無い。

次に相當の年齢に達してから夫婦となつても、交接其の度に過ぎては、これ亦身體腦力を害するの甚しきものである。「色は我性の斧なり」とは、茲にも適用可き語であらう。然らば房事を行ふ度數は何程が適當かといふに、體質の強弱、生活の状態、年齢の長幼、四季の氣候などに依つても相違は有るけれど、大凡一週に一回が適當であらう、若し三十歳にして始めて妻を迎へ、二十五歳にして始めて夫に仕へ、それまで更に淫事を爲さなかつた清淨無垢の男女で、身體の健康な人であつたら、四十歳頃までは一週二回位が丁度善い、それより五十歳頃までは一週一回、五十歳以上になつても健康であつたら、終身一ヶ月に二三回を續けても差支は無いものと余は思ふ。併し腦力を費す人ならば、此の度數よりも更に減せねばならぬことは言ふまでも無い。而してこれを行ふには、身體精神の安穩爽快にして、何等の氣掛り無く、即ち之を爲さねばならぬとか、彼のことは何うしたら可からうなど考ふる時で無く、互に業務なり仕事なりを終へ、晚餐後二時間程も経て、寢床に入り、夫婦共に萬事を悉く打ち忘れ、何の餘念も無く、之を行ひ、然る後熟眠するが宜い、食後又は忽卒の際に行ひ、行ひたる後、心身を勞するやう

では大いに害の有るものである。又互に屢々交接を行はぬ人でも行ふときには二回以上を續けては宜しく無いすべて交接後は幾分の疲勞するを免かれぬ故に後の物起時に至るまでには多少の時間を費すもので回数を重ねるに従ひ其の時間が長くなる余の知つた或る者は年中旅行してゐて揚句に家に歸れば一夜に五六回も行ふ或る時も斯く重ぬ最後に其の儘永眠したのである。女子は男子よりも疲勞は少なければ、それでも矢張害あるものである。彼の娼妓が一旦其の業を罷めても妊娠する者殆んど無く且つ大抵長命せぬを見ても過房の害あることを察せねばならぬ。

手淫の害及療法

手淫の害及療法——手淫は過房と同じく大害あるものである而して之を行ふは多く年少の男女にあることなれば其の害や言ふ可からず年齢に達せずして僅かの交接をなすさへも慎む可きに不自然なる手淫を行ひ何ぞ害無くして止んや天其の不埒を罰せずして止んや時を累ね日を経るに従ひ顔面蒼白くなり且つ無氣力になり記憶力判断力忍耐力悉く減じ或は神經衰弱近視眼に陥り或は心肺の病氣等に罹る左無くとも陰萎早漏遺精などの諸症を招き甚しきは一

寸美人を見た次で射精したり或は更に淫事を思はざるに精液は小便と混じて出たりなどする斯うなれば身體は弱くなるのみならず薄志弱行の人となつて一生を過し妻を迎へてからも交接の快事少く且つ健康なる兒女を設くることは出来ぬ嗚呼恐るべきは手淫である。女子も蟻蟲の刺戟悪友の感化等に依て手淫をなすものがある而して其の害は矢張男子と同じく視力を減じ神經を衰弱せしめ身體の發育を害し無氣力不耐の人となる其の他腔加太兒月經不順子宮病等を惹起し結婚しても交接の快感少く或は不妊症になることもある嗚呼慎しむべきは劣情である。

或る青年男子余に白狀して曰く「手淫の害は我も大いに之を知る然れども寢所に入るや間も無く淫事を想像して止まず思はざらんと欲するも得ず考へざらんと欲するも能はず正義の心道徳の念は全く麻痺し情慾類々ど來り右側臥をしても左側臥をしても止まず揚句は寢床の上に坐して劣情を壓抑せんとするも得ず又枕をして他事を考ふるも又意馬心猿に襲はれ深更まで眠ることが出来ぬ是に於て一度位は左したる害も無からうと遂に手淫を行ふ行ひ終れば

實に悪い事をした、今後は決して爲すまじと誓ふ、誓ふ時分は既に眠りを催す而して明夜に至れば先夜の誓は忽ちに破れ、又同じく行ふやうになる、若し非常なる忍耐を以て之を行はざるも夢に美女或は醜婦と交接し、直ちに遺精す斯の如きこと一年以上續きたる結果、今日の如く神經衰弱になり、且つ視力朦朧として紫の雲が見ゆるやうである云々、そこで余は左の如き治療法を教へたのである。

秩序を守れ。運動を爲せ。間食する勿れ。當分朋友を絶て。戶外散步を爲せ。冷水摩擦殊に陰部を清潔にせよ。聖賢の傳を讀め。夜具を薄くせよ。ランブを明るくして寢よ。

の九ヶ條に於て青年は大いに悟り朝は太陽の地平線上に上るや否や起ることに定め、起されば直ちに冷水摩擦を行ひ、それより勉學に従事し朝飯後は勿論學校に行き、朋友とは一切交らぬやうにし、學校より歸れば直ちに野外散步に出かけ、雨天の日は鐵啞鈴乃至は木刀を振るなど朝飯前に勉強すると學校にて授業を受くるこの外は當分勉學を廢し、専ら腕力養成に従事し、夜になればスマイル

スの自助論及び論語を讀み、これより寢床に入ると晝間の疲れにて大いに熟眠し易い、然れども初めの中は矢張劣情起る起るときは直ちに起き出で、冷水をザブ／＼陰部に注ぎたれば、ブル／＼と寒さを感じる、これより直ちに寢床に入りて、又論語の解釋を讀んで、何時の間にか眠りに就く、斯くの如くに今日も明日も實行したれば、遂に劣情起らぬやうになり、今は高等學校二年生であるが身體も健康亦學力も優等で前途樂もしき人となつてゐる。讀者よ讀者一度も爲さぬ人であつたら實に幸又若し行ひつゝ有る人ならば、この青年の如くに斷然身を改めて貰ひたいものだ。尙詳しき療法、内服藥等は愚著「男學問病」に説いてある。

終りに臨んで一言したきは、餘り情慾を忍べば害になる、されば時には遊廓にでも行き射精す可しといふ愚論を弄する者がある、之を一應辯駁しておかねばならぬことである、抑人間は色慾に限らず凡ての情慾を壓抑する意志力を備へて居るから、人間たるの資格があるので、若し情の動くがまゝに猥行を敢てしたら品性忽ち墮落し、人倫大いに紊亂するに至る、彼の動物は斯る意志力が無いから

尙生殖器衛に就ては後章の生殖學を参考せらるべし

一定の時期だけ情慾の發動する遊牝期といふものがあるのである。人間は別に交尾期といふ時が無いから茲に情慾を制して衛生を全うするのである。彼の一生涯情慾を制して更に妻帯せぬ高僧が長命を保てる事實は古今に澤山有る、又極端な例を擧れば翠丸を切つて宮中へ仕へる所の支那の官宦が敢て短命でも無い、况んや男子は三十歳迄、女子は二十五歳迄情慾を壓抑したからとて何の害があらうぞ、決して愚論に惑はされてはならぬ殊に學問に従事する者は大いに慎しむ可きは色である。

衛生學終

内科學

以下説く所の各病の排列が専門書的に整然となつて居らぬ。例へば「神経系統の病」と言つても、眼、鼻、舌、延髄及び神經系を附ければならぬ。茲には其の次第が無く、唯人の福り易い著名な病文を雜然と説いてあるやうなものである。

神経系統の病附精神病大意

神経衰弱症

余は之を勝手に豪傑妨害病と名づけてゐる。其の譯は本病に罹る者青年者の將來を豪傑に妨げることである。

〔原因〕第一に遺傳である。中には子々孫々に傳へて一系を爲し、常人の眼には普通人と異ならぬやうなれど醫師より之を見れば本病者の系統だなど判断出来る。而して其の疾病の發するは大抵小兒時代では無く主に青年に催すものだ。然れば後に述べる豫防法を守れば縦ひ遺傳が有つても一生發せず、即ち豪傑にならぬとは勿論限られぬものである。

第二に精神過勞が原因となる。縦ひ遺傳が無くても非常に精神を使役する時は本病に罹ることがある。例へば學資金も無いのに人並よりも立派な學者にな

症神經衰弱

らうとして徹夜の勉強するとか、或は勝敗を期し難き戦争をなして大膽なる策略工夫を運らすとか、又或は賭博的に投機の商業をなして常に一喜一憂するとか、或は撰擧の競争をなして何時も心をビク／＼させてゐるやうなものである。

第三の原因は劣情遂行である。殊に青年が手淫を侵すために本病に罹るのが甚だ多い。又手淫其の物では病氣となるまでに影響を受けたので無いけれども、偶々其の害ある事に就いての講義を聞いたとか、或は親ら其書を読んだ場合に以前の失行を非常に悔い、遂に煩悶の餘りなるものもある。

其外細く別れば尙幾つかの原因あるけれど、大體は右の三因で此の三因中、二因以上の合併は大いに病氣を重くするは言ふまでも無い、例へば遺傳ある者が精神を過勞しつゝ劣情を遂行するやうな道理である。

〔病狀〕余は便宜の爲に精神的と肉體的に分け前者より次第に述ぶることにしませう。

(一) 無用の問題が起る——本病に罹ると今己れが爲しつゝ、有る仕事に關係無く

或は其他何の事變も起らぬのに、色々な問題が心の中に湧いて來る、例へば己れは數學専門に複習して最中なるにも拘らず、「若し日米戦争が起つて我國大いに勝つたれど、價金を更に取りぬ場合には何うなるだらうか」とか、「鳥は羽あつて自由に空中を飛翔すれども人間は何故に羽あらざるか、又何故に空中を飛行し能はざるか」など、數學其方抜けにして我に何の關係も無い事柄を穿鑿する、之を醫道では「穿鑿狂」と名づけて病的にするけれど、素人目には普通人としてゐる、併し斯の如き事を穿鑿してゐるやうでは到底豪傑にならぬ丈は誰にでも了るでせう。

(二) 疑ひ深くなる——何事に限らず疑ひ深くなつて疑ふ可からざる事までも疑ふやうになる、例へば「資本を投じて商賣した所で果して生活を支へられる客があらうか」とか、或は「書留で金を送つても若しや紛失せぬだらうか」といふやうに普通人の疑ふ餘地の無い事までも頻りに疑うて心を煩悶せしむる如きを云ふ、之を醫道では疑惑狂と云ふが斯の如き人も矢張豪傑たるの資格無いことは確かであらう。

(三) 意氣揚々——僅かに得意なることがあること、意氣俄かに昂り、人に誇りたくて堪らぬ例へば己れの作が偶々「某雜誌」の懸賞文に當選した、成程普通の人さて嬉しく無いことは無いが、本病者になること其の度が一層にも二層にも甚しくなり、或はこれを人に見せびらかし、或は再三再四讀んで見て自らの文を自らで感嘆し、果は先輩の文學者も眼中に無いやうになり、自ら先天的の大文豪者たるを許すやうなものである。嘗に文學のみならず商業に従事する者政事に奔走する者其の他誰にても斯ることの有るものなれば何人もよく——自省せられたるものだ。

(四) 失望落膽——これは右の反對で僅かの失意に出逢ふと非常に失望落膽し、世界中に己れの如き不幸な者或は愚人はあるまいと意氣消沈する人を云ふ。例を前者に取つて見ると、某雜誌の懸賞文に當選したる所から先天的の大文豪者を以て自任し、今度は尙一層の名文を書き撰者をして後に堂若たらしめ、彼より書を我に送り、「先生の文は余輩の到底當るべき所に非ず、以後選者を先生に譲り併せて余輩の文も先生の批評を乞はんものなり」と言はしめよう、是に於て

苦心慘憺一大長文を草して送る、待つあるの一月何ぞ長きや、漸く期日に至り、蒼皇として某雜誌を繙けば、豈計らんや選外佳作の部にも無い、是に於て失望落膽して泣く、怒る、怨む、悲しむ、果は己れのやうな不才は世にあるまい、嘗に文章のみならず何事にかけても普通以下の人間だ、甲に比べても乙に比べても己れの方が愚である、將來如何に學んでも逆も成功は覺束無い、嗚呼何うしたらよからうと自分で自分を天下の愚人にして、了ふのである。得意失意は誰でもあるけれども、斯の如き状態になる人は豪傑どころか憐れむべき境遇に一生を送らねばならぬ。

(五) 取越苦勞をする——心配は多少誰にでもあるけれど、本病者の心配は今現に無い、架空な事柄までもクヨクヨ考へて断えず、其事が念頭を去らぬのである、例へば少し頭痛がするところや、脳病で後には卒中の爲に斃れるので無からうか、或は肺結核に罹らぬだらうか、或は我が親、我が兄弟が癩病を傳染せぬだらうかなど、我身の事や人の身の上を案じ、果は大地震が有つて東京の市中此處彼處に出火し、鐵管は破裂して水を噴き、煉瓦や瓦は轟々と崩れ、余は此の下宿に居て火

責になつて死ぬ故郷の親達は嗚々歎かるゝであらう否其の親達の方にも海嘯が無いとも限られぬ父は元氣だから山の上でも逃るかも知れぬ母は到底駄目だなど取越苦勞をなし泣いたり悲しんだりする斯の如き人は何事に限らず常に不安の念を抱き自己の職業も安心して働けぬものだから然れば豪傑になれよう筈も無いであらう。

(六) 雑念頻發——患者に依ては穿鑿又疑問乃至は杞憂などは左程起らぬけれど唯取止の無い雑念が頻りに起つて來て勉強などを大いに妨げるのがある例へば今物理書を講じてゐる最中に餅菓子食べたいなアと思ふ餅菓子といへば去年の今頃は加藤と共に二十錢を平げたことがあるさうく彼の加藤と洋行論をした結果喧嘩をしたことがある洋行するには三百圓の旅費が要る親爺に三百圓を工夫させるのは無理だ親爺は何時もなく咳嗽をしてるが若し肺病になりはせぬか……さてく何を讀んでゐたか分らぬ「眼鏡のレンズ凹なれば斯々若し凸なれば云々……」何うも此の文章は拙い。併し物質學者の書いたのだから仕方が無い我が國人は文學思想に富んで居れど文學思想といへ

ば田中は仲々上手に小説を作る己れは何が得意だらう寧ろ實業家にならうかなど、一事が深く印象せぬ中に又他事に移り之をも決定せぬ中に又他方面を考へてる的人をいふのである。これも同じく後に豪傑になられる道理は無い。

(七) 念を入れ過る——「念には念を入れよ」といふ諺もあれど之は其れと異り何事にも念を入れ過るのである。例へば土藏の鍵を掛けて來たれど若しや掛けずに居りはせぬだらうか是に於て又戻り手で開けて見る開かぬそれでも尙不安心でならぬ更に錠を脱して見る成程掛つてゐたで又掛ける又手で開けて見る斯の如くに幾度でも繰り返して漸く安心するのだ。これも醫士の眼から見ると矢張本病に罹つてゐるのであつて病氣平癒の上ならでは豪傑得て望む可くも無い。

(八) 記憶力減乏——本病に罹ると次第に記憶力を減乏するものである。幼時は學校で賞められた位に記憶力の善かつた者が青年時代から急に物事忘れ易く其の時成程と理解しても少し日が経てば茫として影を捉へるが如き感覺とな

り、外國語など覺ゆるには非常に困難し、段々病が進めば辭書を引いて其書を開づるや否や其字を忘るゝこと程左様に忘れ易くなる、事茲に至れば如何に豪傑たらんと噪つても豈得可けんやである。

(九) 無常の感が起る——無常の感と言へば語弊があるかも知れぬ。が併し余一己の積りでは唯單なる悲哀とは異り、即ち普通人の喜ぶ可き事も悲觀し、悲しむ可き事は尙更悲觀し喜ぶ可き事でも無く、悲しむ可き事でも無い事も悲觀する故に人有つて結婚を爲せと勸むる者あれば逢ふは別れの初めだ、謝絶し人の死を見ては嗚呼無常なるかなと泣き、花を眺めても、月を望んでも皆常住不變の物でない、と觀念し、我は何の爲に生れたるか、我は何を目的とす可きか、嗚呼萬事解す可からず、嗚呼萬事解す可からず、嗚呼人生朝露の如し、など、世を果敢なみたる末は華嚴の瀧が戀しくなつたり、淺間の噴火山が懐かしくなつたりする、縦し之までに甚しくならぬとしても、「來年の事言へば鬼が笑ふ」的の言行を取り何事も勇往進ずる氣象は段々取れて了ふものである、宗教的人に論せしむれば、何と評するかは知らねど、醫道では之を病的なりとし、治らぬ以上は豪傑

になれぬ人とするのである。

右にて雜と精神的病狀を述べたれば、次は肉體的病狀を説くとしよう。

(一) 悪いと思ふ所が悪くなる——本病に罹つてゐる人が偶々食欲の進まぬ時が有つて、若しや胃病で無からうかと心配し始めた、すると矢張胃病の徵候を呈はし、胃部に疼痛を感じたり、或は嘔氣を催したりする。又若しも脊髓病をビク／＼恐れてゐるとすれば、脊柱に痛みを發し、嘗て聞いた脊髓病者の徵候通りになつて來る。其他肺病、心臟病なども恐れる儘に襲うて來る、言はゞ病氣は御誂通りになると言つても可い。

(二) 陰萎になる——之は第三の原因、即ち手淫を侵したる者が手淫の害を知り、其の惡結果を心配し過ると生殖機能を害して、大いに陰萎となり、醫師が「君は手淫を侵してゐるけれど、幸に身體を害して居らぬ、以後爲さぬとすれば憂ふるに足らぬ心配さへ爲ねば陰萎も從つて治る」斯う繰返して辨すれども、本人は一向之を信せず、却つて醫師を不深切とし、或は診斷出來ぬから胡魔化するのだと思ふものである。

(三) 一般の徴候——頭が重苦しく且つ鈍く痛む。眼は疲れ易く爲に長く書を讀むことは出来ぬ。夜は寝られぬ、即ち寢ようとするれば色々のことが胸に浮ぶから眠られぬ、眠られぬから浮ぶ、斯くして漸々眠つても夢ばかりを見て其の夢も恐い夢、悲しい夢、然らざれば猥がましい夢、兎に角碌な夢は見ぬ、朝になると仲々起るに懶く、起き出で、も身體は大いに疲労を感じる。食欲は進まず偶々珍らしい物を食べれば大分進むやうなれど、直に厭が来る。便は秘結して二日に一度三日に一度、若し又毎日通しても甚だ少量であつて而も硬い。手足は冷えて僅かの寒さでも身に沁む普通の人ならば氣が附かぬ程の障子の孔から来る風が過敏にて寒く覺ゆるやうになる。又動悸は直に高ぶり易い、少し重い物を持ち上げるとか、或は坂を上るとかすると呼吸が頻繁になつて動悸は早鐘の如くにドキ／＼と搏つ。凡べて身體が何と無く勢力を失ひて歩行しても直に疲れて了ふものだ。

〔豫後〕本病は何程續くか又治るか治らぬかと云ふに、これは一概に斯うと定められぬ數月で直ちに治るのもあれば、或は又一生涯繼續して加之に子々孫々の

家傳にするものもある。又余の經驗に依ると「君は豪傑防害病に罹つてゐる、心を確かりしろ、モット磊落になれ」是丈勵ましたので直様飄然と悟りズン／＼と治つて了つたものもある。又家が富有であつて長く親を有つてゐる人になると病は行きつ戻りつしてゐる中に、晩年になつてから何時の間にか自然に治つて了ふ者もある。けれど豪傑にならるべき年を過ぎてゐるから、凡人で終るより仕方は無い。非常に重いものになると、次第／＼に衰弱して此の世を去らねばならぬものもあるし、或は轉じて誰にでも診斷出来る所の精神病即ち發狂者になることもある。

〔豫防法〕縦ひ遺傳のある人でも豫防法を嚴重に守れば必ず發らぬのみならず相當に勉むれば豪傑にもなれること受合だ、况んや遺傳の無い者は尙更である。然らば其の豫防法は如何請ふ左に逐一之を述べん。

(1) 規則的生活——幼少の時から規則的生活即ち秩序ある生活を爲さねばならぬ。何時には必ず起きて何時に寝ね、何時に食して何時に勉強し、何時間遊んで何時間寝るなど、悉く汽車發着表の如くに守るといふことが本病を防ぐの第一

である。

(2) 過重の學問を避けよ——人間は何時も如何なる病氣に罹るかも知れぬものなれば學問なり技藝なりを修業中圖らずも數日乃至數月も學校を休業せねばならぬこともあるし、或は又缺席せずには授業を受けてゐても人並程覚えられぬ性質である。困つた事には何時も己れの力より重過る學問を研究してゐることになる。此の時に何糞ッ忌々しい徹夜しても追附いてやらうと無理勉強をなして漸く人の尻尾に附いて何うか斯うか及第して上の級へ進んだとせんか、上の級へ進んでも元が無理に上つたのだから、矢張過重の學問をしてゐることになる。斯くて其次も、順送りに過重の學問に従事し、遂に學問は消化せぬのみならず腦力は委靡して所謂豪傑防害病になるものだから、一年や二年乃至は五年や六年遅れたとて後日豪傑以上になれば、それで宜いものだから、今は縦ひ一級毎に落第しても能々消化せぬ中は進級せぬやう心懸けられたいものだ、之を一言に盡せば、「學問技藝は急いで急がず急がずして急げ」と此の心懸が何よりの豫防法である。

(3) 友を多く有つな——更に友の無いのは沙漠中に生活するが如く、如何にも淋しいものではあるが、之を口實にして餘り多くの友を有つと、又本病に罹るものだ。此の理由を説明するには多くの頁を費さねばならぬから略するけれど、余の經驗に依れば、青年時代から友を多く有つものは早く劣情を遂行するやうになつて、必ず豪傑たるを妨害するやうだ、殊に年齢學力の懸隔する者が相逢つて友となるに於ては尙更である。

(4) 自然の美を愛せよ——「自然の美を愛せよ」とは山水花木の如く人工ならざる美を愛するので、此心あれば卑しい遊藝などに心を奪はれぬものだ、書生が下宿屋の二階で尺八吹いたり、碁を圍んだりしてゐるやうでは本病に罹らぬまでも豪傑に知られる筈は無い。

(5) 劣情遂行は斷じてならぬ——原因の章でも述べた通りなれば重ねて説明せず。

(6) 冷水浴——此の効能は屢々説明したから讀者諸君は既に御承知でせう、兎に角神經を強壯にし本病のみならず萬病の豫防となるものなれば、此の實行が出

來ぬやうでは薄志弱行の人と評せねばなりません。まい。

(7) 運動——此の効能は今更喋々する必要も無いが更に繰返せば精神の鬱々たる時にも運動せよ、劣情の起る時にも起つて運動せよ、食欲の無き時にも運動せよ、寝られぬ時にも運動せよ、倦い時にも運動せよ、腹の立つ時にも運動せよ、悲しい時にも運動せよ、運動は諸病の豫防薬である。

〔療法〕右の如く豫防してゐても罹つた場合或は現に罹りつゝある人は左の如く療治するが適當であらう。

(一) 慰藉——之は自分が自分で慰藉することは出来ぬけれど、醫士或は醫士で無くても然る可き徳望ある人が本病者たることを判断したる時は赤誠を籠めて其の患者に慰藉を與へねばならぬ。凡て本病者は病狀の章でも述べた通り杞憂的或は悲觀的になるものであるから其の杞憂の杞憂たる所以や及び悲觀するに足らざる事柄を自ら看破せしむるに足るやう説明せねばならぬ、若し患者にして一度之を看破したる曉は夢の覺めたるが如くズン／＼治つて了ふものである。

プロームラー
プロームカ
プロームナト
プロームアン
プローム
モニウム
草丁
當藥
龍胆
右一錠
一回三錠
三頁に書
所より發
弱ある神
一には其
る著者と
の一人と
た處方

(二) 適度の仕事——本病者たることを判断したるときは適當なる仕事を與へねばならぬ。例へば茲に青年學生が有つて、本病に罹つたとすれば前章の如くに懇々慰藉を與ふると同時に、農事を手傳はしむるか、或は細工物を命ずるか、して現在の思想を一時轉換せしむるが肝要だ。若し然らずして、唯悠悠遊ばしめておくに至つては益、病勢を盛んならしむるのみに至ること往々あるものである。

(三) 感化——病者若し得意がつてるやうならば、左程に得意がるに足らぬ事を諷刺し、之と反對に落膽してゐるやうならば、英雄豪傑の傳記でも聽かせて、自然に奮發す可きを悟らしむるなど、凡て何事に限らず、善良なる風習に感化せしめねばならぬ、されど、若し之を直接に説破するときには、病者益々反抗心を起して病勢愈盛んになるものである。

(四) 體質改良——病者若し多血性の肥え太つたる人であるならば、寧ろ滋養物を與へぬやうにし、而も勞働を命じて瘦せしむる方法を取り、病者若し貧血性の瘦せ細つてるならば、滋養物をドン／＼與へて適度な運動をなさしむるが如く

に凡て其の體質を一變する策を講せねばならぬ、體質一變したる爲に精神も亦大いに快活になつた例は少く無い。

(五) 沐浴法——冷水摩擦殊に雨浴は本病を治療する上に於て最も効力あるものである、乃ち一日に三四回も雨浴を勵行すると、一方ならぬ爽快を覺ゆるものである、而して晩には寢際に温浴をなし、直ちに寢床に入るが宜い。寢際の温浴は睡眠を催さしめ便通を調ふる上に於て實に卓効あるものだ。凡て沐浴は身體を直接に強壯ならしむると同時に精神を他方に誘ひ、爲に鬱憂を去らしむる効力がある、醫道では之を誘念的療法といふ。

六) 按摩——按摩も亦頗る効あるもので、殊に便秘性の人には是非試みるが宜い、眠られぬ折などに軽く按摩して貰ふと何時の間にか眠つて了ふことは余の屢々經驗した所である。

(七) 運動——運動の方法種々あつて一概に之と斷定することは出来ぬけれど、登山漕舟は誘念的療法を兼ねるが故に余は最も良効あるものと信ず。

(八) 藥物——藥物は病大いに進んだものには必要なれど、可成は用ひぬを可とす。

若し用ふるごすれば、健胃劑、鐵劑、血性の人に鎮痙劑及び神經性の鎮痛劑等である。今一二の處方を左に書いておかう。

▲健質亞那根浸 (三〇) 一〇〇〇 橙皮舍利別 一〇〇〇

右一日三回分服 (食前三十分)

▲蒲公英越幾斯 三〇 甘草末 適宜

説明——前者は神經衰弱的の消化不良には良効を奏し、後者は便秘する人の消化不良に甚だ宜い。

▲乳酸鐵錠

一日三回食後二錠宛

説明——貧血性の人に與ふ。

▲安知歌貌林 一〇 臭刺 三〇 乳糖 適宜

右分三包一日三回一包宛

説明——頭痛を鎮め精神の過敏を防ぐに於て仲々効がある。

▲抱水アミーレン 二〇〇

内科 學

プロモコル
乳糖 一包一日
三回食後一包
宛 連服しても胃
無きアローム
劑で、不眠症・
精神煩悶等に
長効である。

歌私的里

我國で言ふ所
の血の道病は
婦人に限るは
れどヒステリ
イは婦人に限
らず男子にも
在るものであ

右膠囊に盛り臨臥に頓服

説明―神經家貧血家或は肺勞家等の不眠には持つて來いの麻酔劑である。

▲樟腦 〇〇五 白糖一〇

右一包となし臨臥頓服

説明―劣情の起る者及び遺精に効が有る。

尙電氣療法食餌療法等も有れど、要するに精神を爽快ならしむるやう工夫するが第一等の良策である。

歌私的里(血の道)

「血の道とは如何なる病氣か」これは醫學上の名では無く、昔より誰が言ひ始めたと無く自然に命名せられた素人的の病名である。其の中には今の所謂ヒステリー病が大部分で、その他神經衰弱、依ト昆垚爾、生殖器病等の或る病狀も包含せらる、換言すれば十五歳以上の婦人の、神經質病と解釋して可からう、而して我國の婦人達には頗る本病が多い、彼の有名な肺病よりも多い。肺病は遺傳せ

眞のヒステリ
イは精神病と
も徴して可殖
も徴して可殖
器病等より來
るの如く、殖
器病の爲に殖
神を儲ますよ
る來るのであ

ぬけれど、本病は遺傳する。然るに中には本病で有りながら無病だと本人自身も思ひ、他人よりも斯く思はれてるがある、故に攝生もせねば療治もせずして一生を柔弱に過し、従つて弱い國民の種を蒔いてゐる、それが何ういふものか、斯道の人も餘り八釜敷言はぬ、實に慨かほしいことだ。故に余は本病に就き、頗る詳しく述べて讀者の注意を惹かうと思ふ。何卒公侯の夫人姫様より女學生達は、言ふに及ばず裏店の御内儀、娘子達に至るまで、博く讀んで頂きたいものだ、嗚呼讀んで頂きたい。

〔原因〕神經性の遺傳或は重病後或は貧血或は衰弱或は精神感動即ち驚き怒り、心配事、刺戟の多い小説芝居を見るなどより起る、又生殖器病より反射的に來ることもある。

〔病狀〕奇妙變挺な病で、之に精神的と肉體的とある、余は今精神的より列記しよう、就ては斯道の學者吳博士の説かれた物は、頗る詳細に而も有益なれば、之に余の經驗を加へて御話することに致します。

嫉妬深くなる――例を女學生に取れば、今まで親しく交はつた朋友の心も一時

に疑はれ度々訪づれて來れば何か爲にする所あるかの如く邪推し去りて來らざれば尙更に腹が立つ其の朋友にして學校其他の成績が宜ければ己れを卑しんでるやうに思はれ又反對に己れの方が宜ければ己れを惡むかの如く思ふやうなものだ。又例を一家の妻君に取れば其の良人が品行方正鐵壁の心を抱けるにも拘らずこれを嫉妬する何ういふ風に嫉くかといふに、勿論品行方正であるのだから之と點を打つ所は無いが唯想像するだけで腹が立つ即ち假りに其の良人が情婦を有つて其れのみを愛し己れを次第に遠ざけたと考へて見ると其の時の良人の姿其の時の情婦の様アリ／＼と眼に映りさア腹が立つて堪らぬ其れ故アリ／＼して最愛の夫に對する夫より羽織が何處にあるかと尋ねられても「知りませんよ、エヘン」といふ調子になる良人は妻の病氣なることを知らぬから「何が腹が立つ失敬なッ」といふ工合になるに相違無い。斯うなればなる程嫉妬の炎は益々燃えて夫が下女に物言ふのも我が母や姉妹に優しくすることまでも悋氣の種となり遂に一家の平和は破れ朋友との情合も無くなり世を味氣無く暮し心身は次第に衰ふるのだ。之を世間の人は病的なり

と知らず醫士でさへも診断がつかずして輕々に見過すことがある、されど幸に早く醫士の診断する所となれば全治して目出度くなるのだ、請ふ下に述ぶる所の療法を見られよ。

記憶が悪くなる——記憶の悪くなるは第一に注意が散漫となるからである、本を読んでる中にも色々な取留の無いことを考へ出し或は人と談話してゐる中にも様々な思想が浮び人より何か質問をしてゐるのに、「ハイ左様で御座います」と頓陳漢な返事をしたり又「今御話して御座いましたが何でしたらう」などと云ふやうになる、又嘗て屢々往復したる知人の家へ行かうとしても其の道を忘れ尋ね／＼て漸く行くやうなことになる、斯の如き徵候も餘程重くなれば病氣なることが了るけれど初めの中は輕々に見過すものだ、重くならぬ中に療治せねばならぬ。

懦弱になる——爾來記帳面なる婦人が段々に不性不規律になつて、筆管へ着物を仕舞ふことも面倒臭く湯に入るも懶く髪は崩れてゐようが顔などに少々墨が附いてゐようが左程氣にも掛けず、結句寢轉んでゐた方が宜い。換言すれば

何だ矢でも鐵砲でも持つて来いといふやうな調子になる。これは凡て意志の柔弱になりたる證據であつて矢張病的なれば重くならぬ中に治療を加ふべきものである。

嘘つきになる——敢て故意に嘘を言ふ譯ではないが、前述の如く意志が散漫として記憶力が悪くなり、色々なことが錯亂して、爲に初め見た通り聴いた通りを話さぬからである。例へば何女は重い熱病であると聞いたと同時に一家中に傳染せぬが、或は其の人の亡くなつた後は子供達は可哀相なものだと想像したことが、後にさう聞いたやうになり、何女は熱病で亡くなり、間もなく後妻が入り込み、子供は大いに虐待されてゐるさうだなど、話す又夢幻の中に盜賊が忍び入るを見、己れは駆けて警察に訴ふ、巡査が来て見れば更に斯る形跡は無いといふ如き事柄が屢々新聞紙上に在る。これ皆病的より來るのである、治療を怠つてはならぬ。

動物好になる——犬猫馬牛何でも獸さへ見れば可愛くて堪らぬ、馬車馬の走るを見ては嗚呼と涙を流し、或は犬猫が打たれたるを見て大いに憤慨し、其の打つた人を實に無慈悲と怒り、甚しきは其の犬猫の爲に仇を報せんとするものさへもある、其他奉公人には香の物ばかりの副食物を慘酷とは思はぬけれど、犬猫には注意周到で牛肉魚肉と經濟を關はぬ如きも、これ亦病的である、この病的が高まると、遂に動物狂になる、本病は男子にもあれど、婦人には殊に多い、重くならぬ中に注意す可きものだ。

愛情が變る——昨日まで甲を非常に可愛がつてゐたのに、今日は大いに悪くなつたり、又反對に以前悪くかつた人を色々と理屈を附けて愛するやうになつたり、甚しきは最愛の親子までも疎んずる様になる、此情は人にばかりで無く、今まで大いに盆栽を好んでゐたのが急に厭になつて、悉く人に與へて了ひ、他日後悔して之を貰ひ返すなどの滑稽な行ひをする、此の病氣を始めの中は機嫌換な人だなど言つて、同じく輕々に看過すものだ、何うか本章を讀まるゝ方は反省して戴きたい。

欺かれ易くなる——從來は仲々伶俐で人に欺かれるなど無つた賢女が今は愚なることまでも信じ、惡人に家財を任せたり、最も恐る可きは道德堅固であつた

女學生が放蕩書生のために欺かれて墮落し或は有夫の妻君が貞操を破るに至る、これ皆意志の柔弱になつた爲である、嗚呼病氣は徹しく萌せる時に療治す可きものだ。

我儘になる——女は柔順謙讓の徳備はり然る後賢母良妻たる資格があるのだ、然るに何でも我を通して是非金剛石入りの指輪を買つて呉れどか、今日芝居へ遣つて呉れねば斷然離縁を請求するなど云ふは無教育なる賣春婦或は藝者上りの妻君に屢々見る例だ、所がさうでは無くて善良なる家庭に育ち教育も十分に受けたる婦人で柔順謙讓の美德も有つたのが何時の間にか我儘になり御客が來ても己れの心面白からねば、ツンとして歸れがしに待遇したり、少しの事にも奉公人を叱り飛ばして一步も譲る所無きに至る、是等は全く病的の然らしむる所早く加療す可きである。

街氣になる——今まで謙遜な婦人が所謂見え者になつて、何事も華やかに家の經濟も省みる所無く、無暗に御馳走をしたり、或は金時計金の指環家の裝飾衣服の質など一切上等なるを選び、己れは貴顯の婦人令嬢であるかの如く氣取り、加

之に言葉遣までが之に應じて應揚になり、「ハア左様か」など顎で指圖するに至る、之に就いて適切なる實驗談を言はしめよ、余の知つてる某文學者の妻君が其夫の亡くなりし後本病に罹つた、余はそれとは知らず用事あつて其の家に至つたれば、未亡先生衣服を着飾り、坐蒲團二つを床の間に敷き、それに悠然と坐り、片手を懐ろにし、片手を火鉢に炙りながら、「糸君か近うく」といふ如き口吻であつた、余と同伴したる友人は「氣ざな奴」だと腹を立てゝゐたが、余は夫に別れ、精神を悩した結果病氣に罹つたので可憐なものだ、と説明した論より證據後には入院して治療する程に身體も亦衰弱したさうだ、心身の關係は妙なものである。

無い物が見ゆる——無い物が見ゆるばかりで無く、無い聲も聞ゆる、之を幻覺又錯覺といふ、事茲に至れば病氣は非常に進んだのである、所謂狐憑病などもこれだ、最初はハテナ今女の姿が見えたやうだが、か、今我を呼んだやうだが、か、位に過ねども、段々高じると身體が二つになつた如くになり、例へば狐になり、又己れに復り、狐になつてる時に言ふことゝ己れに復つてる時に話すのとは違ふ狐

になつてゐる時は己れを忘れ、己れになつてゐる時は狐の時のことを更に覚えてをらぬ、實に妙變挺である。嗚呼斯うならぬ中に色々の徴候があつただけで、其れを知らずに見過したのだ。されば讀者諸君よ何うか本章を熟讀せられたいものである。

臆病になる——これは衝氣と反對に何事にでも甚だ臆病になり、一寸感冒を引いても肺病になつたやうに思はれたり、或は大地震を豫想して竹藪の中にでも住みたいと願ふが如き風になつたりして、遂には見る物聞く物恐ろしく、巡查を見ても己れを捕へて行くやうに感じ、果は何か大罪を犯してゐるかの如く戰々兢兢として心は常に不安の状態に陥る、斯うなれば月爲に面白からず、花爲に可笑からず従つて身體も衰弱し、醫療を受けても容易に挽回す可からざるに至るものである。

迷信になる——無智文盲な親に養はれたる無教育な婦女子の中には、蓮門教の所謂お水を大學病院の藥液よりも有難かつたり、禽獸草木を崇拜したりする輩の有るは珍らしいことでは無いが、併し相當の教育を受け、今まで常識を備へて

ゐたる婦人が、次第に宗教迷信に傾き、怪しき教會へ行つて無智な輩と共に手を携さへて天理王の命助けて玉へ清めて玉へ……ドコドコドン〜と踊つてゐる。其丈ならば尙可いが、後には精神恍惚として白装飾の神體を見たり、或は人事不省になつたりして、我が大切な親夫までも之を信せぬ人は大いに卑し、み教會の神官は非常に尊く思はれ、中には夫等猶奴の爲に清淨無垢の身體を褻されながら之を殘念と思はぬに至る、嗚呼長太息の至りだ返す〜も病は徴候否未發に防がねばならぬ。

右にて雜と精神的の病態を述べたれば更に肉體的の病狀を説かん。

頭痛がする——堪へられぬといふ程でも無けれど、何と無く鈍い頭痛がして、整然と座つてゐることが苦い、續いて欠伸が出る、で何かに倚り掛つてゐるとか横になつてゐるとかして暫時休んでゐると、何時の間にか治つて了ふ、斯の様な事は誰にでも無いでは無いが、血の道病の人は屢々有つて、病進めば進む程數多くなり又苦しむ時間も長い。

顔色が悪くなる——何病に限らず病と名が附けば多少顔色の變るものなれど、

本病は又特別である。即ち多くは蒼白くなつて何處と無く淋しい色を呈はし生來の美人でも又如何に化粧しても之を隠すことは出來ぬ。併し初の中は此の色が連続しないで、一日の中には幾度でも變る。七面鳥といふ程では無いが、兎に角活々とした顔つきをしてゐる時もあるれば、或は又打ち萎れたといふやうな色を呈はすときもある。それが病勢の進むと共に萎れた色ばかりになつて了ふのである。

眩暈がする——氣の張つた御客と話してゐる時、或は又芝居でも觀てるなどの揚句に目が暗くなつて來て身體がよろける。其の甚しきは其の儘卒倒することもある。

動悸がする——血の道の人は血液の循環に變調を來し易いものだ。或はこれからして此の名の附いた譯では無からうか、それは兎もあれ、僅かの刺戟即ち少し走るとか驚くとかかすると、心臓の鼓動は忽ち劇しくなつて早鐘撞くやうに動悸が高ぶり胸の中は苦しくて堪らぬことがある。但し平常は其の鼓動却つて普通よりも緩くなることもある。

逆上する——これも血液の變調だが一寸した事に血は頭へ上り易く、少し腹が立つても眞赤になる。左程で無い事を耻ぢても眞赤になる。而して暫時経つと反對に眞青になつて卒倒することもある。

月經不順になる——月經にも故障が出來て、其の來潮期が早まつたり、遅くなつたり、或は月經時の長くなつたり、短くなつたり、或は其の量が餘計にあつたり、少くなつたり、或は更に無いこともあつて、妊娠か知らと思つてると又反對にオヤ／＼一月に二度有るわいといふやうな事もある。

妙な感覺が起る——身體の方々に奇妙な感覺を起す。奇妙と言つても多くは痛むのである。或は痲痺質斯の如く關節に痛みを起すこともあれば、或は脊骨頭骨下腹などに痛むこともある。斯の如く何部と一定せぬ。又身體の方々に蟲の爬ふやうな感起すこともある。之を醫道では蟻走感覺といふ。其の他、燒け焦げるが如くに感じたり、或は咽喉に何か岡へてるやうに思つたり、又喉頭を占められるやうに覺ゆるなどする。少し話は違へど、食物に於ての感覺も妙になる。甘い物嗜む人が馬鹿に鹹嗜になつたり、或は酸い物好になつたり、或は又大好物のお薩

が嫌になつて其の代り大嫌な人參が旨くなるといふ如くに凡ての感覺が妙になる。

妙な癖が出る——今まで其様な事の無つた人が、本病に罹ると急に顔中を震はせて顔地震とでも命名すれば可いやうな事をしたり、或は齒齧をしたり、或は膝を振つたり或は亂れてゐぬ髪の毛を頻りに手で撫で擧げようとしたりするが人間は無くて七癖といふ諺もあつて斯く申す私も朋友から「君は妙に人の顔をジロ／＼と眺める厭な癖があるね」と忠告せられたこともある。男の血の道かも知れませんが併し私のは先天的血の道のは風來的だから自ら異なる所がある。

汗をかく——熱い飲食物を取つたり、大いに運動したりすれば、タク／＼汗の出るは勿論だが、本病者は謂はれ因縁無くて鼻の上や腋の下、又は身體中に汗をかくことが有るものだ、これ或は何か精神状態の變常より交感神経に作用を起して斯くなるのであらう。

熱が起る——血の道熱、或は歇私的里熱とでも命名したら可からうか、兎に角熱

が出て寒胃でも引いたのかと思へばさうで無くて、薬も服まぬ中に間も無く退散して、平常の通りになる、又或る時は更に熱の無いのに本人は大熱が有るとて騒ぐ計つて見れば嘘熱だ、實に妙な病である。

便秘する——通常ならば一晝夜に大凡一回位は便通の有るべきが生理的なるにも拘らず、本病者は二日乃至三日に一度甚しきは一週間も便通の無い事がある、而して縦ひ便通があつても思ふ通りにドツサリ無い、それがため何とも言へぬ不愉快がある。

消化不良になる——これも本病者の特徴と言つて可い位だ、即ち食欲は次第に缺乏し、揚句に悪心を催し、或は嘔吐する、嘈雜は出る、胃部は痛むなど、恰も胃病の如くである、乃で醫士は血の道だと診察すれば宜いが、唯其の徴候だけに依て治療すると浴ひる程薬を用ひても効が無い、泉源濁れり何ぞ下流の清きを見んやである。

睡眠不良になる——これ亦本病の特徴である。晝間の中とか或は人と話してゐる時などには薄ら眠いやうな事もあれど、いざ眠らうと枕をすれば眼はりんり

んど冴えて、色々な思想が胸に浮ぶ、浮ぶから眠られぬ、眠られぬから浮ぶ、斯くて夜の十二時乃至一時二時といふ時に、漸と眠れば悲しき夢、恐ろしき夢、或は取り留の無い夢を見、それで朝も比較的早く眼が覺める、それゆゑ何時も精神は不愉快で業務を取る事が懶くなるのである。

痙攣が起る——痙攣とは身體が引き釣れるやうになる事をいふのである、悲しいことに接したとか驚く可き事に出逢つたとかの場合に身體を彼是に動かして續いて仰になり、身を反らし、膝を立て、腰を持ち上げるやうな風態になる、之を醫道では角弓反張と云ふ、此の間は精神が朦朧となつて、或は笑ひ、或は泣き、或は叫ぶこともある、それから聲が嘎れたり、吃逆が出たり、咽が塞つたりするものである。

麻痺する——四肢殊に下肢に麻痺が起つて歩むことが出来ぬけれど、一脚のみ麻痺すれば其の脚を後へ曳いて恰かも跛者のやうな歩き方をするものである。知覺を失ふ——痛い痒い等の感受性が悉く減退することがある、併し多くあるのは偏側の知覺脱失で、脱失せる部は種々の刺戟を更に感せぬ、而して色までが

健側と患側と違ふ。健側は華やかであるに患側は蒼白い、耳も患側は遠くて、舌も半分は味を感せぬ。又鼻も片方は香はぬ、眼も片方は大いに視力が減じて、時には片方だけの色盲になることさへもある。是等の知覺脱失はシャルコーといふ人の始めて發見し、初めて詳論したことで、此の徴候が有つたら斷然本病者であると定めても可い。余の嘗て診察したる某婦人の如きは此の徴候が悉く具はつてゐて、試みに針で突いても更に感せぬと言つてゐた。

人事不省を起す——上來述べたる卒倒或は痙攣等の揚句又は悲哀驚愕等の折に卒然人事不省になつて、暫時又は數日の間何事も知らずに眠れるが如く死せるが如くなることがある。

生殖慾の變換——之を或者は充進すると云ひ、或者は減退すると駁し、甚しきは生殖器不能になるとまで論じてる人もあれど、余の狭き見解では充進するものに非ずして、必ず減退若くは缺乏するに相違無いと確く信ず、其の充進せるが如く見ゆるは意志が薄弱になつて、貞操を守るの心衰ふるからである、併し生殖器不能になるとは餘り重大に言ひ過ぎはせぬかと思ふ。

ザツと之にて精神的病狀肉體的病狀を説いたが最も重症の者に至つては内臓出血鼓張全身屈曲等の徴候を呈するもあるけれど是等は稀に見る例外なれば省く兎に角奇妙奇態な病である。

豫防法

豫防法

本病は精神と肉體と半分半分の徴候を呈はす性質のものなれば幼時よりの教育の善悪が即て本病を起す起さぬの大原因にならうと思ふ。女の子を有たる方は大いに御注意ありたいものだ先輩及び余の考ふる所では第一に子供の天賦の性質を考へて教育せねばならぬ例へば打ち沈んだ氣の弱さうな娘で有つたら他の子供と學問技藝を同等に進歩させようとしては不可ぬ可成快活に遊ばせ今は人に負けても後に勝利を得れば可いといふことを能く悟らせて而も懦弱にならぬやう導くが如き類である。後日血の道に罹る婦人は其の以前に於て父母の教育が嚴重に過ぎ爲に子供の天真爛漫を妨げたのが基になつてゐる事が多いものだ又反對に餘り甘やかして子供を賞め過ぎた結果が後に虛榮心の種となつてさらさらでだに此の心の強くなり易い女の子を血の道に罹らすや

うにもなる寛嚴中とは動かす可からざる眞理である。次に子供の性質如何に關らず餘り多藝を教ふるは後に本病を招くものである。學校から歸る間も無く三味線の稽古踊りの練習裁縫は勿論料理も和洋共知らねばならぬ琴も覺えておけ生花抹茶も興許を取れ日曜日には和歌を詠め三八の日は書の先生へ行け斯の如く孱弱なる女の子に彼も此もと精神を刺戟すれば他日血の道病にならざらんとするも豈得べけんやだ。次に子供の感情を抑へることに注意するが肝要である即ち正當なる感情を學ばせねばならぬ喜怒哀樂の情を縦いまいにし或は感情を偏固にしたりするのは甚だ宜しく無い。次に恐い話殊に怪物的の事は最も慎まねばならぬ子供の折は斯る妖怪談を聴きたがるものである然るに年長者が好む儘に判斷力の乏しい子供に向つて幽靈談を喋々する如きは恰も其子に毒藥を服ませてること同じ事だ一つ余の實驗談を紹介すれば或る年長者が十歳になる女兒に「或時或者が夜中旅行したるに亂髮の丈高き女が黒き齒を剃き出してイヒヒと笑つて見せたるに出逢ひ汗を流して逃げることを數町ゆくり無くも懇意なる知人に逢ひやれ嬉しや今斯々の物を見た何うか我

と同道してくれと頼む所が其の知人は忽ち前の女と同じ姿に變り斯ういふやうに笑つたかと又イヒ、を行つたれば其人其所に氣絶した云々」と話したるに之を聞いた女兒は忽ち恐怖して其の翌日より熱發し、數十日の間病床に呻吟した、今は其の女兒も三十歳前後になつてゐるが何と無く神經質で、今でも其話を思ひ出すと慄とするとの事である、此例を見ても妖怪的話は露聴かさぬやうにせねばならぬ、因に御伽話も餘り事實有る可からざる事は避けたい者である。次に猥褻なる物は嚴重に避けねばならぬ、子供だから知らぬと思つて子供の居るにも拘らず大人同志が喋々話すに至つては言語同斷である、其の時は無邪氣に聞いてゐても後に早熟の原因となり、早熟の人は本病に罹り易きこと東西の先輩が口を揃へて論じてゐる所である、彼の裸體畫裸體像なども宜敷ない、元來私は一定の年齢に達した男女には學校又は適當なる書物に依つて生殖に關する生理衛生を堂々と聴かす可き必要の有るものである、然るに却つて之を餘り秘密に過ぎると好奇的の淫猥心を起さぬとも限らぬものである、中學校若くは高等女學校の生理衛生書には是非此の一章を加へて貰ひたいものだ、然れども此の

一事は誠心即ち眞面目に書き眞面目に述べねばならぬ、假にも某新誌某書の如く、其の衛生を説くに託して淫猥心を挑發せしむるが如くに書いたのは不埒千萬である、識者の眼から見れば眞面目に書いてあるか無きかは直ちに了る、宜しく撰擇す可しである、序に普通衛生書に就いても一言しておかう、世の中に澤山刊行せられてある通俗衛生書中には随分人を臆病にするやうな書振も有つて之を素人の方が讀まるゝと間違つた衛生思想を養ひ、遂には僅かな病候が有つても其れで無いか知らんとビク／＼恐れるやうになり、爲に却つて本病を起す種になる、嗚呼通俗衛生書の書方は六かしいものだ。次に子供乃至青年には形而上の事を餘り教育してはならぬ、可成實用適切の事柄を以て導くが可い。同じく倫理を話すにしても利己は何うの利他は斯うのと理論に走らずして、實話を聴かせながら、本人自身に判断せしむる工夫にしたい、形而上の事を詰め込んだ結果は空想に流れ、想像に馳せて後には悲觀的人になるものである。前にも述べた事ながら小説芝居は大いに本病の原因となる、縦し本病にならざるまでも青年男女の爲には何れかと言へば讀まぬが宜いと思ふ、三度離縁を請求し

四度目に漸と腰を据ゑたる某婦人に就いて其の懺悔話を聴きたるに曰く、「私が幼少から小説を好み書中なる人を以て己れの理想とし、夫を有つたら嘸や斯の様に楽しいであらうとか、優しくして呉れるであらうとかと空想にのみ耽つてゐたが、即て結婚して見ると、豈圖らんや、小説中の夫とは正反對である、さア不平で堪らぬ、其の次の夫も又其の次の夫も矢張さうだ、是に於て翻然悟つて嫁いだのが今の家で御座います、決して若い者には小説を讀ますものでは御座いませぬ云々」誠に味ある言葉だ、されば見るにしても識者の撰擇を受けて、然る後に致されたいものである。右の外豫防法に就いて澤山言ふ可き事あれど、要するに規律ある習慣、空気が日光衣食住の善良等に歸すること、是等は毎章述べたる事なれば敢て言はずもがな。

血の道療

血の道療法

原因を追求するが肝要である、例へば生殖器病より反射的になつてゐるのなら、其の生殖器病を治せば、本病も亦従つて消ゆるは必然の理なるが如し。次に精神の刺戟を避けねばならぬ、其れに就いては本人よりも寧ろ家族教育をして掛らねばならぬ、家族即ち親夫又は兄弟等にして本病に對する智識が皆無なる場合には到底治らぬものと言つても可い、何となれば如何に藥用其他の攝生をしてゐても、家族より絶えず精神上の刺戟を與ふるからである、本人は醫士より精神上の教訓遊歩の効用等を聴き、真に其の通りだと感服して歸るや否や、家族は「其位な病氣に、餘り我儘ぢや無いか、遊歩も時に依りけりだ、今日は是非共御客の相手をして貰はにやならぬぞッ」と云ふ按排式にガミ／＼演られたとせんか、折角の感服も自暴自棄になつて益々僻む、僻めは尙ガミ／＼、事茲に至れば病は愈々増長するのみである、然るに本病者は我儘言ふもの、僻むもの、懦弱になるもの、妙な風になるもの、初期は病氣らしく無いもの等の事柄を辨へて居れば、其積りで處置するから、病者の爲には實に大幸福である。次に醫士の秘法を洩すやうな譯であるが、思ひ切つてこれを話せば斯うである。本病者に對しては、「軽いから御心配なさるな」との慰藉は何にもならぬ、寧ろ害である、「仲々重い、が併し余は一心込めて治療致しますから、氣長に余の指揮を守られよ、必ず治して上げませう」斯の如くに堂々と重みをつけて答へねばならぬ、何となれば本病者

皮膚の知覚脱
失せる部に金
屬板を載せる
其の附近の
知覚が暫時に
して恢復する
ことがある金
屬の種類は何
でも可い何
れも併し最
も効力がある

は病氣を誇大に訴へて人の同情を請はんとするものであるからだ。而して醫士は患者の信用を得て居らねばならぬ。家人も亦患者の信用する醫士を撰ぶが肝要である。如何なる名醫でも患者の信用せぬ人を壓制的に招き、壓制的に藥用せしめても其の効甚だ少きものである。次に患者が満足して運動するやう計らねばならぬ。運動法には種々あれど、就中草鞋穿の旅行、庭園の掃除、植木の入手登山、乗馬等が最も宜い。兎に角氣任せの運動を可成繼續せしめて、クヨク物事を考ふるの暇無からしむるが何よりの得策である。次に冷水洗拭、海水浴冷水灌注などの水浴法は神經を強固にする所の良藥である。これは寧ろ壓制的になさしめたいものだ。殊に痙攣及び麻痺の徵候あるものには尙更である。次に滋養食物を轉々交互に取つて身體の榮養を計ることは大抵の病に必要なれども本病は特に實行せねばならぬ。今朝は淡泊と湯豆腐を用ひたら、午飯には鯛の潮煮、晚餐には鶏肉の鋤焼といふが如く、品を換へ、或は料理法を異にして珍らしく樂しむつゝ、滋養を取らしめたいものである。次に内服藥としては阿魏、纈草、臭素、加留謨、抱水格魯拉兒、スルフナールなどを諸家皆用ひてゐる。今其の處方を記せば、

1 纈草根 浸 (二〇) 一〇〇〇 活弧の分量を括弧外の分量なる温湯にて煎するなり
臭素 加留謨 四〇 單舎 一〇〇

右一日三回分服
2 阿魏 丁幾 三〇 纈草 丁幾 四〇 苦丁 二〇 水 一〇〇〇

右一日三回分服
3 纈草 丁幾 四〇 林檎 鐵 丁幾 三〇 單舎 八〇 水 一〇〇〇

右一日三回分服
4 抱水 格魯拉兒 一〇 橙皮 舍利別 一〇〇 水 三〇〇

右臨臥頓服
5 スルフナール 〇五乃至一〇 白糖 適宜

〔説明〕1, 2, 3 は連服しても差支無れど、4, 5 は痲醉藥なるが故に習慣となる恐あり、時々用ふるを可とす。

能眠術療法は不可
本病に何ぞ
でなれば何
なり其者が
に催吐術に
つてあるや
病氣之向は
ラステリに
ステリに術
行ふ如き道
になるわけ
るなるわけ
で

〔原因〕身體の他部に急に血液を洩す場合例へば外傷分娩・流産・内臓出血・痔出血などが有つて其の部分に血液が多く滯ると、勢、腦髓に貧血するを免れぬが如し。其の他精力沈衰・驚愕恐怖も往々本病の原因となること珍らしく無い。氣の弱い婦人の如きは他人の出血する傷を見てさへ卒倒することがある。されば腦髓の細動脈が精神興奮の爲に痙攣するのだと醫學上では説く。次に身體過勞から起ることもある。殊に長久しく立つてゐる揚句に多い。次に胃の状態も亦本病と大關係がある。例へば朝早くより空腹を忍んでゐる時の如し。次に永い間の下痢からも起る。

〔病狀〕急性と慢性とあるが急性の方は其の始め何だか氣持が悪くなつた様に思ふと同時に眼が暗くなるやうに思はれ、それより脈が速くて數多く搏ち、耳が鳴り、目から火花出るやうに感じ、頭痛眩暈加ふるに悪心を催し、又眞に吐くこともあり、重きは人事を失なつて卒倒するのである。慢性の者は眠を催し易く、意思が變り易く、又倦み易く、食欲進まず、手足が顫ひ、而して急性慢性共に皮膚が蒼

白くなり、結膜唇などの色も褪め、四肢が冷たくなる。

〔療法〕原因を除くが何よりの必要である。失神卒倒には頭部を低く下げ、平らに臥さしめ、衣服を脱ぎ、顔面に冷水を注ぎ、濃い茶又は珈琲或は葡萄酒を飲ましめるが宜い。急性慢性共に滋養の食品を與へ、心身を安靜にしておかねばならぬ。藥品としては慢性の者には

▲沃度鐵舍利別 五〇 苦味丁幾 二〇 水 一〇〇〇

右一日三回食後分服

注意——此の薬を内服してゐる間に茶を服めば、茶の成分中の鞣酸と鐵とを化合して効力がないやうになるものである。

〔原因〕本病には一時性と持長性とあつて、其の持長性に至つては、其の原因が未詳であるけれど、兎に角酒類の飲み過ぎ即ち亞爾格保兒の中毒・月經の閉止・精神の過勞・胃病・心臟病・熱病・日射病・劇しい咳嗽などが之を誘ふには相違無いのである。

〔病狀〕頭部及び顔面が紅く熱くなつて灼けるが如き熱感があり、又結膜充血し

瞳孔小さくなり、頭痛、耳鳴、眼から火花が出るやうに見え、大いに差明く、而して其の持続時間は三十分乃至一時間に及ぶ。所が重症に在つては右の状態が愈々劇しく遂に癲癇狀に陥り、或は精神亂れ、謔語を言つたり、又は嘔吐を催したりなごする。

〔療法〕精神過勞を避け、舟遊、登山などを勧め、(輕きも)茶酒珈琲などの興奮性飲料を禁じ、耳後に時々蛭を貼け、頭部を冷すやうにするのであるが、其の早急に起つたる場合には、上半身を高く起し、病室は涼しく暗くし、而して腦髓に集つてゐる血液を他部分に導く策として、上膊や胸部、或は腓腸筋に芥子を塗り、温脚法をなし、兼て又全身の按摩を施すが宜い。其の他本病の原因となつてゐる病氣は勿論治療せねばならぬ。一般に左の如き下劑を服用するが肝要だ。

▲硫酸苦土 二〇〇 稀鹽酸 一〇 白糖 適宜 温湯 一〇〇〇

右一日三回分服

腦卒中

腦卒中 (俗に之をちいふ)

〔原因〕腦の小さい動脈管に粟粒動脈瘤を生じ、其の壁が破裂して出血するのであ

る。年少の者に發することは無いでは無いけれど、多くは四十歳以上の遺傳ある者に發し、殊に五十歳以上になつてから起るのが多い。又男女に別れば、女よりも男の方が多く之に罹る。誘因としては非常に精神の興奮する時、力役過度、酒精中毒、腎臟萎縮、心臟肥大症、暴食後過度の冷浴等である。

〔病狀〕前兆なく、卒然發することもあるけれど、大抵は前徵がある、即ち眩暈、眠氣を催す、記憶力が減する、精神が朦朧する、悪心、或は嘔吐がある、稀には眼瞼の筋肉が麻痺れ、足が強硬るなどである。愈、起れば其の重き者即ち血管壁の破裂部が愈、潤くて血液が凝ると腦實質に注ぐこと愈、速に且つ多量であるときは俄かに卒倒し、隨つて神識が消え、半身不隨となり、諸感覺が廢れ、呼吸は、鼾の聲を帯び、大抵二十四時間内に死す。其の輕き者は神識缺乏、半身不隨が次第に來り、長い月日を病魔の床に惱まされつゝあるものである。今一層輕き者は歩行も出來、精神作用も左程に缺乏せず、唯言語不明瞭になり、手や足が少しく顫へる位なものである。

〔療法〕其の急に發する者には、頭部を高く起し、上半身を擧げて少し靜臥せしめ

サヨゲン
○・〇二六六七
ヨードカリウ
○・〇二六六七
ヨードナトリ
ウム
○・〇二六六七
重曹
○・〇二六六七
ヤンチャナ根
末
○・〇二六六七
ケンサナナエ
○・〇二六六七
右爲一錠一日
三回一錠五
錠乃至七錠宛
之は著者相
談の一人加
はつた處力
一三三頁に書
いた所より發
賣したる發
中風症の豫防
者くは治癒さ
なる

脊髄勞

室内を涼しくし、窮屈な衣服を脱ぎ、頭部殊に出血の疑ある側方に氷嚢を當て、耳後及び顳顬には蛭をつけ、項部には發胞膏を貼り、腓腸部には芥子泥を塗り、左の如き藥を灌腸するが宜い。又顔面の赤くなつてゐる者には、顳顬部に吸角でも當て、瀉血を促すこともある。

▲加爾々斯泉鹽 二〇〇 微温湯 三〇〇〇

發作の緩かなる者には左記の如き處方を與ふ可し。

▲蒼蘆末 一五 大黃末 二〇 白糖 適宜

右三包に分け一日三回一包宛

その他吸收藥として沃度加倍誤を與ふ。又ストリキニーネを賞用する醫師もある。入浴は熱度の餘り高からざる中等度ならば一週に三回位食鹽浴として行ふは頗る効あるやうだ。次に食物は可成淡泊とした物を取り、飲酒を嚴禁し、身體及び精神の使役を避けねばならぬ。次に按摩療法及び電氣療法も多少の効がある。

脊髄勞(俗に「よいい」)

〔原因〕梅毒は主なるもので、或る醫師殊にストリキニムベル氏の如きは梅毒の外に他の原因は少しも無いものであるとまで言つてゐる。されど心身の過勞或は寒さや濕氣を冒す職業例へば漁夫獵師或は急性の傳染病或は房事過度遺傳麥角中毒及び外傷等は之が誘因となり、婦人よりも壯年の男子を多く侵すは事實である。

〔病狀〕初めは徐々に發病するもので、即ち下肢に電氣でもかけるやうな疼痛を發し、其の痛みは時として非常に猛烈なることも有れど、又或る症には甚だ軽く爲に患者は少しも意に介せず、僅かに痺麻質斯になつた位に思つてゐるものもある。それより胃痛があつたり、嘔吐を發したり、或は下痢が有つたりし、次に指尖殊に第四指第五指が痒い様な麻痺る様な何だか變な感じをなし、背や腰は絞めつけらるゝやうな痛さを覺え、頻りに頭痛がする。それから膝蓋の腱反射が失せ、之を素人に了り易く言へば、患者をして椅子に掛け膝以下を垂れしめ、其の膝の下を打つて健康ならば不隨意に反動せしめるものであるが、本患者は何の反動も無くなるのだ。而して瞳孔が狭く小さくなり、爲に其の瞳孔に光線が落射

内科學

しても縮小せぬやうになる。乃で此の瞳孔不變と下肢の疼痛と膝蓋反射消失との三病候が表はれたら他の症候が無くても必ず本病であると定めても恐らく差支は無い。されど三症候が揃はぬにしても本病であることもある。斯くて此等の症候が數月數年最も長いのは二十年も續いた後歩行が困難となり、其の歩むときに腰を高く揚げ、恰も鶏の歩くやうな姿となる。下肢や足蹠の知覺は大いに減る。若し眞直に立つてゐて眼を閉つれば全身振ひ搖く、これをロムベルク氏症候といふ。その外すべて筋肉の知覺は減り、小便が覺えなく出たりする。それも亦數年間續き或は時に治つたかと思ふと或は時に甚しくなり、彼是してゐる中に床に就いて呻るやうになる。それから腰關節に骨腫を生じて畸形を呈はすやうになる。又足の指尖は潰れることもある。斯くて身體の榮養は著しく衰へ、遂には頭髮及び爪が脱げ、見るも憐れな姿に變じ、素人は之を見て癩病であるかのやうに怪しむけれど、癩病とは大いに其の性質を異にするのだ。併し何れにしても厭な病と謂はねばならぬ。

〔療法〕梅毒が原因であれば後章に述べてある梅毒療法即ち水銀療法を行らね

ばならぬけれど、此の水銀療法は必ずしも効を奏するものではない、何となれば本病は大抵梅毒の後發病ではあれど、梅毒が依然として發してゐる最中に發することが殆んど無いからで有らう。それから微温湯の半身浴或は全身浴をなし、毎晩々々濕つた布片を以て下肢或は腹の周圍を纏帶する所の水浴療法は頗る効有れど、温浴や蒸氣浴は却つて病勢を重くすることがある。醫師が僂麻質斯と誤診して温浴を實行せしめ、爲に病が進んだ例も往々有る。又鐵鑛泉に時々浴せしむるも宜いけれど、其の温度は微温なるを可とす。次に身體を安靜になさしめ、心配をさせぬやうにし、夏期は涼しい山地に、冬は南方の温暖なる海濱に移轉せしめ、極めて消化し易き滋養の食物を取り、飲酒及び房事は堅く禁じ、善良なる空氣中に美しい花木でも眺めてゐるが非常に効あるものである。内服薬としては硝酸銀〇・〇一を一丸とし、初めは一日三丸を與へ、次第に増量して六丸となし、食前に分服するのである。その他ストロキニーネ、亞砒酸及び磷なども用ふ。併し此等の薬品は時々中止すべき必要のあるもので、其の中止時には、他薬と交換し、以て其の斟酌の方法が宜しければ數年間應用することが出来る。其

の他疼痛には撒里失爾酸曹達安知必林或はアセトアニリドフエナセチン、又重症には莫爾比涅も必要あることがある。便秘には緩下劑として答麻林度や大黃末の如きを與へ、膀胱の障害には麥角の効能あることをシャルコー氏は言つてゐる。次に電氣療法も亦一時的の良効あるものである。次に懸吊療法として患者の願の下に吊帶を施し、患者をして之に沿ひ、暫時身を懸垂せしめるのであつて、之は身體の重量に依り、脊髓及び神經根が伸るといふ目的ではあれど左程の効無きのみならず、時々危険を招くことがある。

破傷風

〔原因〕ニコラエル氏のテタヌスバチルレンであつて、創口より此の桿菌が入るのだ、故に外傷、拔齒、皮下注射、外科手術、分娩などの後に發り易く、又初生兒に在つては臍帶の創から來ることもある。彼の跳足で田畑を耕してゐる農夫に本病の多きは此の理である。

〔病狀〕欠伸をなし、戰慄を發し、食物を嚼むことや嘔み下すことが困難になり、胃窩の處に何とも言へぬ苦しみを感じ、顔が痙攣して前額の皺が廣く口を開き、口

は甚しく突出し、眼は動かす、瞳孔は縮み、斜視になり、食物を嚼み碎く時に用ふる所の筋肉即ち咀嚼筋が強直つて硬くなり、上下の齒は緊しく合せ、終には全く口を開くことが出來ぬやうになる。又全身の筋肉も従つて強直る、軀幹は前方に曲り、筋肉甚だ痛み、脈は細くなり、體温は甚だ高まり、四十二度或は四十四度にも達することがある。呼吸は非常に困難になり、續いて喘息を發し、皮膚は冷たくなり、粘い汗を流し、遂には窒息して死ぬ。これを見てゐる家人の心は果して如何實に病者其の人よりも苦しいものである。

〔療法〕温浴をなさしめ、暗い静かなる室に移し、石鹼の灌腸をなし、脊に氷嚢を貼て、一刻も早く破傷風血精を注射するが宜い、此の注射を早く爲せば大抵は治るけれど、時が遅れると殆んど不治に歸するものだ。従來は撒里矢爾酸或は抱水クロラル或は臭剝などを用ひたるものであるが、これは左程の効力は無いものである。

依ト昆哇兒

〔原因〕慢性消化器の病、生殖器の病、春情の發動する頃、或は遺傳及び不明の原因

なごである。

〔病狀〕大いに怯懦になり、想像力が進み、身體の異狀を心配し、少し咳嗽が出れば肺病であるやうに思ひ、僅かの頭痛がしても腦卒中にならぬかを恐るゝものである。これより續いて胃部が重苦しいとか、噎氣が出たりして消化が悪くなり、便秘を發し、次第に瘦せ衰ふるとは奇妙な病と謂はねばならぬ。醫學書生が此の病に罹ることの多いのは一つの争はれぬ事實である。

〔療法〕本病は其の療治及び攝生の仕方が善ければ随分治るものではあるが、さうで無いと精神病者に變じて遂に不治の症となることがある、大いに注意せねばならぬ。先づ第一に新鮮なる空氣中に住はしめ、勉めて散歩を命じ、而して其の意志を色々に轉せしめて樂ます可い、今日は某の山に遊び、明日は何處其處の川に棹し、或は手品或は玉突といふやうに換ふるが可い。又仕事療法として細工物園藝などを爲さしむることが必要だ。又勿論消化し易い動物性の滋養食物を與へ、茶珈琲及び酒類などの興奮性の飲料を嚴禁し、便通の無いときは、サグラダカスカテ錠を朝夕二個乃至四個宛を服用せしめ、水浴法として冷水浴及

び臨臥の温浴は偉大なる効が有る。兎に角運動せしめるといふ一事は本病の最肝要の療法である。

此の病氣に就き面白い余の經驗談がある。此の經驗談は世の醫士たる者及び患者一般に大いに讀んでおかねばならぬことである。

頃は明治三十一年六月十九日。日まで忘れぬ、この日に知己の紹介で清水幸助(年齢二十一、田舎)といふ人を診察した、之を望診するに體格強壯即ち筋肉の發達といひ、色艶の善いこと、言ひ、何處に病氣があるだらうかと疑はるゝやうな姿例に依つて其の既往症を尋ねれば、

『去年の五月何と無く苦しかつたから、村の醫者某に診て貰つた所が、心臓瓣膜病であるとのこと。それから二日程経て治つたやうにあつたが、折しも友人に話したければ、それは大變だ、心臓瓣膜病なら俄かには死なぬけれど、一生治らぬ、早く治療し玉へといふ、さう言はれて見ると心配で堪りませぬ。彼是してゐる中に胃は疼痛む、頭痛はする、脊や腰は絞めらるゝやうな感じがするから、又或る醫士に診察を乞ひたれば、心臓病では無い、脊髄勞である、飲酒房事

は堅く慎しめ云々。脊髄勞は固より重い病であることは知つてゐたから、更に心配を増した。依つて更に他の醫士に診て貰へば腦病であるといふ。何れにしても重い病氣、又更に其の上の醫士と換へたが、皆々腦病と定つた。これより先月まで治療を受けましたが、一向に宜しく無いから上京して、日本第一等の醫士は誰であらうと尋ねれば、〇〇病院長醫學博士甘井退様であるとの答。早速これに従つて往つたら豈圖らんや其の病名大いに異なり、膀胱麻痺病。成程大醫は大醫だけあつて、凡々なる輩とは大いに診立が違ふわいと感じまして、今日まで三十五日間は一心に服藥してゐますが、始めの中は少し効があつたれど、郷里の女房が訪ねて來たる以來は又々悪くなりなりました云々」

これを聞き終つたる時には疑ひの雲がムラ／＼と胸に滿ちた、心臓瓣膜病……二日で治り……脊髄勞……腦病……膀胱麻痺……妻が訪ねて來たら重くなつた……實に變な病ぢやなあ……

「して又今は何の様に苦しいです」

「何の様に」と形容はし難いですが、何と無く頭が重くて食慾は進まず、大便の通じは四五日に漸く一度それゆゑか腹が張つて、小便は一晚に六七度も洩ねばならぬ、兎に角先年よりは腕力大いに減りました、それは情おき甘井先生のお蔭で、少し宜かつたのを何を隠しませう、久しぶりで妻と交りをしていたしたものですから又々重つたのでせう、下略」

これより尙色々問答してから、觸診、聽診、打診など残りなく丁寧に終つたが、何等の異常も無い。脊髄勞でも無れば膀胱麻痺でも斷然無い。良あつてこれは間違も無くヒポコンデル病である、と大悟徹底した、大悟徹底した譯は斯うなのだ、これが讀者の注意すべきことである。

去年五月何と無く苦しかつたといふのは、感冒でもあつたらう。所が數井先生心臓の音を聴き間違つて、重い病名を附けたが、當人其の病名の何たるを知らぬから、一向平氣でしたし、殊に感冒位だから治つて了つたのを、友人の注意で心配し始めたが、病の本、其の心配した爲に胃痛頭痛従つて脊腰も痛んだのである。然るに又早計先生僅かの點が似てゐるために脊髄勞などいふ重い

診断をした重い診断をして見ると飲酒房事を禁ずるは當然である、禁せられた者は心配を増すはこれ亦當然の理。乃で心配に心配を重ねたることなれば、多少腦病の徴候を呈はしたかも知れぬ、イヤ呈はしたに違ひ無い、故に便秘もあれば不眠症も起る、これ亦自然の道理。然るに〇〇〇病院は朝の九時から正午まで僅か三時間に少くも百人の病者を診察することなれば、一分と四十八秒時間に大切なる人間様を診る割合になる、さすれば如何なる大醫も宜い診断の出来る筈は無い、無いから一晩に六七度も小便するといふこと丈で膀胱麻痺といふ名を附けたので、眠られぬ爲に屢々小便に往くのであるといふ考の起る暇の無いのは無理の無いことである。されど大醫と信じてゐる矢先へ今までに異なつた病名であるから、尙更有難い、有難いから少しの効が有つたのである、然る所へ最愛の妻が來た、妙齡の男女なれば不知一夜の夢を見た、見たは見たが前に房事を禁せられたことが先入師となつてゐるから、愈々氣になる、固より氣に罹つたのが病の本なれば又候重くなつたのだ。と余は斯う診察したけれどもこれを正直に答へては却つて病者の爲にならぬと

考へたから、

「矢張膀胱麻痺です、私はこの病を治すが、何よりの得意、必ず向ふ半年間に夢の醒めたやうにして上ませう。」

と告げおいて、前述の攝生法を守らしめ、診る度毎に少し宛宜くなつたと方便術を施したければ、當人も大いに信用してくれる爲、其の上夜安眠出来る方法に導いたものゆゑ、小便に往く數は次第に減り、最早健康無事にならうといふ嬉しい所へ霹靂一聲、徵兵の検査、検査は固より覺悟の年なれど、病氣故に必ず不合格と自分免許をしてゐるのに、甲の合格。

「私は永らく病氣で惱んでゐた弱蟲で御座ります、何うぞ……」

「黙れ、汝が病氣なら世界に健康者は居らぬぞ、精神を勵まして御國の爲に忠勇の武士となれい。」

大喝一聲の下に何の返事も出来ぬが、大病後と思つてゐる身なれば下手軍醫の誤診と誤解し、入營して後は又々弱い身に此の様な酷い務めをなさしむるとはと心配し始めたが病を重くし、遂に悲觀煩悶の末、可惜健康體を轟然たる

汽車に敷かせて自害した。嗚呼愚かな嗚呼憐れむ可きかな。けれどもこれを殺したる者は汽車でも無く、自害でも無く、唯最初なる籙井先生である。

醫士たる身は小心翼々として赤誠を盡さねばならぬ。田舎の籙井は尙恕す可しとして帝都の中央に籠々たる病院を立て、醫學博士の學位まで有ちながら、ヒポコンデルの診断がつかぬとは抑々何事ぞや、これ診断がつかぬにはあらねど、利を貪らんがために、一分時間程に大切なる玉の緒を取り扱ふからである。縦ひ診察料を高く取つても、多くの人を疎漏に診ぬのが正當なる醫士と謂はねばならぬ。故に患者も亦此等の點には能く注意をして醫士を撰び玉へ。

神經痛

神經痛

〔種類〕唯單に神經痛と言つても、其の中には色々の種類がある。即ち三叉神經痛、肋間神經痛、坐骨神經痛及び生殖器神經痛等であるが、之を一々區別して説くときは餘りに専門的になるから、茲には概括して説くことにする。

〔原因〕其の主なるものを列記すれば遺傳體質の不良、感冒、外傷、傳染病後、貧血、精神過勞、生殖器病、梅毒、肺病及び動脈瘤等であつて、其の中にも三叉神經痛は頭骨の病、中耳の病に多く發し、肋間神經痛は、肋骨病、脊椎病の續發症となるなど、其の部分に依つて原因も多少違ふ。年齢は中年より老年にかけて起るが、小兒には極めて少い。性から言ふと男子よりも婦人に多い、これは妊娠産褥、月經閉止等の生殖器に關する故障が男子よりも多いからであらう。去りながら坐骨神經痛、膊神經痛などは婦人よりも寧ろ男子に發し易い。其の他不明の原因もあるが、兎に角眞の原因及び病理に至つては尙これを詳に説明の出來ぬ事柄が多くある。

〔病狀〕一言に盡せば神經の痛むのであつて、其の痛みは俄然として起ることも有れば、又或る前徵例へば寒きを覺えるとか、奇妙な痒さがあるとかして、其の擧句に起ることもある。中には左程に痛まぬのもあるけれど、多くは猛烈で灼くが如く、切るが如く、或は裂くが如くで、夫等の痛みは一時緩むことがあつたり、或は引き續いて惱むものもある。斯くて寒冷な空氣や精神感動及び患部の運動は

其の痛みを増さしめるものだ。次に知覚機の障害があつて、神経痛の部分の皮膚は劇しい知覚脱失、或は弱い知覚脱失が有り、而して其の痛みが歇んでゐる時や或は痛みが歇んだ直後に著しいものだ。されど其の下層に在る部分の知覚は過敏になつて軽く壓しても或る一定點に非常な痛みを覚える。この疼痛點は診斷上に於て大切なるものである。次に頭痛部に麻痺の起ることもある。次に疼痛部に顔面痛即ち三叉神経痛に於ては皮膚及び結膜が著しく蒼白くなるか、或は紅く、腫るゝことが稀でない。次に涙や汗の出ることもある。又重症の神経痛が幾久しく續くと其の神経の分布してゐる部分の組織に變化を來し、毛髪が白くなつたり、脱けたりし、或は皮膚が厚くなつたり、反對に消削たりし、或は皮膚が變色して色素を沈着してゐるなどの妙な症狀を來すことがある。次に一般の榮養は左程影響を蒙らぬこともあれど、大抵の者は疼痛の爲に睡眠を妨げられ、及び食欲の減する所からして自然に色が蒼白くなり、身體は瘦せ衰へて來る。次に精神状態も亦影響を受け、鬱憂の狀を呈し、中には自殺を企てたる者さへもある。本病の経過は甚しい差等の有るもので、其の痛む時も一日に數回なるも

あるし、或は數日で止むものもあるし、或は時を定めて正規に發するものあれば、或は不正規に發するものもある。而して一生涯治らぬもあれば直ちに治るものもあり、或は數年惱んで遂に全治する症など有つて、其の豫後の診斷は何とも見極めが出來ぬ。

〔療法〕第一に原因療法を施さねばならぬ。例へば腫瘍や梅毒又は麻刺利亞等の爲に來たのであつたら、其の腫瘍を摘出するか、或は水銀療法をすることか、或は規尼涅を服用することかの如し。殊に規尼涅は麻刺利亞が原因で無くても効能の有ることがある。規尼涅は正規の時間を隔て、一回に一〇乃至三〇の大量を用ふることがある。規尼涅を用ひても効能の無い場合には亞砒酸又は法列兒水を試みねばならぬ。次に一般に適當なる食物即ち魚鳥獸の肉類及び嫩弱なる野菜類を與へて榮養を佳良ならしめ、温暖なる地方に轉居し、海水浴冷水浴及び温泉浴は至極宜い。但し顔面の神経痛には温泉浴の奏効を認めぬ。次に芥子泥を塗つたり、發胞膏を貼つたりする療法もあるが、時には幾分の効あるやうなれど、時には全く無効なることもある。次に電氣療法も亦是非とも試み

ねばならぬ。内服薬としては前述の外に撒里矢爾酸曹達安知必林アセトアニ
 リド、フエナセチン、アスピリン等を轉々交換して用ひ、良結果を得たることも
 ある。又プロームカリユムの大量即ち一日量五〇乃至一〇〇も用ひて奏効を
 見ることがある。又發作間にはモルヒネの皮下注射も止むを得ぬものだ。併
 し長久しく續く患者に其の發する度毎にモルヒネの注射をしてゐると慢性の
 モルヒネ中毒を來すことあれば、注意せねばならぬ。次に魔醉劑殊に抱水クロ
 ラル、スルフオナル等を内服せしめる醫士もあるが、姑息的療法たるを免れぬ
 と余は思ふ。右の如くに色々手を盡しても治らぬ重症に在つては外科治療即
 ち神経を切斷することが肝要だ。斯くて一旦治療したる者は體操登山散步等
 の運動を勵行し、滋養の食物を取り、精神の過勞を避け、身體を強壯ならしめ、其の
 病源に對する抵抗力を養成することが肝要だ。尙右に掲げたる藥物の處方を
 示せば、

- ▲亞砒酸 〇〇〇一五 還元鐵 〇二 甘草末 適宜
- 右三丸を爲し、一日三回食後一丸宛 増量し亞砒酸は漸次

▲プロームカリユム 六〇〇 アマラ丁幾 二〇〇 單舎 八〇〇
 水 一〇〇〇

右一日三回乃至六回に分服

▲プロームカリユム 五〇〇 アセトニアニリド 一・二 乳糖 適宜

右分三包一日三回食後一包宛

▲撒里矢爾酸曹達 四〇 薄荷水 三〇〇 單舎 八〇 水 七〇〇

右一日三回分服

▲フエナセチン 二・〇 乳糖 適宜

右分三包一日三回一包宛

▲抱水クロラル 〇五乃至一〇 單舎 五〇 アラビヤゴム漿 二五〇

右發作時に頓服

偏頭痛

〔原因〕先天的の素質が主なるもので男子にも無いでは無いが、殊に春期發動期
 の婦人に多い。誘因は貧血、月經異常、萎黃病、房事過度、痛風、痲質、斯心身の過勞

精神の興奮便秘其の他の障害及び飲酒過度等で有つて、或る人は本症の發作は身體の自發中毒に由る、詳しく言へば或る方法に依て時々體內に産出する毒物の作用に外ならぬ云々。されど尙確然たる證明が無く、又其の毒物は果して神經系統の何れの部位に其の作用を逞うするかも素より明かでない。

〔病狀〕一言に盡せば通常頭部の偏側を犯す所の一種の頭痛で有つて著しく全身に違和を覺え、食欲缺乏惡心又は嘔吐を來すものだ。其の疼痛の時間及び間歇時は長短不定で、之を屢々反覆するものであるが、中には其の時間が極めて齊然たるものもある。又大抵の患者は其の偏頭痛が發らうといふ前に何と無く不快を覺え頭重く、或は眩暈し、或は耳鳴り、或は眼に火花を見、其の他惡寒や欠伸をするなどの前兆がある。疼痛は通常頭部の左半側で前額部眼部時としては顳顬部を占めてゐるが、稀には左右交番に痛む人もある。其の痛さは破裂するが如く、劇しいものであるが、中には左程で無いものもある。次に食思が少くなつて其上嘔吐を發する場合には大抵強い酸味を帯び胃液の分泌が甚だ多くなる。斯くて病が續けば續く程甚しく疲れて眼には燥爛としたる光線を見、臭氣の如き

外來の刺戟に對しては頗る鋭敏で、稀には半視症を來す人さへもある。又稀には手や指の知覺異常を來し、耳は鳴り、言語は障害を伴ふものもある。又痙攣性偏頭痛といふのは患側の前頭や耳朶が蒼白くなり、瞳孔は散大し、唾液の分泌が盛んになるけれど、痙攣性偏頭痛といふのは患側の顔面が紅くなつて顳顬動脈が高く搏動し、瞳孔が小さくなる。併しながらこの分類は學理上の議論で有つて實際には此の両性を混するものである。大抵の患者は其の間歇時は爽快で敢て疼痛を感せぬけれど、屢々發つたり、或は長久しく續くと重症者と同じく其の間歇時にも多少の痛みが残つて惡心嘔吐などの止まぬことがある。全體本病は極めて緩慢なるもので、中には僅かな月日で治るものもあれど、多くは數年乃至は數十年の久しきに亘るものだ。されど醫士たる者は本患者に對しては容易に治らぬなど、斷言せず、其處は臨機應變の方便説を述べて患者を慰藉することが肝要だ。

〔療法〕數多の本患者は色々の治療を受けたる後其の治り難い所より自暴自棄になつて、遂に一切の治療を斥けるやうになるものであるから、前述の如く醫士

たる者は患者をして失望せしめぬ様に尙一層攝生を守らしめ、尙一層治療を受けしめねばならぬ。其の發作時には充分に身體を安靜にし、温脚浴を取らしめ、頭部に依的兒を滴すと其の發作を緩げるものである。又冷頭法も効がある。モルヒネや其の他の麻酔劑を皮下注射したり、或は服んだりすることは甚だ効無きのみならず、却て害を招くことがある。鎮痛劑として前病に述べたるフェナセチン、撒里矢爾酸曹達アセトアニリド及び安知必林の内服は効がある。殊に余の實驗に依ればフェナセチンが最も偉効を奏するやうだ。其の他珈琲、涅ブローム、カリウム、亞砒酸法、列兒水、印度大麻、越幾斯なども試むべき場合がある。場合は如何、曰く前記の諸藥を用ひて餘り連服出來ぬやうになつた時などをいふ。又強壯劑として鐵劑を與ふることもある。又痙攣性の者には亞硝酸亞密兒三滴乃至五滴を布片に滴して吸入せしめ、麻痺性の者にはエルゴチンの皮下注射、即ち溶製エルゴチン一〇蒸餾水四〇の割合の物を半筒乃至一筒を注射するが果して効能あるものか疑はしい。次に電氣療法及び按摩療法も亦試むべきものだ。されど疼痛部及び胃部を按摩せよとの説は果して如何、余は却て害有り

はせぬかと疑ふ。次に攝生法兼治療法として海水浴、冷水浴は甚だ良結果がある。殊に下半身を温湯に浴しつゝ、上半身の冷水灌注は偉効あることを余の狭い經驗に依て確めた。飲食物は易化滋養の物を撰び、興奮性の飲料例へば茶や酒を避けねばならぬ。終りに臨んで余の經驗談を紹介せんに、或る本患者即ち年齢三十九歳の文學者が左程劇症では無いが、三四年間惱まされ帝國醫科大學を始め其の他多くの醫士に治療を受けたれど、更に効果が無い、然るに偶余に遇ひ此の事を語る。乃で余は余の理想を告げて曰く、「當分の中は、投筆耕田といふ氣になり、間がな隙がな運動をこれ事とし、運動したる後に其の汗を流す目的を以て前述の下半身温湯、上半身冷水灌注を一日に數回行ひ玉へ云々」と之より某は鐵啞鈴體操、挽弓、園藝、薪割、風呂の水汲などを殆んど専門の如くになし、其の間々に水浴法を行ひ、後には柔道を稽古したが、一年を経る中に夢の覺めたるが如く全治し、病前よりも健康になつたのである。讀者は大いに之を參考せられたいものだ。因に言つておくが、兎角我が國人は唯藥物にのみ頼つて他の療法を輕んずる傾きがある、けれど本病の如きは藥よりも寧ろ此等の攝生兼

治療法を實行せねばならぬものである。

癲癇

〔原因〕眞の原因は未だ講究せられぬけれど、遺傳素質が至大の關係あるもので癲癇者の大部分は癲癇或は其の他の遺傳素質が有り、嘗て血族中より一回或は數回神經病者を出したる人に發するものだ。換言すれば、父母や祖父父母などに眞正の癲癇に犯された者があれば尙更であるし、若し然うで無くても一般の神經病例へば精神病歇私的里神經衰弱などに罹つた者が近親に在ると本病に罹り易いものだ。其の他妙なのは精神的特性ある者及び一方に偏つたる非凡の天才ある人例へば詩とか畫とか、古今に秀でたる英才有れども、世上の事は小兒同様の資格無き人の子孫に本病者を出すことの少く無い一事である。次に兩親中に大酒家があり、其の醗酏時に妊娠したる生兒も後に本病に罹る實例が多くあるこの事だ。次に飲酒及び房事過度は本病の大原因になるといふ人もあれど、これは甚だ不確實だ何となれば飲酒の癖や房事過度の癖は神經質の遺傳を受けたる人に多いから、それが爲に本病に罹り易いので、飲酒や房事が直接

に本病を促すので無いかも知れぬからだ。次に梅毒が誘因になるとの説もあるが之も疑はしい。次に心身の過勞殊に或る感情を頻回刺しく發することが誘因となるは確かなやうだ。次に榮養不良、貧血及び多血も多少の誘因となる。次に急性熱性病、胃病、頭部の外傷は少なからず本病を誘ふ。又耳内の異物及び炎症、腸の寄生蟲及び婦人生殖器病などは反射的にこれを促すものだ。

〔病狀〕完全なる本病の病狀は之を數期に分けて説くが便利である。乃で其の第一期即ち前驅期は一上肢又は一下肢又は心臟部或は胃部より頭部の方向に微風の昇るやうな一種特異の知覺異常を訴へ、而して不快なる臭氣を感じ、紅色などが見え、耳にも笛か蜂か或は何の聲とも形容出來ぬ聲が聞え、身は寒くなつたり反對に熱くなつたりするを感じ、其の手は非常に蒼白く變じ、或は紅く變り、劇しい心悸亢進が有り、續いて眩暈がし、精神は恍惚となる。此の前兆は人に依て更に無いのも有れど、有るとすれば甚だ僅かの瞬間であるか、或は幾分長く續いて經驗ある患者になると其の前兆なることを知り、前以て臨床に入るなどの豫防策を講ずるが、至極重いものになると心窩が甚苦しく、又胃病を來したりす

二八〇

る。此の間を第一期と稱するのである。但し此の一期が無くて直ちに第二期が第一期となることがある。第二期は痙攣期であつて、俄かに地上に倒れ、其の際身體は大抵前方に倒る意識が全く消え一切の感覺歇むものだ。けれども倒れて歇むのか歇むから倒れるのかは判然せぬが、兎に角倒れる際に甚しく外傷を蒙ることがある。又患者に依ては倒れる際に高聲を發して叫ぶのがあるけれども、こは人事不省になる前に叫ぶので無くて、人事不省になつたる瞬間に叫ぶのである。斯くて暫時の間は、強直性の筋收縮が起るもので、即ち頭部は通常後方に曲る、上下の齒を緊しく合せ、軀幹を弓狀に反り、四肢を伸し、指は屈げて内に折り、拇指を覆ふ。呼吸は大いに靜かになり、顔色は初め蒼白いが直ちに蒼のみになる。之より第三期即ち間代性痙攣期に入ると顔の筋が劇しく痙攣し、眼球を旋らし或は両眼共に一方に偏り、舌は痙攣狀に伸びたり縮んだりし、上下肢及び軀幹の筋肉は斷間無く痙攣し、瞳孔は甚だ濶くなつて而も反應力を失ひ、脈は幾分か速く、體温は平温又は少しく昇り、其の間に糞尿を洩したり又男子は射精することもある。又此の間に舌を咬み切ることがある。之より一度長大息をし

て第四期即ち昏睡期に入ると人事不省は依然としてあるが、呼吸は安靜になり、顔面は殆んど普通の色に變り、前後も知らず昏睡して次第に普通の睡眠状態に入る。此の睡眠時間は患者に依り、數時間に渉るものあれば、又極めて短いものもある。さりながら此の發作の餘波は數日に影響し、頭痛に悩み、或は何と無く倦み、疲れ、精神は變調して物事に激し易く、又所々の筋肉に劇痛を留むることもある。去りながら大抵の本患者は第四期が終ると共に殆んど健康者と同じ状態に入るのである。

以上は完全なる摸範的の癩癇を述べたのであるが、輕症なる不全性の癩癇は前述の痙攣發作の外に小癩癇といふ輕度の發作が現はれることがある。それは輕度の眩暈や昏睡或は暫時の失神を呈すのみで、之を形容して言へば談話時又は碁でも圍んでる時俄かに中止し、暫くの間茫然としてゐたる後、又其の事を續けて行ふが如し。又或る症に至つては、其の間も中止せず器械的に行つてゐるものもある。例へば途上で發つたとすれば、矢張前進して其の揚句に家があるとき、其の家に入つたり、或は河に落ちたりするやうなものだ。又或る症に至つては失

神して倒れるけれど、顔面の色も左程に變らず、僅かに上肢を痙攣させる位で間もなく意識が明瞭になるものもある。又癲癇類似症といふのがある。これは多く精神的の癲癇で、眞正の癲癇後直ちに現はれ、或は特發し、兎に角精神が全く亂れ、横鼻禪も爲すに裸體で跳ね廻つたり、或は河に入つたり、或は放火甚しきは盜賊をなすことがある。又中には非常に鬱憂状態に入り、或は恐怖的の觀念を懷き、幻覺錯覺が違つた物に見えたり、又有る物がある。斯くて精神が復舊したる場合には、發作時の事を更に記憶せぬこともあれば、又漠然たる記憶の残つてゐることもある。之は精神病と甚だ似てゐるけれど、又異つたる點もある、宜しく精神病学に就いて其の區別を知る可しだ。

右の發作は十年乃至二十年間に三回か四回に過ぎぬのもあれば、又毎日發るやうなものもあつて、外部の影響例へば暴飲精神興奮及び房事過度、或は身體過勞等の如きことがあると屢々發り易い。それで攝生療養が宜しければ、全治せぬにも限らぬけれど、其の重いになると、發作毎に精神が痴鈍になり、記憶力は減じ、身體も瘦せ衰へて運動が不完全になるもので、容易には死なぬけれど、兎に角健康

者程壽命を保たれぬは言ふまでも無い。が併し反射的に來る癲癇は大抵全治するものである。又中には一、二回乃至三、四回も時々發作して、其の揚句に長久しく中止し、他日又發する例も有れば、發作が久しく止んだからとて果して全治してゐるのか、了らぬものである。話變つて癲癇を粧ひ、彼の放火、或は竊盜の如きを敢てし、或は故に倒れて見せたり、人が咎めると何も覺が有りませぬなど、胡魔化する者もあるさうだが、之は舌の工合、筋肉の状態、其の他他病との鑑別法に照せば看破ることの出来るものである。

〔療法〕最も大切な事は一般の攝生法である。先づ第一に心神の過勞を禁じ、悠々自適以て一生を送るの策を講せねばならぬ、縦ひ業務を取るにしても他人の如く孜々勉めず、極めて秩序的に可成其の時間を少くし、而も刺戟の多い外交的の事は避けるが宜い。運動も徜徉散步、或は挽弓などの事に止めておくが可い。次に暴飲過食は大いに悪い、殊に酒の如きは可成禁じ、茶や珈琲も少量に與へ、又喫烟も出來得可くは止め、食物は淡泊とした物を撰び、動物性の食物は寧ろ廢した方が得策だ。或る西洋の醫師は本病者に植物性食物と少量の牛乳と

より與へぬことにすると大いに病勢を軽くすることが出来ると言つてゐる。次に住地は夏は山地に静養せしめ冬は温暖なる海濱に居らしめ精神をして刺戟少く愉快に暮さしめねばならぬ。次に房事の過度殊に手淫は非常に有害なることを戒めておくが肝要だ。攝生法は先づ斯んなものだが本病其物の療法は先づ原因を除かねばならぬ。例へば耳鼻の病ならば之を療治し腸に寄生蟲が有つたら之を驅り盡すやうな譯だ。本病の特効劑とも稱す可きは、ブロームカリウムであつて本病者には是非共服用せしめねばならぬ。其の用量は最初は一日量四〇位で之より五〇・一六〇・一七〇・一八〇・一九〇・一〇〇の大量に至り而も大量の水劑となす方が連服しても左程に胃を傷めぬものだ。尙處方を示せば左の如し。

- ▲ブロームカリウム 四〇 重炭酸ナトリウム 一五 單舎 八〇
- 水 一二〇〇
- 右一日三回分服
- ▲ブロームカリウム 一〇〇 重炭酸ナトリウム 三〇

單舎 一五〇 水 一二〇〇

右一日三回分服

去りながら、ブロームカリウムの服用は時々休薬して數年間續けるやうにせねばならぬ。然うで無いと、其の中毒の爲に口中が臭くなつたり筋肉の疲勞を招いたり、或は心臟衰弱消化障礙生殖器不能記憶力減弱及び精神鬱閉を感ずるなどの禍を醸すものだ。故に其の休薬時中は纈草根を粉末とするか、或は浸劑として代用するが宜い。其處方を示せば、

- ▲纈草根浸 (八〇) 一五〇〇 林檎鐵丁幾 三〇 單舎 八〇
- 右一日三回食後分服

右の外に別拉敦那亞篤魯比涅酸化亞鉛など用ふるけれど、余は効の無きものと思ふ。次に電氣療法を藥物と併用することも試みた方が宜い。其の方法は頭部及び交感神経に平流電氣を通ずるのである。次に冷水療法も上手に行へば電氣療法よりも遙に効がある。朝夕或は臨臥に如露仕掛の雨浴を行ひ、身體を摩擦するは甚大の良果がある。以上は發作したる後の療法であるが、倦怠發作せ

んとする時の豫防法は如何といふに之は放棄つて置いても差支無いものと思ふ。されど患者に依ては爾來の經驗を以て自分で之を豫防する者がある。例へば肢體を緊しく縛るとか、或は強く摩擦するなどである。又醫家に依ては大量の食鹽を嚙み下すと其の發作を止めることが出来ると言つてゐる。次に愈々發作したる初期には亞硝酸亞密兒を嗅しめれば有益なることが往々有るものだ。重症には麻酔藥即ち噶囉仿謨か依的兒を嗅せる方が宜い。序に言つておくが本病者と結婚したり、本病者の乳汁を嬰兒に哺ますことの無き様國家の爲め切に希ふ所である。

顔面神経麻痺

〔原因〕元來顔面神経の在る場所は淺く、従つて外來の損害を蒙り易いから、神経麻痺中で最も多く發し易い病である。性から云ふと、婦人よりも壯年の男子に多く發し、第一に感冒が最も本病を促すものだ例を以て言へば、窓を開いて眠つたり、汽車の進行中に長い時間窓を開け放しておくやうな場合に罹り易い。次に中耳の病及び岩様骨の骨瘍が其の影響を顔面神経幹に及ぼすよりも起る。次

に耳下腺或は其の近傍に腫瘍ある時。次に頭蓋底或は腦底の病氣例へば梅毒性の新生物又は炎症がある場合。次に延髓及び腦髓に疾病あると顔面神経も亦其餘波を蒙つて、遂に本病になることがある。其の他結核癩病急性傳染病及び鉛中毒等も往々本病を誘ふものである。

〔病狀〕麻痺したる顔面の半部は弛んで、患側の前額に在る皺は自ら消え失せ、眼は大に開け、涙が常にタラ／＼流れ、鼻唇溝が消滅して痕が無いやうになり、口角は下に垂れて唾は流れ溢る。患者若し前額を縮め、或は鼻を歪め、或は笑はんとし、或は話さんとし、或は嘯かんとし、或は頬を脹かさうとする場合などには前述の症狀が明瞭に表はるゝものである。而して眼は十分に閉すことが出来ぬ所から塵埃が自然に入り、往々結膜炎を發することがある。又、口唇の運動が不完全であるため言語を自由に話すことが出来ぬ。又、頬の運動も自由でないから食物を咀嚼することも甚だ不自由である。次に患側の舌の前方が三分、二程味覺を妨げられるけれど、多くは輕微であつて、患者に依ては味覺が妨げられてゐるか否かの感覺が了らぬものである。次に唾の分泌が減り、爲に麻痺側の口中

が乾燥するを覺ゆるのも稀に見る例だ。次に聴覺にも障礙を受け、甚だ過敏になることも往々有る。先づ病狀も雜と右の次第であるが、尙之を病の經過に依て區別すれば三種となる。(一)輕症顔面神經麻痺は顔面筋を犯すのみで、味覺などの障害無く、顔面神經及び麻痺筋に於ける電氣興奮性も常の如く、大抵二三週間で治るものをいふ。(二)中等症顔面神經麻痺は多少の麻痺は勿論有るけれど、完全に麻痺せぬ、重言すれば、神經の興奮性は稍、減少するけれど、決して消滅する程にはならぬ。而して四五週間で大抵治癒するものである。(三)重症顔面神經麻痺は完全に麻痺し、其の治癒は少くも三ヶ月多くは五六ヶ月甚しきは數年數十年或は生涯治らぬもある。

〔療法〕原因となつて病を退治するが最も急務である。例へば耳下腺に腫瘍あらば之を摘出し、梅毒ならば其の梅毒を療治するが如し。次に僕麻質斯性の顔面神經麻痺には撒里矢兒酸曹達若くは安知必林が宜い。次に電氣療法も多少の効が有る。次に按摩も幾分の治癒を促すやうだ。次にストロキニーネの皮下注射〇・一を蒸餾水一〇〇に溶したるものを一週に三四回、四分、一箇乃至二分、一箇を行ふこともある。右の外局部に發胞膏を貼つたり、樟腦精を塗擦したり、或は水蛭を貼けたりする。内服薬は要するに何等の効が無いと言つても差支はあるまい。

常習頭痛

常習頭痛

〔原因〕急性熱性傳染病や著しい全身貧血、腦病、頭蓋骨病等には勿論頭痛を伴ふけれど、之を以て本病と看做してはならぬ。本病の原因は血行障害及び幽微なる榮養障害が原因をなすもの、如く、即ち腦髓や及び其の皮膜に充血、或は貧血するより起る。彼の學生官吏及び受験前の學生などが過度に精神を使役すると本病に罹り易い。而して往々遺傳すること稀で無い。

〔病狀〕甚だ慢性のもので數月乃至數年の間持續し、甚しきは終生之を免れぬこともある。其の頭痛の所在は時として前額或は顔面時としては後頭時としては頭部全體或は又其の他の部分に局限することも有る。其の痛さは破裂するが如く、或は鑽るが如き劇烈なものもあるけれど、大抵のは左程に強くなくて、單に頭部が重い位に過ぎぬものだ。併し其の劇烈なるのになると、僅かに毛髮に觸

れても尙患者は疼痛を感ずることが稀で無い。何れにしても患者の性情が變調して物事に激し易く加ふるに食欲少くなつて身體が何と無く懶く爲に業務を執ることが出来ぬ若し強ひて業務を執つても直ちに疲れて了ふ。又重症になると悪心があつたり嘔吐したり或は甚しく發汗するなどの症候が有つて身體瘦せ衰ふるものである。

〔療法〕本病に關係ある病例へば鼻耳の病胃病心臟病腎臟病梅毒痛風酒精中毒及び他の神經病等が有つたら第一に之を治療し次に一般の體質氣質に注意せねばならぬ。若し貧血家であつたら鐵劑を内服せしめ滋養の食物を取らしめ多血家であつたら淡泊なる食物を與へ運動を專一に爲さしめねばならぬ。冷水療法海水浴も仲々卓効がある。頭上を冷して温脚浴を爲すことは試む可きの療法だ。頭痛時の處置としては項部に芥子泥を塗つたり頭の周圍に薄荷を塗けたりすることは行つた方が宜い。内服薬としてアセトアニリド安知必林規尼涅プロムカリウム砒石等を用ふるが其の處方例は偏頭痛等の章で示した通りである。電氣療法も亦他の療法と併せて行ふ方が宜い。而して可成

は静閑なる山地に住居し悠々閑雅に日を送るが肝要である。

〔原因〕主に寫字を過す所から發るもので寫字生書記等に本病に罹る者が多い即ち、

我口に糊する道に困じ果て涙ながらも筆のたがやし

といふ境遇上已むを得ず無暗矢鱈に筆を放さぬより遂に此の病に罹るものである。其の他裁縫師・音樂者・卷莖を捲く業者などにも發することのあるものである。

〔病狀〕拇指・示指・中指の三指が痙攣して其の筋肉は強縮を發し字を寫し或は其の他の指仕事が出来ぬやうになるものである。

〔療法〕一切寫字を止め按摩法を行ひ或は電氣を通じ或は冷水を點滴し左の藥を塗くるが宜い。

▲的列並底油 一〇〇 阿列布油 二〇〇

右二品を混ぜて一日數回塗布

〔原因〕精神感動、横隔膜の損傷より起り、或は歇私的里胃腸病、腹膜病等の反射からも来る。

〔病状〕所謂吃逆であつて速に治るのが通例であるけれど、中には頑固にも數週乃至數月に渉るのがある。

〔療法〕大抵放棄つて置けば自然に治るが、若し速に治さうと思はゞ紙のコヨリを鼻孔に入れて、噴嚏をなさしめるが最も簡便である。又食鹽を比較的多く與ふるも宜い。若しこれでも治らぬ重症に至つては麻醉藥を與へねばならぬのがある。

精神病(きちがひ)

これには色々の種類はあるが、何れにしても依ト昆垚爾や神經衰弱症とは其の趣を異にするものである間違へてはならぬ。併し該二病が原因となつて精神病になることもある、さうなれば依ト昆垚爾、神經衰弱症と言はずして精神病と

名づくるのである。即ち本病は精神の異常であるから、之を病めば從來の人物とは大いに變り、其の目的と順序とを失つた行爲をなし、人の忠告や諫めを聽くもので無い、而して己れ自身は其の病氣になつてゐることを知らぬ、縦ひ知らせても怒るのみで、更に信せぬものである。

〔原因〕遺傳が最も多い、遺傳のある人は殆んど發らぬといふことは無い。今茲に精神病者百人ありとせば、六七十人までは遺傳である。其の他神經衰弱症と同じ原因もある。又教育の宜しく無い爲もある。又頭部の怪我、耳病、胃腸病、生殖器病、梅毒、酒精中毒などである。年齢は二十歳から四十歳までの間に多い。男女の比較は男より女の方に多くある。抑、本病は社會文明の進歩に従ひ、多く發する病で、歐洲の文明國では、三百五十人に一人の比例の國もあれば、六百人に一人の所もある。我國では五百人に一人の比例であるとの事。次に貧窮人は困苦の爲め、富貴な者は飲酒放蕩、房事過度などが原因となる。

〔病状〕本病には色々の種類があつて、其の種類に従ひ、病状も亦異なるけれど、其の鬱憂的の者と濶大的の者とを摘んで述べれば、甲は常に悲哀の念を抱き、鬱々

として交際を厭ひ、人を疑ひ自ら悲しみ時には他人が我を狙ひ撃しようとしてゐるとか、時には食物中に毒薬を混せてあるとかいふ様に信じ、それがため自殺を企てたり、或は他人を殺さうとしたりする。乙は意識磊落、或は傲慢になり、他人を輕蔑し、自分を尊み、架空遠大なる事業を企てたり、或は帝王將相の位置にあるかの如くに思ひ、或は博士大博士の智識ありとなし、或は大いに叫んで粗暴の舉動をなし、酒色を貪り、器物を破り、或は死石木葉の類を竝べて、數百萬圓の富を得たりとなすなど、實に憐む可きものである。此の外甲乙何れにも屬せぬのがあ

る、例へば色情にのみ狂ふ者、食物ばかり貪る者、或は潔癖に過ぎて寒中に冷浴したり、或は動物の慈愛のみを事として財産を抛ち、或は哲學狂、或は道義狂など一々擧ぐるに暇が無い。

醫者といふ資格を以て考ふれば高山彦九郎なども一つの道義狂である。足利尊氏の墓を數へて三百鞭ち、橋の上に手をついて草莽の臣高山彦九郎と叫ぶなどは豪傑君子の爲す舉動でも無れば、普通平凡者のする振舞でも無い。博士入澤氏は徳川五代將軍綱吉を以て精神病者であると斷言して曰く、「漫り

に讀書に耽り、或は男色を喜んで婦人を遠ざけ、或は濫りに施しを好み、或は非常に動物を憐んで殺生禁斷の令を出したる如きは確かに精神の變質者に相違無い。」と、さうして又曰く「これも父家光の遺傳であらう、何となれば家光も頗る男色を好み、婦人を遠ざけ春日局の苦心に依つて、稍く婦人を近づけた。これ色慾の顛倒といふもので、一種の精神病である。」と、参考にす可き議論である。

〔治不治〕唯精神だけ狂つてゐて、身體に異常の無いのは比較的治り易い。又遺傳者で無いのは良い。富んでゐる人は貧者よりも良い。酒客は治り難い。

〔療法〕何れの種類に拘らず、精神を安靜にするやうにし、便通を整へ、滋養食物を與ふることは大必要である。此の遺傳ある者には其の發らぬ以前に豫防法を實行すれば一生無事に済むことがある、即ち一事に熱心することを避けしめ、可成其の人の精神に逆はぬやうに矯正せねばならぬ。例へば動物を非常に憐む癖があるならば、その情を人間に移すやうにし、名譽心が強かつたら山水花木を愛して名利に吸々せぬ文人墨客の風を慕はしめ、厭世主義であるならば可成世

此の外に胃下
過多症・胃酸
垂多症・胃下
前症・胃下
胃病例へば
の胃病例へば
消化不良・胃
微不長・胃
胃擴張・胃
似胃擴張に類
れば省いたの
である

急性胃加
太兒

上の快樂を取らずやうに導き、世上の快樂を貪る風であるなら宗教道德を樂ま
しむるといふやうに側面から其の癖を直すのである。けれども上手に之を
行らぬと却つて一事に固執するの念を高むるものである。例へば岩頭に感慨を
記して瀧壺に身を投じたる某學生の如きは確かに一種の精神病であるが、若し
生前に之を知る者があつて、これが意識を他に轉せしめんと思ひ、遊廓へでも伴
れて行かうものならば、それこそ尙更人生を厭ふ心を強くするやうなものであ
る。故に、そこが手際であつて、彼の春日局的に其の方面に従ひながら、他の方面
に導くといふ工合にするのだ。此の法は何れの發狂者にも應用せねばならぬ。
内服薬としては、これと一定出來ぬ所謂對症療法を行ふより仕方が無い。例へ
ば便秘には下劑を投じ、不眠には麻酔劑を與ふるやうな道理である。右の外神
經諸病で述べたる仕事療法、運動療法、冷水療法なども臨機應變に施さねばなら
ぬ。殊に仕事療法は疎暴危険の舉動をなす狂者の外は非常に効力あるもので、
即ち園藝や大工的の事など行はせ意志を轉せしむるのであるが、何れの癡癡病
院でも皆此の療法を實行して何れも好成績がある。

消化器の病

胃病の部

素人は胃病とし言へば唯一つの様に思つて居らるゝけれど、醫士の方では大抵
左の十種に分けてゐる。即ち急性胃加太兒、慢性胃加太兒、消化不良、中毒性胃炎、
胃擴張、胃出血、胃瘻、胃潰瘍、胃癌及び神經性胃病である。して又その十種の中
も或は酸性の者、或は亞爾加里性の者、或は特發性・續發性など、色々に小區別があ
るから、甲の胃病者が重曹を飲んで効があつたからとて、乙の胃病者にも必ず利
く可しとは勿論言はれぬことが分るでせう。されば今更に胃病の各種を比較
的詳しく説くことしよう。

急性胃加太兒

〔原因〕これも特發性と續發性とある。特發性とは暴飲暴食例へば賭食賭飲な
どして、五合の飯を一度に平げたとか、或は一升の酒を一口に飲み干したとかい
ふ如きを云ふ。次に腐敗不良の食物即ち饒えたる飯や臭氣の附いた魚類など
を捨てるも勿體無いからとて食ふやうなものである。次に菌魚類の中毒之は

内科

往々生命を失ふやうなこともさへもある。「尊狩に買うて歸るや都人」といふやうに縦ひ都人ならざるも菌の智識少き輩は買つて歸る位が愛らしい所なるにこれは初輩彼れは松茸可矣可矣と食ふために遂に生兵法大疵の基となるのである。彼の河豚を敢て食ふ輩に至つては密夫姦婦を有つ者と同じく我身を亡すに定つてゐる。其の他唐辛芥子などの刺戟物を過し、或は過つて醫藥を服むなどからもある。續發性は感冒或は熱性諸病或は全身病或は口中咽喉頭膈などの病から影響したために胃酸と胃液の成分たる鹽酸の減少から起るをいふ。右の外劇しい精神の感動からも發することがある。これは胃液分泌の障害からであらう。可憐の愛兒を失ひ、潛々泣いてる折などに、さう食事をせぬのは悪いとて人から勸められ、無理に茶漬飯など流し込み、ために胃加太兒を惹き起したる例は幾らもある。

〔病狀〕何と無く身體四肢が力脱したやうに倦く、其の上頭痛がして眠らうとしても睡苦しく、えも言へぬ苦しさを感じてゐると、間も無く悪心を催し、續いてゲリゲリ嘔吐を發し、腹は痛む、胸は苦しく、暖氣は出る、咽は渴く、さあ斯うなれば彼様な悪い物食はねば宜かつた、以後は決して賭食賭飲は爲すまじきなど後悔すれども、最早詮も無く、愈々食思缺乏し、微熱は出る、舌の上には黄色を帯びたる苔が生え、口内は悪臭を放ち、常平生に好きであつた飲食物を無理に試みても何の味も無いのみならず、却つて嘔吐を促すやうになる。而して胃部は膨れ、或は下痢を催したり、或は反對に便秘することもある。斯くして輕きは一兩日重きは半月も悩む、されど右の規則通りにならぬのもあつて、初めより俄かにゴীগー嘔吐したる後は一二時間絶つと何の苦痛も無く全治するやうな輕症もあるし、又忽ちに迷土の人となるものもあるし、數週數月に涉つて遂に慢性になるものもある。又稀には其の體温が三十八九度にも上つて、寒熱往來の感覺を起すことがあつたり、又或は劇しい神經症狀例へば劇頭痛、眩暈の如きを合併することもある。何れにしても不養生は爲すまじきである。

〔療法〕素人の處置としては嘔吐には氷片を喫し、鹽酸リモナーヂを適宜服用するが宜い。若し夫れ嘔吐止まざるか、或は菌河豚などの毒物に至つては芥子湯などを飲んで速かにこれ等を皆吐き出して、了はねばならぬ。斯くしたる後に

は、

▲重炭酸曹達 三〇 水 二〇〇〇

右一日適宜分服 或は又

▲蓂酸攝留謨 〇三 乳糖 適宜

右分三包一日三回一包宛

この外に色々治療法もあれど、素人は唯其の應急の手當をさへ知つて居られたら可からうと思ふ。兎に角眞に全快するまでは流動性の食物のみを取り、心身の安静を專一とすることが肝要である。健胃藥、麻醉劑などを用ふる如きは固より醫師の手を待たねばならぬ。

慢性胃如太兒

慢性胃如太兒

〔原因〕急性症から轉じたり、或は飲食物の不養生例へば不規律なる分量を取つたり、又は不規律なる時間に食する如きをいふ。彼の朝臥夜深し加之に臨臥飲食する金満家の放蕩息子などに本病の多きを讀者知るや知らずや。この外食後直ちに勉學或は勞働する者には往々之に罹ることがある。一文惜みの百不

知と謂はねばならぬ。又貧血、肺結核、肝臟病などの他病から來ることもある。又筋肉衰弱より來る例も珍らしく無い。胃其の物には頗る攝生を加へてをれど何の運動もせず終日閉居して居る輩は筋肉自ら弱つて遂にこれに罹る例は誰も能く知つて居る所であらう。又口中を不潔にするより發することもある。之は口腔内に色々な腐敗物が發生し、此の腐敗物を唾液と共に嚥み下すからである。

〔病狀〕急性症に能く似た所もあれど、急性の如くに劇しく無くてジリ／＼と數月以上數年を費すことがある。恰も急性は癩癩持の男子で一時バツと劇しいが後はサラリとして居るけれど、慢性は執念深い女子で何時／＼までも根に有つて居るやうなものである。更に今其の徵候を言へば胃部は膨れて重く且つ張る感覺がし、舌には厚く苔が生え、口内は臭氣を放ち、如何程含嗽をしても効が無い。ために食欲は更に無く箸持つことも厭ふがあれば、又反對に食べても食べない。嘔吐するものがある。此の嗜睡は水素炭酸及び泥沼瓦斯などの上昇するものであ

つて、其の際多少の酸性液を吐くことがある。而して此の酸性液のために食道に焦げるやうな感を起すものだ。斯くして月日を重ねる中に身體は次第に瘦せ、精神は益々鬱閉を感じ、花ために面白からず、月ために樂しからず、事茲に至れば其の療法が悪いと言ふまでも無くチンドン、ダワラリン。

「療法」すべて胃加太兒は攝生と療法さへ行き届けば、原因にも依るとは云ふものゝ、大抵治癒するものである。故に能々其の原因を窮め、原因若し結核ならば其の結核を退治し、原因若し心臟病ならば、心臟病を取除かねばならぬ。然らずして未をのみ追ふは何の役にも立たぬ。所謂「泉源濁れり、何ぞ下流の清きを見んや」である。されど原因若し他病から來らぬものは其の症に應じて所置するが宜い。乃ち飲酒家には、盃をも持たせぬやうにし、一般に固形食物殊に蔬菜類香の物を禁じ、又醋の物、干物、脂肪物、貝類及び濃い茶、珈琲などは、夢用ひぬこととし、食事と食事との間は必ず六時間を隔てしめ、精神を愉快にし、適度の運動を行ひ、嘔吐ある者には氷片を嘔ましめ、温浴によつて皮膚を清潔にするが肝要である。此等の目的に向つては、轉地温泉浴が大いに効ありと我は信ず。飲食

物は病の輕重にも依るけれど、概して牛乳、卵、黄、鮪、淡泊なる魚類、豆腐、湯菜、蕨、鱈、節、ソツアの類は差支は無い。さりながら、これとても多食するは宜しく無いのみならず、生來之を厭ひ、若し強ひて口に入れば嘔吐を發するが如き物は、爾來余の經驗上用ひぬ方が最も宜い。その粘液を吐き、酸酵物の多くあるを認むるものには、

▲人工加兒々斯泉鹽 一五〇 水 一〇〇〇

右一日三回食前分服

これに兼ねて

▲撒里矢爾散 〇一 含糖百弗聖 三〇 デアスターゼ 〇三

右分三包一日三回食後一包宛

これも余の經驗に依れば、これを連服せしむること大凡一週間に至ると、大いに其の効を奏し、酸酵のために止み食欲のために進み、精神も亦頗る爽快を感ずるやうである。但し右水劑のために下痢を催すは固より其の分なれば、恐るゝに足らぬと心得て宜い。これより胃の無力を挽回せんがために、健胃苦味劑として、

内科學

デアスターゼ
〇・四三三〇
パンクレアチン
〇・四三三〇
ウァリドール
〇・〇〇〇〇
右爲一錠一日
三回食後一錠
乃至四錠宛
此の一人さな
談つて作つた
方で三三頁
に述べた所よ
り、濃粉質食
物及び蛋白質
及び消化し
易からしむ

▲ケンチャナ丁幾 二〇〇 稀鹽酸 一〇〇 單舎 八〇 水 一〇〇〇

右一日三回食前分服

▲重曹 含糖百弗聖 各三〇

右分三包食後一包宛

右は誰にでも買へる通常薬中から其の一例を示したものなるが、其の人其の症によつて、千變萬化匙加減をせねばならぬ。一定の杓子定規を以て論せられるものでは無い。

消化不良

消化不良

これは慢性胃加太兒の章で書いたのに、其の徴候や其の療法などは能く似て居れども、熟讀すれば自ら其の趣を異にしてゐるから、同じやうなものと思つてはならぬ。

〔原因〕神經衰弱、依ト昆埋兒などの神經病、或は鬱憂病等の如き精神病、又肺結核、貧血、梅毒、寄生蟲、生殖器病、脊髓病、腸病、或は麻刺利亞等からも本病を誘ふことがある。又手淫、過房、勉強、不運動、飲酒、喫煙の過度からも招く、されば素人の方には

獨立したる本病に罹つてゐるのやら、又他病の一徴候であるか、判斷し難いものである。

〔病狀〕殆んど慢性胃加太兒と同じく、醫士でさへも其の吐物などを検査せねば分らぬ位である。併しながら加太兒の方は老弱男女に拘らず、これに罹るけれども本病は大抵青年壯年の男子を侵し、小兒や老人及び婦人には甚だ少いものである。且つ病を起す原因に於ては餘程異なつてゐるから、これより推して區別することが出来る。今改めて其の徴候を最も簡單に述べれば、慢性胃加太兒と同じく、胃部が膨れ、身體力脱け、鈍頭痛、噯氣、嘔吐、惡心、嘔吐、腹痛、食思缺乏、精神鬱々、何事も悲觀的に感ずるものである。其の治不治に至つては、慢性胃加太兒は其の輕重共に緩慢なれども、本病は輕きは數日にして全快し、重きは仲々前者の比で無いのがある。

〔療法〕之も慢性胃加太兒と敢て異なる所は無い、而して酸性の者には、

▲重曹 三〇 薄荷油糖 適宜

右分三包一日三回食後一包宛

の處方は大必要であるし、亞爾加里性の者には、

▲稀鹽酸 一〇〇 單舎 一五〇 水 二〇〇〇

右一日六回分服

の服薬は是非共用るねばならぬ。併しながら、これを鑑定検査する方法は醫士で無れば行ひ難きものであるから、今之を略す。其の他の健胃劑及び防腐藥等は矢張前者と同じと知る可し。

胃瘧

胃瘧

〔原因〕之は俗に癪と言つてゐる病で、胃其の物の病的からも無論來るけれども、多くは他の病氣より反射的に犯す方が多いやうである。即ち腦病有髓病、依ト昆垚兒貧血などの病からも來るし、又女ならば月經異常、私的、早子宮病などからも誘ふことがある。故に余の經驗に依つて數年來の癪持が腦を治したるために、隨つて癪其の者も逃げ失せたのがあるし、又子宮病の全快と共に本病も忽ちに消え去つたのがある。而して腦病や脊髓病は男女共通であるけれども、子宮病や又、月經異常は勿論男子にある筈無れば、男子よりも女子に本病の多く有る。

つて而も小兒や老人に少く、大抵は十五六歳から始まり、四十歳前後が止りである。

〔病狀〕今が今まで笑ひつ、語りつしてゐたものが、俄然「ア痛ッ、」と胃部に劇しい疼痛を發し、其の疼痛が胸から脊にまでも響き、其の上胃部が幾分膨れて出る。事茲に至れば、患者は夢中になつて、其の痛い場所へ枕でも當て、確かり壓へれば、幾らか其の疼痛が減するけれども、これを脱せば又又痛む隨つて脈は細くなり、手や足は顫ひ顔の色は蒼くなり、噁氣が出る。併し此の噁氣の出る度に段々と其の疼痛が緩らぐものである。斯くの如く俄かに起り易い病であるから、古來幾多の小説家の材料になつたかも知れぬ。一人旅の峠茶屋俄かに起る持病の癪、悶え苦しむ其の折柄、偶々通るは樂しい青年、袖摺れ合ふも多少の縁何うぞ壓へて給へと、縋れば、見るに見兼ねての介抱「圖らず御恩に預りました、して又即今の妙藥は？」何これは家庭醫學に掲げてありました糸氏の療法……其の療法は左の如し。

〔療法〕昔は熊膽や獅子膽などを用ひたさうだが、今は斯る迂遠な方法を取る者

は無くして、何れの醫士も先づ第一にモルヒネの皮下注射と出掛るやうである。されど余は之を好まぬ。何となれば早く疼痛を鎮めるには宜しいけれど、副作用としてモルヒネの中毒が残ることがあるからである。茲に一つ素人方及び經驗に乏しき醫士に失禮ながら注意す可き事は、若しもモルヒネの注射をしたら、少くも七八時間は可成眼を閉ちて静かに臥し居り、兩便の如きも便器を取り寄せて徐ろに寢床の上で爲なさいといふ一事である。然るに注射をしたれば、治つたからとて直ちに歩行或は業務を取ると忽ち眩暈を起して卒倒し、甚しきは其の儘永眠することさへもある。斯ういふ危険なる薬品にも拘らず、之を注射或は内服せしめながら、静かに臥せよといふことを告げぬ者が往々有るは實に遺憾である。所が余は斯る毒薬を用ひずして該患者には直ちに「日本酒一勺程」と旁々感冒の時に用ふる安知歌貌林○三乃至○四を服ましむるのである。これで輕きは大抵治る。若し治らねば更に十分時間毎に日本酒を二三度續け、それでも治らねば最後にモルヒネの注射又はクロ、ホルムを内服せしむることがある。但し素人の方は安知歌貌林にても劇薬で得易からねば、早急の場合に

臨み、唯日本酒のみを用ひられても、彼の名も無き賣薬を服むよりは、大いに勝らんと余は信するのである。其の他胃部に芥子泥を塗つたり、或は發胞膏を貼つたり、或は蒟蒻を熱くして之を當るなども行ふ方が宜い。又本病の原因となつてゐる他病あるならば、前以て之を治療することを專一にせねばならぬ。因に言つておきますが、胃痛の持病ある人は、常平生に過劇の情緒、殊けて憤怒は害あるものなれば、慎しまねばならぬ。諺に「癩に障る」といふも實に道理あることならんと思ふのである。

胃擴張

〔原因〕朝は朝酒夕は晩酌人を訪へば、飲み客來れば、勿論といふやうな酒飲や、牛肉ならば三四斤、雜煮餅なら年輪だけ平げるといふ如き暴食家に多くあるは、自業自得である。其の他胃より腸に移る出口、即ち幽門と名づくる部に潰瘍が出來、これを療治したる其の癍痕が残つて、其の幽門が狭くなり、従つて胃全體が擴張するもあるし、又他の胃病或は全身病などにて胃の筋肉が衰へ且つ緩くなつてそれがために擴がるものもある。

〔病狀〕其の輕重に依て色々に違ふ。或は胃部が重苦しいやうに感ずるだけのもあるし、或は又食欲が減る位なものもある。或は却て食欲が増し、従つて食すれば従つて苦しむもあり、何れにしても病漸々重くなれば、嘔吐を發したり、多量の水或は食物を嘔吐したりするもので、其の嘔吐したる後は、暫時輕快を覺ゆるけれども、間も無く又元の默阿彌たるはいふまでも無い。之より尙病進めば遂に身體瘦せ衰ふ。然るに彼の酒客暴食家は斯る事をも知らぬが佛、イヤ其の佛に數月乃至數年の後は爲らんとするのである。

〔診斷法〕胃の外部より之を視るに、臍の上方が膨れ出てゐて、之に觸るれば胃の動くを認めらるゝことがある。乃で兩手を以て短い衝突を試みると、ダブ／＼音のするを聽かるゝものである。これは胃中の流動物が此處彼處に振ひ盪くためなることは言ふまでも無い。尙も診斷を確めんとするには打診にて左手の中指を横にして胃部に當て、右手の中指を以て其上を打てば液體の無き部は鼓音を發し、液體の有る部は濁音を放つ、更に半合位の水を飲ましめて打診し其の濁音が臍の下方に進めば進む程、より多くの擴張しつゝ有るのであると斯う

醫書を其の儘直譯してかくけれど、實際其の音を聽き分るは仲々六かしいもので之を稽古するには屢々健體と本病者とを比較して遂に熟練するものなれば、今聊か記して醫學生の參考に供するのである。

〔療法〕他の胃部も然うであるけれど、本病は殊に攝生に注意し、縦ひ飢を感じても可成控目々々に食物を取らねばならぬ。他病ならば、流動性の牛乳の如きは多量に飲んでも左程の差支は無いが、本病には胃の擴張せぬやう、少量に用ふるが肝要である。其の他細かに控いたる牛や鶏の肉、粥生卵、淡泊としたる魚の刺身などを程過ぎぬやうに用ひ、決して纖維性の野菜物を取つてはならぬ。病の重き者は洗滌器を用ひて胃を洗ふが宜い。此の器械は最初は勿論醫士の手を借らねばならぬけれども、後々は病者自ら行ふことの出来るものである。病の比較的重からぬものは、器械の代りに左の如き藥品を服用すれば大いに効がある。

▲人工加兒々斯泉鹽 一五〇 水 一〇〇〇

右一日三回食前毎に、其の三分の一宛服用すべし。

但し甚だ不味い薬であるから其の服む分量だけをコップに移し、これに一個の鶏卵を落し、能く掻き混ぜてグツと服み下し、直ちに冷水を以て含嗽をなし、又更に一口の水を飲んでおくが宜い。又これは下劑であるから用ふるに従ひて、下痢するけれども、二週間乃至三週間位は連服しても身體の衰弱を招くことの無き良薬である。

▲重曹 三〇 硝蒼 一〇 ホミカ越幾斯 〇〇八 乳糖 適宜

右分三包 一日三回食後一包宛

これは胃を健全にし、且つ胃筋の收縮を催すための目的である。而して、ホミカエキスは、これも仲々服み難い薬なれば、これに堪へられぬ人はオブラートに包んで用ふるが可い。

其の他常に弾力性の腹帯を締めて居ること、及び電氣を通するなどの處置は醫士の命令に従ふが得策である。

〔余の概歎〕我國人は其の戰場に出て、は、世界無比の勇敢なるにも拘らず其の平生は食慾を制するの忍耐力は如何にも薄弱で何事にも必ず飲食が伴うてゐる。

る。花を見ても「酒無くば」と嘲つし、月を眺むれば月見團子、客來れば時を撰ばず酒肴下戸黨なれば菓子及び餅、其の外吉凶禍福芝居遊山屹度酒食が附物である。然ればにや、胃擴張者の多きことは恐らく世界一ではあるまいか、而して滑稽なのは、胃の攝生をする目的にて、胃病者でも無い者が流動性の食物を撰んで食し、それがため却つて胃力を弱くしたり、或は胃擴張でも無いのに、三度の食事を控目に取り、即ち飢を感じずる所から間食をなし、遂に眞の胃擴張を招くことである。斯く胃擴張は不規則なる食事の取り方をするために招くものであるから、凱旋の兵士中にも本病を土産にしたる者の多きは争はれぬ事實である併し此等は萬己むを得ざるに出でたる名譽の疾病とでも謂はねばなるまい。序に今一の論すべきは學生殊に東京遊學者に胃病の多きことは、これ又事實であつて、之は學生其の人の不心得にも依るけれども、一つは下宿屋も亦其の罪を負はねばならぬ。何となれば彼等下宿屋は吝嗇的策略として夕飯時の如何にも早く午後三時過から四時までの間に膳を運ぶ。されば言ふまでも無く其の當時は食慾が進まぬから、少量を取つておくけれど、寢際に至つて飢を感じるは自

然の道理。己むを得ず、「オイ君蕎麥屋へでも行かうちや無いか」といふやうになる。彼是實行して歸る時分は夜も深更下宿屋は其の様なことは白河夜舟可哀さうなは學生まんまとその策略に載せられて明日は朝寢起ると直に飯正午も近くなる胃擴張或は消化不良にならざらんと欲するも豈得べけんや。嗚呼々々。

中毒性胃炎

中毒性胃炎

〔原因〕自殺の目的或は過つて實に恐ろしき毒藥例へば硫酸・鹽酸・昇汞・燐砒石などの如き物を服用するに依る。

〔病狀〕其の毒物の如何に依つても因より違ふけれども大抵其の胃部は灼けるが如く焦けるが如くに熱くなり最も劇烈なる疼痛のために悶へ苦しみ血液を或は吐き或は下して七顛八倒途には身體衰弱して斃るゝ殘酷極まるものである。

〔療法〕誤つて甚だ少量を服んだる者は其の毒物の性質に依て或は治ることもあるけれど自殺の目的を以て大量を用ひたる馬鹿者に至つては殆んど其の治

療の見込が無いと謂つても可い。然のみならず毒物は種々雑多であるから療法も亦千差萬別であると言つて醫士の來るまで空手傍觀してゐる譯にも行かぬ。されば數多毒物の中でも世上實際に椿事の起り易い物即ち硫酸・鹽酸・硝酸・此等を融昇汞・モルヒネに就いて單簡なる救急の方法をいへば酸類には石鹼水をドン／＼飲ましめ昇汞には鶏卵砂糖水をドン／＼與へモルヒネには茶や珈琲を用ひ勞々眠らしめぬやう頻りに身體を刺戟しおき一方には急使を醫士の許へ走らしめねばならぬは言ふまでも無い。但し右の療法は常に何人の家にも有り得る物を述べたので固より緩慢なる處置なれど素人方に適當なる藥品を説いた所で斯ることに豫備しておく人も無からうと思ふから何等の効も無いことである。

胃潰瘍

本病の話をする前に、何せ胃囊は我が胃液のために消化せられぬか、換言すれば胃液は動物性の物を消化する力あるならば、何故に自家の胃を消化せぬかといふ一事を聊か辨明してかゝる方が了解し易いと思ふ。これに就いては古來幾

胃潰瘍

多の生理學者が色々と研究した結果斯う判斷した。即ち胃液が胃自家を消化せぬのは、胃の粘液中を循環する血液の亞兒加里反應に由る。平たく言へば胃の内部に在る皮の中に流れてゐる血液が胃液をして消化せしめぬのである。實に身體は靈妙なる工合になつてゐると謂はねばならぬ。何かの原因で血液の循環を妨げられたる其の粘膜の部分は胃酸のために消化せられて腐蝕するやうになる。これを即ち胃潰瘍だ。されば肺病、心病、血管病の爲に血液の十分粘膜に注がぬ折や、又他の胃病からして胃酸過多となり、血液の之を中和する力足らぬ時は本病に罹るものである。年齢は十五歳以上三十歳以下の貧血性の人に多い。されば畢竟するに本病は強壯なる人に少く、虚弱なるものに多きは言ふまでも無い。

〔病狀〕初の中は慢性胃加太兒にでも罹つたかの如く、食後即時或は食後一時間程経つと胃底がチク／＼痛み暫くして治り、左程の心配もせず、日を経てる中に病は段々と募り、其の疼痛は切るが如く灼くが如くに立ても坐つても居られず、或は右に或は左に轉がつてゐると、其の右側臥の時には其の痛み劇しく、左側臥の時には大いに緩らぐことがある。常に痛あるのみならず、腹部は壓迫せらるるやうな感覺を起し、えも言へぬ苦しさの中に嘔吐を促し、續いて嘔吐物には血液を交ふるに至る。此の血液は本病の診斷を確かむるに最も大切な徴候で、事茲に至れば、如何なる鑑醫もこれア胃潰瘍ですと鹿爪らしく言ふけれど、始の間は仲々鑑定のし難い病である。又時としては、病の初期より既に吐血するものもある。而して其の吐血の工合が色々あつて、俄然大量を發するもあれば、或は少し宛止まぬもある。何れにしても衰弱するは言ふまでも無いけれど、非常に大量の者に至つては卒然腦貧血を發し、卒然眩暈し、其の儘氣絶することがある。其の少し宛吐血する人に在ても日を経るに従ひ、眩暈又は耳鳴などの徴候に引き續いて顔唇眼の粘液等は著しく蒼白くなり、身體は次第に瘦せ、食欲は愈々減り、嘔吐は益々募り、食はざれば衰弱する、食へば吐く痛む、其の他便秘、腹部膨滿等の苦痛に引續き、甚しきに至つては其の潰瘍部に孔が穿く、さア斯うなれば治ること甚だ六かしく、大抵は野邊一片の煙草化すものである。斯く孔が穿くやうになれば、其の治ること甚だ少いけれど、其の以前に於てさへ、攝生治療共に宜しく

ば治らぬことは殆んど無いといつても宜い。併しながら其の治つてからも尙三四年の間は普通人の飲食物を取れば又襲はれ、前よりも一層劇しい症状を呈するものなることを忘れてはならぬ。

〔療法〕療法よりも寧ろ養生が大肝要である。如何に療法の宜しく行き届いても甚だ僅かの不養生があると、百日の説法屁一つとなるものである。乃ち安静といふことが第一に守るべき點で、左程の苦痛無くとも少くも五週間は臥床に於て、大小便も便器で取るが宜い。余の経験に依ても治りかゝつた人が室内歩行をしたるが爲に忽ち吐血し、眩暈卒倒したのがあるし、饑飯一杯のために引續き腹膜炎を發し間も無く天國へ轉地したのもある。されば飲食物の攝生も亦大切なることである。素人の方が考へても、胃が腐蝕して出血するものであるから、其處へ少しでも刺戟する物が行けば尙々痛み、尙々出血するは見易き道理でせう。故に該病者であるといふ診断が出来たら直に一兩日は更に飲食物を取らぬが宜い。非常に渴きを覺えたら口中に氷片を含み、決して他物を用ひぬやう我慢して居らねばならぬ。二三日目からは極めて冷たき牛乳を少し宛服

み、漸次に其の量を増し、續いて半熟卵スープの如き物から米粥汁の様な物を與へ、四五週も經て痛みも無く、出血も無く、殆んど普通人の如くに何の苦痛も無きやうになつたら、始めて細かに碎いたる肉粥、或は少量の刺身、豆腐、馬鈴薯の類を、小心翼翼として食ふが可い。若し夫れ酒類、唐辛類を取るに至つては、恰も及を以て切腹すると何ぞ異なる所あらんやである。此の外精神の攝生も亦大なる影響を蒙るもので、元來本病は胃粘膜に血液の來ること少きより起るものなれば、爰に憤怒や嫉妬、或はつまらぬ事を何時もクヨクヨ心配せんか、血液は腦に集り、従つて胃の治療を遅くするは自然の結果である。故に精神を平々澹々可成樂天的にして、病の事などを打忘れ、詩でも吟じて居るが宜い。又内服薬としては、

▲人工加兒々斯泉鹽 一五〇 卵黃 一個 水 一五〇〇

右一日三回即ち三分して其の一分を早朝に、残を午前十時と午後四時頃とに分服す可し。但し服するや否や冷水を以て含嗽し、然る後一口の水を飲んでおくが可い。若し又服めば直ちに嘔吐しても屈せず

撓ます續ければならぬ。斯の如き服用方は余の屢々實驗して奏効したる所である。

▲抱水クロラル ○五乃至一〇 單舎 五〇 護談漿 二〇〇
右臨臥にグツと一度に飲んで眠るが宜い。

此の二藥を二週間連服し其の上心身の攝生さへ宜しくば大抵恢復するものである。されど其の重症に至つては色々様々の臨機應變策を施し此等に拘泥してはならぬ。尙この外に言ふ可きこと數多あれども餘りに専門的になれば略す。

胃癌

胃癌

胃癌の原因遺傳等に就いて醫士社會には色々の議論もあれど未だ一定の輿論とはならぬ。甲は大酒家に多しといひ乙は然らずと駁し或る者は遺傳と稱し、或者は遺傳せずと反對す又或者は茶を嗜む人に多しと唱へ或者は根も葉も無き事なりと笑ふ。此の外湯豆腐を下物にして酒を飲めば早晚本病に罹るものだといふ俗説もある。兎に角此等は皆己れの狭い經驗を述べたるもので一つ

も信するに足らぬ。されど四十歳以上七八十歳までの人に多くて青年壯年に少しとは一般に認むる所である。併し明治の文豪とも言はるべき紅葉山人は惜い哉三十七歳にして本病に罹り秋の紅葉と散りしは實に例外と謂はねばならぬ。而して山人は好んで苦い茶を飲んだるためにそれこそ茶は胃癌の原因なりといふ者もあつた。けれども余の知つてる人が若い時より非常に抹茶を好み糞便までが茶の香氣ありといふ位なるに八十七歳の高齡を保ち何の苦も無く唯老衰のために眠れるが如く斃れた例もあれば信するに足らぬ説である。憶ひ起せば我が母も年僅かに五十五歳にして本病に襲はれ一ヶ月餘り苦しんで彼世の人となり玉うた。成程茶は随分嗜きであつたれど遺傳も無れば酒も飲み玉はず好む所は唯音樂と詩歌とであつた。詩歌は師に就いて學んだといふ譯でも無いのに折に觸れ興に應じ時々口吟まれたのは逆も余等の遠く及ばぬのがある。今我此の章を書くに臨んで美想は本病の誘因となるものではあるまいかなど風樹の感に堪へぬのである。序に今一言したきは前に述べたる胃潰瘍と慢性胃加太兒消化不良などが本病を誘ふ惡魔では無からうかと余も

疑へば先輩も既に疑つてゐるといふ事である。

〔病状〕其の起り方及び其の苦しみ様は殆んど胃潰瘍と異なる所は無い。故に初の中は如何なる醫士も鑑別をし兼ねてゐるが唯甲は若き人に多くあるし乙は老者に多く有るを以て年齢上より其の推測を下してゐると即て劇烈の嘔吐をなすに至る其の吐物を見るに潰瘍は血液を交ふるが普通なれど癌に於ては恰も珈琲の様な物を吐く余の幾度も實驗したる所に依て形容すれば魚の腸の腐つたのが紫色に變じたといふが如き有様である。而して水一滴でも牛乳一口でも飲めば直ちに痛み且つ吐く。病はすべて苦しいには相違ないが本病は特別であると思はる。斯くして愈々進めば初は便秘せるにも拘らず次第に下痢し顔色は蒼白く且つ土色を呈はし次第に瘦せて骸骨の如くそれで其の瘦せたる下肢等には浮腫を帯び遂に衰弱以て斃る。

〔療法〕これも亦胃潰瘍と同じく攝生が肝要であつて其の攝生の仕方亦同一であるけれども其の薬用の効無きことは前者に似もやらず即ち前者は薬力に依て大抵は治るけれども後者に至つては其の薬力のみには依頼しては必ず治癒

せぬものと断定しても過言ではあるまいと思ふ。然らば本病に罹れば死刑の宣告を受けたも同様かといふに否々決してさうでは無い十中の八九は治るべき一法がある。之を何とか爲す曰く外科的手術である嗚呼切開である。切開して治らぬのは手後になつたものや又餘り衰弱してゐる人などにある。故に不運にして一たびこれに罹りこれと判断がついたら一刻も早く名醫の手術を受けねばならぬ。内服薬としてはコンヅランゴ皮煎或は白屈菜などを用ふれば多少の効力あると雖も固より之れのみを以て全治せしめんなどは到底駄目なことである。尙此の外冷罨法温罨法皮下注射などの法もあれど何れもこれのみで治癒するもので無ければ唯一時凌ぎの姑息的手段と心得て宜いのである。

此の病氣は元來他病の一徴候と看做すべきもので殊更に獨立したる病名を附ける程のものでは無い。例へば胃潰瘍や胃癌のために胃より出血すれば取りも直さず胃潰瘍胃癌の徴候であつて之を一つの病氣とするには足らぬが如し

と論ずる人も有るが、胃出血の原因は胃潰瘍や胃癌に限らず、尿管の病、外傷、月經不調、熱性病、其の他何か胃に充血すべき原因あれば、これに應じて出血するので、實に其の關する所甚だ廣く、而も胃潰瘍、胃癌、其の他の病は必ず胃の出血が伴ふと限らぬことなれば、之を一つの病氣とする方が固より其の分であつて、且つ大いに便利である。故に今は諸家皆之を獨立せしめたのである。年齢は大抵青年壯年の者を侵し、老人には殆んど無い。男女の關係を言へば、女は三分の二以上を占めてゐる。

〔病狀〕これも矢張始めは他の胃病の如くなれど、時を經るに従ひ、吐血する、又始めより俄かに出血するとの二通りがある。甲は上腹部が何と無く重苦しく、且つ張る氣味がし、續いて惡心、又續いて嘔吐、斯くなれば、勿論業務を取ることも何も出來ぬ、唯悶へ苦しんでゐると、その揚句に出血するものである。出血すれば其の多少に依つて、或は徐々に、或は直ちに顔色が蒼白くなり、眼よりはヒカヒカと火花が散るやうになつて、或は眩暈がし、或は又耳が鳴り、皮膚は冷たくなり、脈は細くなつて、其の重きものは衰弱の結果、其の儘死んで了ふものもある。

〔療法〕これも殆んど胃潰瘍に同じければ、敢て言ふほどの必要も無いのみならず、其の原因に依て其の治療も異にせねばならぬ。例へば原因が熱性病なら、其の熱を取れば従つて本病も亦治るやうな道理である。兎に角胃部に冷療法を施し、手足の温浴を行ひ、止血薬、如きものを服まねばならぬ。若し夫れ吐血の爲に氣絶せる如きに至つては、顔面に冷水を吹きかけ、皮膚を刺戟し、ブランデー、或は葡萄酒の興奮劑を與へて呼び醒さねばならぬ。此の外皮下注射や貧血の處置等に至つては、専門學生の講すべき範圍である。

神經性胃病

神經性胃病

〔原因〕(一)精神過勞——學問に従事するものは、他業者よりも事の是非善惡を識別せねばならぬ道理であるから従つて心身の攝生を守る可き筈なれど、事實は之に反對し、學問する者は却つて萬事が不規律になり易い傾がある。能く勉強し、遊ぶ可き時間に遊べば決して精神の過勞を來す譯は無けれど、大抵の學者は勉強す可き時にクヨクヨ思ひながら遊び、遊ぶ可き時に遊ばぬ人もあるし、又遊ぶ可き時勉強す可き時も間無しに勉強するものもある。又中には反對に遊ぶ可

き時も勉強す可き時も遊んでる怠惰者もある。斯る輩は皆何れも精神過勞に
なるのだ。斯う申すと前二者は然うなれど、後者即ち何時も遊んでる人は精神
過勞にならぬだらうと言はるゝかも知れぬ。所がさうでは無い、始終遊んでゐ
ても、良心のある以上は常に其の良心の苛責に逢ひ、「これアマア〜」と日を
送るが故に矢張精神は鬱々、前二者よりも尙一層の過勞を來すのである。

(二) 筋肉衰弱——學者は何うしても不運動になり易いもので、其の不運動は即ち
筋肉衰弱となり、筋肉衰弱の結果は胃に障害を來すは生理上の然らしむる所で
ある。縱し筋肉衰弱せぬまでも不運動なれば消化吸収の點に於て無論宜しか
らざるは誰でも知つてゐる事柄であらう。

(三) 時間の不規則——前にも述べた通り學者は却つて萬事が不規則であるから
食事より食事の間が記帳面で無い。其處へ行くこと却つて田夫野人の方が能く
守るものだ。學者の通弊として朝起ること遅く従つて朝食も遅く、それで午食
は比較的早く、夕食は人並で夜深しをする。故に或時は食後三時間程で次の食
事をなし、或時は寢食を忘れて勉強し、七八時間も過ぎねば食事を取らぬなどの

不攝生を行らかすは敢て珍らしく無い。余の知つてゐる學者中で學校に奉職し
てる人は出勤の時間に制限せられて朝はかつ／＼に眼を覺し、顔を洗ひ飯を食
ひ、洋服を着る靴を穿く、走る、恰も手品師の様に忙がはしくてゐる。又小説書い
てる文學者は眼を擦りながら夜の十二時乃至は二時頃までも筆と戦ひ、朝は九
時乃至十時に起き出で、悠々と新聞を見てから食事を済し、食後の休憩など
と是だけは理屈に適つてゐるが、間も無く中食。斯ういふ風であるから二人共立
派に本病に罹つてゐる。學者は何れも斯うでも無からうけれど、一寸總代を掲
げたのである。

(四) 遺傳——これは敢て學問に従事してゐる譯でも無く、又比較的攝生もしてゐる
れど親譲りのために己むを得ず、否誰でも己むを得ずだが、兎に角本病に罹るの
だ。右の外細かく別けたら色々の原因もあるが、先づ此の位にして次は病狀に
移らう。

〔病狀〕學者であるから上來述べたる精神過勞、筋肉衰弱、時間不規則などの不攝
生はあれど、田夫野人の如くに或は暴飲暴食したり、或は腐敗に傾いた飲食を取

つたり、或は非常な飢食を敢てするやうな不都合が無いから、病氣らしい病状は無い。重言すれば激烈なる病状を呈せぬ。これが即ち「神経性胃病」と名づけて他の胃病と區別する所以である。然れば左に其の一般を列記しよう。

(1) 食欲が少い——他の胃病例へば慢性胃加太兒とか消化不良症などは食欲大いに進まぬけれど、本病は之と異り進まぬといふ程でも無く、又敢て欲しいといふ譯でも無い。「最早正午だから食事にしますか」と問へば「食べても良い」と答ふ。此のでもが取りも直さず本病の特色である。

(2) 變な痛みがする——他の胃癒撃の如くにキリ／＼痛む譯では無いが、食後又は空腹時などに堪へられぬといふ程でも無けれど、一種名状す可からざる疼痛があつて、暫時眉を顰めてる位で止む。然らば食後や空腹時に必ず痛むかといへば然うでも無い。平穩無事に通過することもある。

(3) 疲倦——何處が何うといふ形容は出来ねど、唯何と無く身體が倦い。

(4) 鈍い頭痛がする——朝の起立などは爽快なれど朝食も卒へて何か仕事に取り掛らうとすれば鈍い頭痛がして来る。

(5) 腹が張る——他の胃病者や或は鼓腸病者などは異なり、外部から見ても何等の變りは無いが、本人の身になつて見ると、上腹が重苦しいやうで、張つてゐるやうで、えも云へぬ厭な感覚がする。

(6) 嘔氣が出る——斷えず出て、甚だ苦しいといふ程では無れど、時々嘔氣が出る。殊に俯いて書物を見たり、字を書いたりする時に、五月蠅ものだ。

(7) 嘈雜も出る——常には出ねど、食物の消化時になると、食道に灼けるやうな感覺が起る。之を俗に「胸が焼ける」といふ。斯くて酸ばい粘液が出て、頗る氣持の悪いものである。

(8) 精神が興奮し易い——爾來悠々寛大の温厚者であつたにも拘らず、少の事にも精神興奮し易く、忽ちに怒り、忽ちに悲しみ、忽ちに喜び、忽ちに奮發し、忽ちに沮喪する。概して言へば鬱々と悲哀に傾き易く、而して此の精神興奮と消化器とは少なからぬ關係を有し、精神興奮する毎に本病の病状も著しくなる。

(9) 便秘する——普通の人ならば大抵一晝夜に一回宛硬からず軟らか過ぎず、多からず、少なからず、丁度宜い加減の糞便を洩すものなれど、本病者は或は隔日或

は三日置位に通便が有つて、多くは硬く、而も思ふ十分には無い。縦ひ毎日あつても其の量に於ては甚だ少い。それが爲め食欲も亦進まぬは生理の然らしむる所である。

(10) 悪心がする——病少しく進むと時々悪心を催し、書見筆寫等何事も懶くて出来ぬやうになる。

(11) 吐くみ吐かすみ——病尙進めば悪心だけに止まらず、取つた飲食物をゴ—ガ—と嘔吐することがある。然らば飲食する毎に必ず吐くかといへば然うでも無い、或は時に吐いたり、或は時に快く収つたりする。

(12) 痩せ衰ふる——病愈々極端になれば、他の胃病即ち慢性胃加太兒消化不良症、など、區別出来ぬやうになつて、身體は大いに痩せ衰ふるものである。

要するに本病は他の胃病と敢て異なる所は無いが、唯其の病狀が軽く、他の胃病の如くに消化器を解剖しても其の組織が傷んで居らぬ。のみならず、其の経過頗る長く、數年數十年に涉つて常に心地面白からず、去りて床に就いてても無く、従つて立派な事業も遂げず、碌々日を送り、遂に長くも五十歳位で此の世を

去るのである。

〔豫防法及療法〕豫防法は原因の章を見て、原因となるべき事柄を避けてをれば本病に罹ること殆んど無いのだ。然るに我國の學者は一般に規模が小さくて而も成功を急ぐの弊がある。小學二年を卒業すると早くも急ぎ出し、何の某は呼年十三歳で中學へ入學したのに我は十四歳だ。それで尙小學校に居るとは残念である。僅か一年の事を非常に心配し、斯くて中學校に在學中疾病其他のために一度でも落第したとすると、年齢ばかりを氣にし、無暗に成功を急ぐ、それゆゑに精神の過勢を來すことは一通りで無い。斯る人は高等學校、大學校と進むに従ひ、層一層に精神を過勞せしめ、遂には本病を惹き起すのである。何うか此の「家庭醫學」の讀者は此の理を悟り、悠々迫らず、去りて怠惰に陥らず、能く寝ね、能く遊び、能く勉めて貰ひたいものだ。四十で成功せずば五十、五十で成功せずば六十乃至百歳、何をか急ぎ何をか勞せんやだ。此の大なる規模が本病に罹らぬ第一の豫防法である。余は嘗て某中學校の教員をしたことがある。學校の教員は兎に角學者だ、然れど、十中の八九は實に憐れな身體で、其の規模が何

れも小さい。校長教頭などは、十數町の道を往復共に人力車に乗り、運動を殆んど無視してゐるから、身體の抵抗力甚だ弱く、一人は結核的の病に罹つてゐるし、一人は吹けば飛ぶやうな優柔男子である。其の他三度々々三杯の飯を食べる人は甚だ少い。學校から歸れば碁を圍む者、玉突を事とする者、校長の宅へ機嫌取りに行く者、朋友と長話をしてゐる者、謠曲を稽古する者、歌留多に熱中する者、比々皆然りで、人が些と暇々に勉強したら何うぢやと勸むれば、「三十歳になるからね」と云つてゐる。斯る輩に却つて精神過勞が多く、爲に本病に襲はれてゐる。嗚呼能く勉めて能く遊ばねばならぬ。右の外規律を守る事、運動をして筋肉を強健にすることなどは皆以て大切なる豫防法である。

療法は他の胃病と大いに趣を異にしてゐる。されば左に逐一述べて見よう。
 (イ) 病を輕しと信せよ——醫者より本病であると告げられたる場合には、患者は我が病を輕いと信せねばならぬ。即ち胃の腑は敢て傷んでゐるのでも無れば、胃液が缺乏するのでも無く、又擴張してゐる譯でも無い。言葉を換れば、胃腑は常の如く其の官能を營むに差支無いので、言はゞ健康者の眠つてゐるやうなものだこ

悟ることが療法の第一着である。然るに之を普通の胃病と誤解し、流動體の食物のみを取つたり、藥物のみに頼つたりすると、身體は益々弱くなつて胃は愈々衰弱するものである。

(ロ) 寒冷摩擦——寒冷摩擦とは冷水を全身殊に腹部に注ぎ、注ぎては摩擦し、摩擦しては注ぐのである。此の法は神経系を強壯にする妙薬で、是非共一日に朝夕の三度は實行せねばならぬ。常に神経系を強壯にするばかりでなく、筋肉の衰弱をも挽回し、胃の消化力亦従つて興奮するものである。

(ハ) 平々淡々たる心——學者たる者は中學の青年であらうと、飛んで博士であらうと規模が大きくなってはならぬ。規模が小さいと僅かなことに精神を刺戟し、嬉しい事が有れば意氣揚々となり、悲しいことが有れば大いに沮喪する。故に何學に従事する人でも世の褒貶黜陟を敢て顧りみず、心を平々淡々たらしめ、悠々百年の計を運らし、急いで急がす、急がすして急ぐの心を養成すること、是れ本病の主眼なる療法である。

(ニ) 寧ろ勞働せよ——本病に罹つたら、普通の運動といふよりも寧ろ勞働に傾く

位でなくてはならぬ。而して可成興味のある物を撰ぶが宜い。鐵啞鈴を振つたり、體操をしたりするのも悪くはないが、是等は餘り乾燥無味で精神を樂しまず點に乏しい。其處に行くと登山漕舟などは運動と同時に精神を爽快にし、且つ高尚にするものだ。其の他擊劍、柔術、乘馬、挽弓の如きも精神を武的にし、悲哀の念を去らしむる靈藥である。けれど擊劍の短所は頭蓋を打つ所よりして腦を傷むる憂がある。又田畑を培つたり、米を搗いたり、薪を割つたりするものも、大いに筋肉の衰弱を補ふ者である。但し何れの運動にしても、一時に過激ならずして一歩々々に度を進むこと甚だ肝要である。

(ホ) 藥物——本病に對しては藥物程害になる物はない。如何に結構な健胃強壯劑でも之を用ひて日を経るに従ひ胃は藥力を藉らねば消化し難い習慣に陥り益々胃の機能を衰弱せしむるものである。然るに世の學者中には何時も、タカヂアスターゼや百弗聖を服んでる人がある。無智識の至す所とは言へ、實に及を以て筋肉を削つてると同じことだ。右の外按摩療法、電氣療法等も有れど、左程の効有るものではない。

腸病の部

腸加太兒

〔原因〕腸の内容物が其の粘液膜を異常に刺戟するが爲に發するもので、此の刺戟は大抵攝つた食物の分量と性質との關係ある器械的或は化學的性質の害をなすからである。即ち不良の飲食物例へば饒たる飯や腐敗に傾いた肉類を食したり、或は腐敗もせず毒も無いけれど餘り無暗に多く食つたり、飲んだり、或は過度の冷飲食物氣候の變換及び蛔蟲などから發る。

〔病狀〕腹痛雷鳴なることな云ふ。續いて下痢し、黄色或は綠色或は粥のやうな或は水の様な大便を一日三四回乃至十回以上も洩す。而して裏急後重、或は後重に行かぬ即ち滯る事や思ふ。或は惡心嘔吐を催すこともある。大抵の患者は全身症狀に左程の影響を受けぬけれど重症は甚だ疲れて藤に就き、時に依ては熱が三十八度乃至三十九度に昇ることがある。又稀には筋肉痛關節痛を發したり、蛋白尿や急性腎臟炎を續發することもある。

〔種類〕唯單に腸加太兒と云つても色々な種類が有るもので、普通には急性慢性

に別けてゐるが之を解剖的に區別すれば(一)十二指腸加太兒(二)小腸加太兒(三)大腸加太兒(四)直腸加太兒であつて、(一)は黄疽を合併する者(二)は著しく胃に障害を受け、必ずしも下痢を伴はず而して糞便中には消化せぬ食物が多く現はるゝのは小腸加太兒の徴である。併し大腸加太兒との區別判然せぬことが往々有る。併し此の糞便に胆汁を含んで居れば殆んど小腸加太兒の特有としても差支はあるまい、而して斯る場合には綠色を帯びてゐる。(三)は必ず下痢を伴ふと斷言しても可い、而して糞便中に大量の粘液を含んでゐることは診斷上必要なる一事だ。小腸加太兒に於ても粘液を含まぬでは無いが、肉眼で著しく見ゆるは小腸加太兒で無いと言つても過言では無からう。(四)は疼痛を帯びたる裏急後重があつて糞便中に粘液殊に濃液を混するものが主なる症候である。次に急性腸加太兒と慢性腸加太兒とを區別すれば前者は數日で消ゆる所の單純下痢と全身調和の劇しい障害を受くる等であるが、後者は前者に續發し或は徐ろに特發し、前者の症候の緩慢にして而も經過の長いものを云ふ。

〔療法〕食餌の攝生が肝要である。輕症の急性に至つては食餌の攝生のみで治

つて了ふものだ。即ち淡泊なる流動性の食物を與へ脂肪類を嚴禁し腹部を温め冷水を飲むことを避けねばならぬ。藥品としては次硝酸蒼鉛一〇乃至二〇を一日に三四回與ふるが最も簡單なるものである。又素人療法として阿仙藥丁幾一〇〇葛粉五〇砂糖適宜水一〇〇〇右一日三回分服などが宜い。又護謨漿も素人用として穩和な藥だ。止瀉劑としては阿片を稱用するけれど、余は餘り賛成せぬ。近來は其の初めに於て蓖麻子油或は甘汞の如き下劑を與へ然る後收斂劑を用ふるが、これは大抵の場合に於て成績が宜い。

右の外大腸の重症加太兒には局所療法として消毒藥を用ひ、毎日大腸を洗滌せねばならぬ場合もある。洗滌するにはイリリガートルで五十倍乃至百倍の撒里矢爾酸硼酸溶液或は百倍の單寧溶液或は十倍の醋酸鉛溶液を一リリテル乃至一リリテル半程灌腸するのである。次に裏急後重甚しく疼痛を訴ふるときは柯々阿酪と阿片越幾斯とより成る所の坐藥を用ふると頗る快くなるものだ。慢性腸加太兒には嚴に食餌攝生を嚴守し、收斂劑を用ひねばならぬ。今其の一斑を擧れば鞣酸格倫撲次硝酸蒼鉛醋酸鉛撒里矢爾酸蒼鉛などである。又

次硝酸銀 〇・八二五〇
 大黃末 〇・〇七五〇
 コロン末 〇・〇七五〇
 薄荷腦 〇・〇〇五〇
 右爲一錠一日
 三回食後一時
 間を經て五錠
 乃至八錠宛
 此の處方は止
 瀉錠三名につ
 べた所で發賣
 してゐる
 之も著者が相
 談を加はつた
 一人で基は眞
 効を奏するも
 のを信じては
 ゐるが此の分
 量に就いては
 議論を戦はせ
 て著者の議論
 に多量に以て
 成立し無か
 著者は一回に

硝酸銀の灌腸も試む可きだ。腹部の按摩腹部の温罨法も肝要である。尙二三
 の處方を示せば、

三三八

▲甘汞 〇・二乃至〇・五 白糖 適宜

右一包を爲し一日に二三回服用

▲蓖麻子油 一五〇乃至二〇〇

右濃厚茶或は葡萄酒に浮べて頓服

說明 右二方は大抵急性腸加太兒の場合に宿便を除かん爲に用ふるの
 一日位用ひたら後は止瀉劑を投するが順序である

▲單寧酸 〇・二 次硝酸蒼鉛 三〇〇 白糖 一・五

右分三包一日三回一包宛

▲阿片末 〇・〇六 單寧酸 〇・三 白糖 三〇〇

右分六包一日三回乃至六回一包宛

▲醋酸鉛 〇・〇六 阿片末 〇・〇三 白糖 一・五

右分三包一日三回一包宛

▲硝酸銀 〇・一 沙列布漿 一〇〇〇

十五錠を用ひ
 たいのである

右灌腸

▲撒里矢爾酸蒼鉛 一・二 乳糖 一・五

右分三包一日三回一包宛

▲格倫僕根侵 (二〇) 一〇〇〇 生姜舍利別 一〇〇

右一日三回分服

▲阿刺比亞護謨漿 五〇〇 阿仙藥丁幾 六〇 單舍 八〇

水 五〇〇

右一包三回分服

便秘

「原因」一言に盡せば平常の腸蠕動が衰へるので、即ち不運動の人や、餘り無刺戟
 性の食物を而も少量に取る者などに往々常習便秘を來すものである。又胃管
 や腸管が狭くなる病、阿片や鞣酸の内服、重病恢復期、大發汗後、糖尿病、腦脊髓病、鉛
 毒、歇私的里神經衰弱、依卜昆埋兒及び鬱憂病等に發するものである。

「病狀」便秘が幾日も無くて腹部緊滿、食思缺乏、精神鬱閉を感するなどであるが、

内科學

三三九

人に依ては三四日に一回程少量の硬便ある位でも左程に苦痛も感せず業務を執つて餘り心配せぬのもあれば又非常に心配して爲に頭痛眩暈或は不眠を來すものもある。又甚しきは呼吸障害心氣亢進及び痔疾を起したり吐衄症を發したりするのがある。

〔療法〕原因療法が肝要である。然れど他病の續發症で無いのは薬用よりも寧ろ無薬療法で治るものだ。之には腹部の冷水摩擦腹部按摩臨臥の下半身温浴などは是非行はねばならぬ。殊に食餌療法に重きを置くが宜い。今其の一斑を紹介すれば麥飯馬鈴薯菜葉類殊に香の物及び果實などを比較的少量に用ふると何時の間にか通便の宜くなるものだ。併し此等の食品は皆不消化であるから常に胃の丈夫で無い即ち虚弱な人は斟酌せぬと所謂角を直す爲に小牛を殺すといふやうなことに陥る危険がある。一般に便秘患者には如何なる食品が宜いかといふに脂肪性食品が第一である。殊にバターで調理したる食品が最上であるからバターを附けた麵麩を始めとし脂肪の多量を用ひて調理せる食品が有効である。又天鰩鱈鯨の如き脂肪に富める物は大いに通便を促すもの

カスカフサグ
ラカ流動越幾
〇〇六〇〇
〇〇一〇二五
精製成黄
〇〇〇七五
〇〇〇七五
薄荷油
〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇
乃至七錠宛

だ。次に食鹽を多量に含める食品や及び香料を加味した食料例へば鹽漬の魚類佃煮胡椒酢の物等のやうなものだ。又砂糖や蜂蜜で製へた穀粉食物が宜い。其の他色々の凝膠類は通便を宜くするものである。飲料としては冷水又は炭酸や植物性を含んだ飲料は便秘に對して一方ならぬ効が有る殊に早朝空腹時に半合位の水を飲むことを續けると往々便秘の習慣を治することは人の知る所である。牛乳は人に依り却つて便秘を増すことがある。斯る人には禁せねばならぬが大抵の人には下痢作用を呈するものである茶やチョコレート等は便秘を助けるのであるから禁するに加は無い。次に適宜の運動を怠らぬといふことは蠕動力を増す上に於て大効がある。藥品としては

▲舍利鹽 一五〇 稀鹽酸 七八滴 砂糖適宜 温湯 一〇〇〇

▲人工加兒々斯泉鹽 一五〇 水 一〇〇〇

右能く溶解するを待つて一日三回分服或は文

右一日三回分服(運用の薬ならば一週間位)

▲蘆菔末 〇・六 大黃末 一・五 甘草末 適宜

此の處方も著
て作つたので
あつて下錠三
三名の所て三
三頁の所て三
つてあるが常
便秘及び痔疾
にも効がある
る。けれども一
に二回の服用
を用ひたい上
に十錠以上用

盲腸炎及
盲腸周囲
炎

蟲様突起の事
は解剖の章に
述べてある

右十五丸と爲し一日三回五丸宛

▲大黃浸(三〇)一〇〇〇 重曹 三〇 苦味丁酸 二〇 單舎 一〇〇

右一日六回分服

▲偏里設林 一五〇

右リスリン 灌腸器で灌腸

〔注意〕下劑は非常に數多くあつて之が處方を一々擧るに違が爲い、けれど大抵の場合には偏里設林灌腸位を時偶に一二度行ふ可し

盲腸炎及盲腸周圍炎

〔原因〕夫れ蟲様突起は生理的作用が詳かたで無く従つて重要な物では無いが病理學上では大關係あるもので、少量の糞便が盲腸より此の蟲様突起内に入ることが珍らしく無くて、其糞便は此處に滯つて居ることがある。滯つて居れば糞便が含んでる液分を失ひ遂に細小で堅い所謂糞石となる。斯様に一度糞便が蟲様突起内に落ちた以上は此の突起の開口部に在る瓣膜の遮る所となつて盲腸に還ることが大抵は無い。又糞石は糞便のみで無く、即ち他の異物例へば果

實の核などから出来ることもある。何れにしても此の糞石が出来ると粘液膜を刺戟して發炎せしめ、且つ其の局部に壞疽を生ずるに至ることがあるのだ。次に窒扶斯等の潰瘍或は感冒或は近傍の炎症なども原因となる。

〔病狀〕大抵は急に發病するもので、患者は從來左程薄弱とも覺えなかつたのに、何の誘因も無く、或は力業遠足などの爲に發するもので、初め多くは便秘し、時として反對に下痢することもある。兎に角盲腸部即ち右の下腹に疼痛を發し、其の感覺甚だ過敏で壓ふれば益々痛む。而して大抵は熱發し、腹部が膨れて張る、それから悪心或は嘔吐を催し、數週乃至數月間苦しむことがある。

〔療法〕攝生を嚴重にし、嚴に身體を安靜ならしめ、藥用は往時必ず下劑を與へて、便通を宜くせねばならぬと稱へたけれど、今や一般に阿片を投ずるを以て隱當なりとするに至つた。而して便秘の甚しき者には寒冷なる石鹼水を灌腸するが宜い。之を行ふには、患者を仰臥せしめ、普通のイルリガートルを以て大腸に注入するのである。次に其の痛む場所を氷嚢を以て冷すが可い。されど、之に耐へられぬ者にはプリスニツ氏器法或は糜粥器法を試ることもある。食物は

極めて固形物を禁じ、冷牛乳肉羹汁の如き物を攝らしめねばならぬ。斯くて尙盲腸周圍炎性の化膿を認めたる以上は直ちに外科手術を施すことが肝要である。序に阿片の分量に就いて一言する必要がある。乃ち其の分量は疼痛の度に依て増減すること所謂醫師の匙加減である。其の處方を示せば、

▲阿片 〇〇一乃至〇〇五 白糖 〇〇五
右一包と爲し、毎二時乃至毎五時に一包宛

痔疾

〔原因〕痔靜脈に鬱血するのであつて其の鬱血は常習便秘或は美食して運動せぬ壯年の男に多い。其の他心肺の病に續發する血行の障害或は直腸の諸病或は子宮病などに續發し、又遺傳もあるやうだ。

〔病狀〕頭部が充血して眩暈を發したり、睡眠が出来難かつたり、胃病のやうにあつたり、腰が痛んだりするなどの症候が伴ふこともあるし、又其等の事が少しも無いものもある。兎に角肛門に灼くが如き痛さを覺え、便通毎に其の痛さが増し、直腸靜脈は小さくも豌豆大にもなれば又雞卵程に膨れ、便通の時に破裂して出

タンノホル
〇二〇〇
イヒナホル
〇一〇〇
鹽酸コカイン
〇〇一六六
カハカ
右一個の座薬
に作りに挿入
之も著者に相
談を受けたり
人名の所て一
三頁の所て三
つてある

線蟲

血することがある、其の膨れた物を痔核と云ふ、痔核若し括約筋の内であれば内痔核と云ひ、外にあれば外痔核と云ふ。
〔療法〕酒類、茶、珈琲、脂肪の多い物及び辛い物などの飲食物は一切嚴禁し、勉めて運動せしめ、鐵鑛泉に浴せしめ、冷水灌腸をなすか、或は他の下劑殊に硫黄の内服が良い。急性に發したる者には、局所漏血を行ひ、又内痔核の外に出でたるは指に油を塗り、慎重に整復せねばならぬ。疼痛餘り劇しい時は、肛門に水蛭を貼けたり、或は氷で冷すが可い。それでも尙痛む時は、エドワルド氏注射法即ち濃石炭酸一分屈利設林五分の混合液八乃至十滴を鉛直に刺して注射すると、疼痛も止み、痔核も大抵消散するものではあるが、尙根治法としては外科手術に如くは無い。硫黄花の處方は左の如し、

▲硫黄花 三〇 重酒石酸加儼謨 二〇 白糖 適宜
右三包と爲し、一日三回一回一包宛

條血(さなだむし)

〔種類〕條蟲には(一)有鉤條蟲(二)無鉤條蟲(三)裂頭條蟲(四)矮小條蟲(五)方形條蟲の五

内科學

種ある。(一)は豚肉の体内に生息するもので、其の頭は大きく、而して四つの吸盤と鈎とが有り、人間に寄生すれば小腸の粘液膜に緊着しているから腸壁より離さうとしても、頸部で切れるものだ。(二)は其の長さ(一)よりも長く、四つの吸盤は有るけれど鈎は無い。これは牛肉中に生活してゐる。(三)は條蟲中で最も大きく、其の長さ二丈五六尺に達するのがある。其の頭は小さな乳棒程もあつて、其の側方は破裂状をなし、二條の吸溝がある。鯉・鮭・鰻の体内に棲んでゐる。(四)は矮小條蟲で、其の長さは三四分に過ぎぬ。頭には四個の吸盤があり、蝸牛の体内に宿つてゐること。 (五)は其の長さ七八寸で、頭は數多の鈎があり、犬の体内に育つてゐる。

〔原因〕言ふまでも無く、此の蟲或は此の蟲の卵を含める生肉或は半煮の肉を食するに由る。

〔病狀〕時には此の蟲が寄生してゐても、何等の病狀を呈せぬことも有れど、大抵は幾分の障害を來し、場合に依ては食欲が減り、悪心或は嘔吐をなし、又反對に飢餓を感ずることもある。又下痢と便秘と交代し、或は腹痛の起ることもある。又

鼻の孔が痒く、鼻孔が大きくなり、時々恐い夢を見、心臓の動悸が高ぶり、全身が倦み疲れ、或は頭痛を訴へ、精神不安を來し、段々重くなる。貧血を來し、身體瘦せ衰へ、眩暈がしたり、癩癩を發したりする。

〔療法〕此の條蟲の腸内に在るや否やは、仲々六かしい診察で、如何なる名醫も其の鑑定に苦しむ位である。故に素人は其の條蟲の幾分が肛門から出て、始めて其の居ることを確かめるに過ぎぬ。確めた後は、假令何丈の長いのが出て、頭が残れば、忽ち殖ゆるものであるから、これが根治法を怠つてはならぬ。乃て之を根治せしめんとすれば、先づ其の豫備療法として、條蟲の通路を潤くする目的、即ち腸内の宿便を除かねばならぬ。之には緩下劑を與へ、而して食料を大いに減じ、蟲の厭がる食物、即ち鹽を施した青魚に葱及び蒜を混ぜたる物を食し、斯くて可成は一日間程斷食をなし、左の藥を用ふるが宜い。即ち綿馬越幾斯三瓦を丸藥として與へ、其の後三十分間乃至一時間程経て、下劑を投するのである。下劑は、ヒマシ油十五瓦を濃い茶の上に浮べて服むのだ。果して條蟲が居れば、此の方法を用ひて殆んど下らぬことは無い。併し此の一日間の斷食は、仲々苦しい

ものであつて、菓子一つ位は可からう芋一本は差支無からうなご、食へるときは其の成績が悪いから一日位の餓は我慢せねばならぬ。又柘榴根皮煎や屈蘇花或は加麻刺も亦効能がある。柘榴根皮は一五〇〇程を常水十瓦に一晝夜も浸し、之を煎し其の煎汁一五〇〇に右の綿馬越幾斯を混じて用ふるが宜いけれど、甚だ手数を要する迂遠法である。屈蘇花は一五〇乃至二五〇を三分し、一時間毎に一杯の白葡萄酒に混じて用ふ、併し本劑よりも現今はカマラ八〇乃至一〇〇を二分し、オプラートに包みて毎三十分時に與ふるを賞用するやうになつた。

蛔蟲

〔原因〕蛔蟲は誰でも能く知る通り藍色を帯びて幾分紅く其の形は圓柱に似ても八寸に過ぎぬ。而して其の雌蟲の生殖器内には六千萬に達する卵子を發育してることが有る。所が此の卵子を嚙み込むと腸内で發育し立派に一人前否一疋前の蛔蟲になるのだ。我國は人糞を肥料にする所から此の卵子を含める

糞が野菜物に附着してゐる然るにそれと知らずに生或は半煮で食べると即ち腸中に入るのだ。一度腸中に入つて發育すると劇しい嘔吐などには往々胃腸に達し、尚之を吐き出すこともある。斯くて次第に蔓延すると、非常に多くの數に達し、睡眠時などには肛門や口或は鼻から匍ひ出すことがある。

〔病狀〕本蟲は腸内に寄つても、大抵は無害なるもので、左程の病狀を來さぬものだ。けれども或る場合には腹痛が有つたり、或は身體一般が倦み疲れを覺えたり、或は鼻の孔が痒く或は眼が熱したり、其の他條蟲の章で述べた様な病狀を呈することも有る。又時としては慢性の下痢を來し、如何に療治しても止らぬのが本蟲の驅除した爲に忽ち治ることがある。又或る場合には癩癩様の癩癩を起したり、頭痛眩暈惡寒などあつて顔色が蒼白く身體疲せ衰ふることもあるのだ。併し前述の如く、多くは恐るゝに足らぬものなれど、偶々これが喉頭に這入つたり、餘り多く發育して腸が狭くなつたりすると危険なことがある。されば、これが寄つてゐると知れたら驅除するに如くは無い。

〔診斷法〕糞便を顯微鏡で検査すれば直に其の卵子の有無が了るのだから、素人

サントニン
○・〇・〇・八三
カスカラサグ
ラダ流動エキ
ス
○・〇・三・八五
セント葉末
右爲一錠一回
に四錠
び蟻の蟻及
薬として著
し相談を著
て作つた處
驅蟲と名づ
る所一三三
で賣つてゐ

蟻蟲

は醫師に検査を乞ひ、若し有るとすれば驅除し、無いと知れたら一安心。

〔療法〕素人が手前療治として一二回試みようといふには、シナ花を一回二〇程を單舍利別二〇〇と混ぜて服むのだ。併し味の悪い薬だから醫士は之を用ひないで劇薬ではあるが多くは左の處方に依る。

△ 珊瑚寧 〇・〇・三 甘汞 〇・一 大黃末 〇・三 白糖 〇・五

右一包を爲し早朝頓服。之を三日の間朝毎に續け、四日目には、
△ リチニ油 一五〇

右濃厚茶又は葡萄酒に浮べて頓服すると、蛔蟲及び卵子までも大抵は驅り盡されるのだ。

斯くても人に依ては効を奏せぬことがある。然る場合には條蟲驅除法と同じ療法をせねばならぬ。

蟻蟲

〔原因〕非常に細い小さな圓い蟲で最も長いのも三四分、最も短い雄蟲になると僅に一分位に過ぎぬ。其の卵子が一たび胃中に達すると、遂に小腸及び盲腸

に來り、次第に繁殖して直腸に匍ひ行き、肛門外に出たり、或は糞便と共に排泄せられたりする。其の繁殖は頗る強く、爲に大腸粘膜の全面が之がために蔽はれ、恰も無皮の様な姿になることがある。而して人間の腸に入るには蛔蟲と同じ原因もあるし、又甲人が肛門の痒い所から不知不識手で之を掻き、自ら其の手に卵子が附いてるにも拘らず菓子や果物を持つて乙人に與へる、神ならぬ乙人は喜んで之を食べると遂に傳染するのだ。されば人の手は汚いものと思つて居らねばならぬ。

〔病狀〕腸の上部や盲腸位に籠つてる間は何の病狀も無いが、彼奴若し直腸の下部に降つて來ると劇烈なる痒さを覺え、随つて小兒又は不性な人になると、手で肛門を掻くやうになる。これは晝よりも夜寢床に入つて温まると甚しく痒い、斯くて搔いた其の手を消毒せず其の儘眠つて了ふと身體中は愚衣服までにも附着し、婦人に在つては腔中にまで這ることがある。

〔療法〕直腸内にゐるのは容易に除かれるが、腸の上部にゐる者に在つては仲々容易に除かれぬ。藥物としては矢張蛔蟲に用ふる者と同じが、之を與ふると

同時に大量の冷水灌腸を行ひ、且つ下剤を用ひねばならぬ。又冷水灌腸の代りに石鹼水或は一萬倍の弱昇汞水を灌腸することもある。肛門部が痒くて堪らぬときは幾分の水銀軟膏を塗擦すると痒く無いやうになる。斯様に療治して腸内の蟲を悉く驅り盡したとしても身體の一部分に附着してゐることがあるから屢々入浴して身體を清潔にし兼て衣服も亦着換へることが安心である。

十二指腸蟲

〔原因〕本蟲は其の大きき蟻蟲と殆んど同じいが、其の頭端に水蛭の如き嘔吸装置がある。腸の粘膜特に十二指腸の粘膜に大抵は附着して居り、而して其の粘膜より血液を吸ひ取り、其の身を養ふものである。其の人體に入る原因は矢張蛔蟲と殆んど同様であるが、又其の外に本蟲の卵子を含める不潔な水を飲むからである。

〔病狀〕全身が次第に貧血し、次第に衰弱し、呼吸が迫り、心臟の鼓動が進み、頭痛がし、浮腫が来る。これでも本病の爲だといふことを發見せず、他の療法をしてゐるか或は療治もせずに放棄つておくと、數月乃至は數年の後に至り、高度の貧

血に陥り、彼の世の人とならねばならぬ。これ本蟲は小さな蟲で其の血を吸ふ量は高の知れたものなれど、多くの蟲が絶えず吸つてゐるのであるから、遂に恐る可き結果を來すものだ。他の蟲は人の取る食物を幾分宛奪ふのであるけれど、本蟲は食物では無くて血を吸ふのであるから、實に恐ろしい奴と謂はねばならぬ。

〔療法〕顕微鏡検査をして本蟲の有ることを發見したる以上は條蟲と同じく綿馬越幾斯を用ひ、兼て下劑及び灌腸を試みねばならぬ。又近頃はチモールを賞用する人もある。兎に角綿馬越幾斯は大量即ち一〇〇以上を服するか、或は又中等量でも連服すると、嘔吐下痢、痙攣、昏睡及び視覺亡失などの危険がある。されば連服せしめねばならぬ場合にはチモールを代用するも可からう。今兩者の處方を示せば、

▲綿馬越幾斯 三〇 アラビヤゴム漿 一〇〇 薄荷油 一滴
單舎 一〇〇

右三回に分ち一時毎に服用

▲チモール 三〇 薄荷油糖 適宜

右六包に分ち一日六回一包宛

其他の消化器病

急性腹膜炎

〔原因〕原發症は感冒外傷、手術的創傷などで續發症は胃腸、肝脾、腎の諸内臓及び女子に在つては生殖器、其他傳染病、腐蝕性病、便秘、嵌頓ヘルニア、癌腫、結核などである。又肋膜炎に續發することあるを注意せねばならぬ。これは管に結核性肋膜炎のみでなく、膿性肋膜炎も亦然りだ。察するに肋膜腔と腹膜腔とは横隔膜の淋巴管に依て直接に連續してゐるからであらう。又極めて稀には急性關節癱瘓質斯に發することもある。又淋毒性全身病にも稀に續發することあるは淋毒性炎が腹膜に波及するからであらう。

〔病狀〕(一)瀰蔓性腹膜炎は大抵他病の續發病であるから、其の病狀は原病に因て相違するものではあるが、今其の共通なる點を略記すれば、大別して局所病狀、全身病狀とするが便利である。局所病狀の主なるは疼痛であつて、始めは大抵一

部分に左程でも無いが、後には極めて劇しい疼痛を全腹部に來すが例だ。斯くて軽く壓しても其の痛みが増し、後には衣服や夜具が觸れても堪へられぬ程に痛む。次に發病後次第に腹部が膨れる。併し大抵は平等に膨れ無いで擴張したる各腸管の境界が判然と腹壁面に現れることが本病の特徴といつても可い位だ。されど又腹壁が板の如く硬くて膨張せぬのも多くある。次に胃腸は其の損害を受け、概して嘔吐を發し、其の吐物は多くは綠色を帯びた粘液及び水様液だ。併し嘔吐せぬ本病者もあることを覚えておかねばならぬ。腸は前述の如く鼓腸を來して膨れ、大抵は便秘するが、又稀に下痢することもある。次に横隔膜は高く擧つて爲に肺臓や心臓は上方に壓せられ、呼吸の障害を受けること著しくなる。これにて局所病狀の大要を述べたが、全身病狀は第一に不眠である。これは腹痛の爲でもあらうし、又一般の不安からでもあらう。次に腹膜炎性の浸出物中より毒物が腹膜に吸收せられて、血液に達したる場合には非常に虚脱して其の顔貌が速に憔悴へ、頬は疲れ、眼は陥落み、鼻が高くなる。之を醫道では腹顔と名づけてゐる。それより唇や舌は乾き、四肢の皮膚が冷くなつて藍色を

帯ぶるやゝになる。之で血液の運行が十分で無いといふことが了る。次に脈搏は細く緩くなる。之は本病になると直ちに現はるゝ徴候で、段々重くなれば遂に脈搏を手に應せぬやうになるか、其の数が非常に増して、一分時間に百二十乃至百四十にも達し、或は之より増すこともある。次に熱は毎症不同であつて、往々外表は低いが内部は大いに昇ることもあれど、其の度は大抵高く無いのみならず時に依ては平温以下の虚脱温を見ることが少く無い。右の如き病状で多くの患者は数日にして死ぬものであるが、併し其の原因に依て違ふ。若し胃腸の穿孔より來つたのや、産褥性腐敗性の多くは到底死を免れぬが、稀には腹膜炎性の浸出物が外方或は腸内で破潰れ遂に癒ゆることがある。即ち月經流産又は産褥に續發したる輕症や急性關節痲痺質斯の經過中に發生する本症などは大抵癒ゆるものだ。又慢性に轉じて容易に抄らぬものもある。(二)急性限局性腹膜炎の病狀を之も局所と全身とに別けて説くと、其の局所病狀は大抵前者と殆んど同じいが、唯其の異なる點は蔓延の區域が狭い丈である。故に之を觸診すれば其の部分に瘤の様に限局したる抵抗がある。全身病狀は之も前者と殆ん

ど同じいが、一體に微弱であつて、不正の熱がある。

〔療法〕重症腹膜炎に於ては百中の九十九まで治る見込は無いが、唯對症療法をして幾分寛快せしめるに過ぎぬ。而して可及的原因療法を施さねばならぬ。斯くて第一日には、毫も食物を與へず、第二日目から流動物を少量に用ひ、嚴重に身體を安靜にし、精神を慰めて悲哀の念を去らしめるやう導かねばならぬ。次に水蛭を貼けて瀉血することは、重症で全身の衰弱せる患者には禁すべきだが、限局性で而も一般の狀態が左程に衰弱せぬ中は八疋乃至十五疋で血を吸はせると疼痛の快くなることがある。次に氷塊で腹部を冷すことは、疼痛を去り腸の蠕動を減少するから仲々効あるものなれど、患者に依ては之れに堪ることが出來ぬのみならず、却つて害あることも稀にある。斯る場合には反對に熱布或は熱罨法を施して効の有ることがある。内服薬で最も重視せられる物は阿片で次の處方に依るか、

▲阿片末 〇・一 白糖 適宜

右分三十包 每一時一包宛

内科 學

或は阿片丁幾を灌腸するも宜い。斯く一時間毎に阿片を與ふるは中毒を來さぬかとの恐れもあるけれど本病者は比較的中毒し難いものだ。これは腸が阿片を吸収することが緩かであるからである。兎に角阿片は疼痛を減じ嘔吐及び暖氣も少くなり幾分か炎症の蔓延を防ぐ。又モルヒネの皮下注射も行はねばならぬ場合が往々ある。又嘔吐には氷片を喫せしめ時に依てはクロロホルムやコカインを用ふることもある。次に鼓腸には氷水を腸中に注入し或は管を腸中に入れて瓦斯を洩すが宜い。次に虚脱の状態にはシヤンペン或は葡萄酒を飲ましめ頭部に氷嚢を置き頸部及び膀胱に芥子泥を塗り手足の熱浴を行ひカンフル或はエーテルの皮下注射を施さねばならぬ。次に滲出物の吸収を促すには消化し易い食物例へば牛乳卵黄スープの如きを與へ芋類辛き物及び酸味の強き物は絶對的に禁するが肝要だ。右の如くに治療しても日一日に重くなる場合には外科治療即ち開腹術を行つて起炎毒及び腐敗毒を腹腔より除かねばならぬ。元來本病は大抵不良の結果に終るものなるに大抵は好結果を得る外科術を捨て舊式の治療例へば水銀軟膏やベラドンナエキスを塗つ

たりして時日を費し衰弱虚脱所謂手遅れになつてから外科醫に送つた所で最早詮無きことである。

慢性及結核性腹膜炎

〔原因〕慢性の結核性で無い腹膜炎は稀で有つて多くは結核性の腹膜炎である。兎に角慢性は急性より轉じたり久しく滯血性の腹水があつたり或は慢性心臓病肝臓病などに續發する。結核性の腹膜炎は諸種の腹膜炎中で最も多く之は肺結核結核性腸潰瘍女子生殖器結核などから續發するものである。而して單純の腹膜炎でも結核性になることあるは恰も肋膜炎と同じである。

〔病狀〕急性より轉じたのは急性の如く危急な病狀が次第に緩ぐけれど其の他の病狀は依然として退かぬ。併し急性より轉せぬ所の本病は最初より緩かだ初めは何病であるか確診出來ぬ中に恰も潜伏性に發するものだ。斯く腹痛も鈍くて幾分か腹が重苦しいやうに覺え而も其の疼痛が時々消えることさへもある。腹部の膨滿も甚だ軽く或る症に至つては更膨れぬことがあるのみならず却つて陥没み唯腹部が硬くなるのがある。去りながら液性の滲出物が増

すか或は結核性の新生物が発生すると、著しく膨満れるものである。觸診すると腹壁を隔て、一種の抵抗ある結節状の隆起となつて手に應ずるから頗る固有の結果を得ることがある。肝臓の下縁が肥大してゐることを觸知することもある。滲出物の大量なることは腹部の著しい膨満や波動感覚や打診に依つて知られるけれど、大抵の場合には腸管が相互に癒着してゐるから患者が體位を變へても腹水の如くに移動せぬものだ。先づ病状は難と斯んなものだが、甚だ治り難い病で、多くは數週乃至數月を経ぬ中に不歸の客となる。されど稀には快くなつて殆んど病苦を感せぬやうになるのも無いが、將來又新に他の臓器に結核を生ずることが往々有るものだ。

〔療法〕これといふ特別の善い療法も無いが、一般の攝生法を嚴守するは最も大切な事だ。即ち第一に心身の安靜を計り、次で新鮮なる空氣を呼吸し、日光に觸れ、次で食物は急性と同じく常に腸管の勞力を軽くし、極めて消化し易く、而も容易に吸収し易い滋養品を取らねばならぬ。其の種類は矢張急性と同じく、牛乳スープレ、卵黃粥汁、少量の豆腐、少量の細挫肉及び淡泊とした魚の刺身位な物を

用ふるが宜い。斯く攝生を守り、局所療法としては温巻法、プリスニッツ氏温巻法は永久的に施し、便秘には緩下劑或は灌腸をなし、下痢には阿片劑を應用するが宜い。又沃度劑即ち沃度加留護や沃度鐵舍利別は往々効あることなれど、結核性には一般の結核療法肺結核のを行はねばならぬ。又滲出物の多い處置としては利尿劑即ち醋酸カリウム液やチウレチンを用ふるの必要がある。其の處方例を示せば、

▲醋酸カリウム液 一〇〇 ヂキタリス葉浸 (〇・五—一〇〇〇)
海葱醋蜜 一五〇

右一日三回に分服
▲チウレチン 三〇 單舎 八〇 薄荷水 一〇〇〇
右一日六回に分服

本病も亦外科療法が偉効を奏するもので、即ち開腹術を行つて滲出物を排泄せしめ、沃度ホルムガーゼを填める方法を以て全快せしめたる例がある。

肝臓充血

肝臓充血

〔原因〕大食して運動せずにあたり、酒精、唐辛、芥子などを度に過ぎて食べたりして往々本病を促すものだ。又寄生蟲、月經の閉止及び痔血が常に習慣的になつてゐる人の偶々止る場合にも本病を發す。其の他心臟諸病、肺炎、肋膜炎の爲に肺を壓迫することや脊椎及び胸廓の畸形等である。

〔病狀〕右の最も下の肋骨の部に壓へつけらるゝやうな感じに搗て加へて疼痛を覺え、皮膚蒼白くなり、食欲減り、嘔吐を催し、便秘を發し、屢々黄胆になることがある。斯くて肝臓は大きくなり、時に依ては臍の邊にまでも達し、頭痛を訴へ、精神は鬱閉を感ずるものである。

〔療法〕淡泊とした食物を取り、酒類を禁じ、身體を安靜にし、肝臓部に水蛭を貼けて血を吸はしめ、心力の衰へたる者にはストロファンツス、丁幾ヂキトキシンなどを用ひ、尙下劑を與ふる必要がある。下劑としては左の處方薬が宜い。

▲人工加爾々斯泉鹽 一五〇 水 一〇〇〇

右一日三日食前に分服

〔原因〕胃十二指腸加太兒に來り、或は寄生蟲が胆道に這入たり、或は感冒或は心臓の病に續發し、特に格魯布性肺炎に來ることが往々ある。又趣味あるは大に立腹したる時に發する一事だ、之を以ても立腹するといふは宜しく無いこと、謂はねばならぬ。

〔病狀〕食欲が減り、舌には黄芭の苔が生え、何を食べても苦く、さうして惡心を催し、續いて皮膚に黄色を呈はし、白いハンカチを以て拭へばハンカチまでが黄色になる。又大便は色を失つて土色の様になり、尿は暗色に變じ、黄色の泡沫を生ず。次に皮膚が痒くなり、次第に瘦せ、疲れ、眠りを催し、易く精神鬱々として頭が重く、黄視症を發し、俄かに立つと眩暈を起し、或は時に譫語を言ふことがある。又便秘に苦しみ、遲脈になるのが本病の肝要なる徴候だ。次に重症になると皮膚内臓の出血及び衄血等の出血を來すことが往々ある。素人見には仲々重い病の様にあれども、其の割合に重からず、重症で無いのは大抵三週間遅くも六週間位で治るものである。

〔療法〕易化滋養の食物即ちスープ、牛乳、果實、蔬菜類、瘦牛の肉、粥、白麴、豆、腐、蕪湯